
青春はそれを我慢できない。

九戯 右佐偽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春はそれを我慢できない。

【Nコード】

N7285P

【作者名】

九戯 右佐偽

【あらすじ】

「わたしと友達になろう」

こともなげに、まるでそうするのが当たり前のように三間坂 八代はそう言った。

不良風高校生『諏訪 秋葉』と謎の変態女子高生『三間坂 八代』

が織り成す、痛快！学園コメディー！

ラノベの掃き溜め、ここに推参！！

題字「仙人掌の中の人」

携帯での閲覧の際には改行倍率を二倍にすることをオススメします。

ブローグ

諏訪^{すわ} 秋葉^{あきは}という人物を語るには、避けては通れない、いくつかの項目が存在する。

それは例えば、人生に置いての矜持だったり、人格を決定付けたであろう様々な記憶や過去の出来事だったり、複雑な人間関係だったり——まあ色々ある。

そんな、誰にでも共通する個人としての概略みたいなものの中で、ひととき異彩を放つ説明文。 カテゴリーとしては友人関係に当たる項目。油性マジックで塗り潰したいどころか、バケツ一杯の墨汁をブチ撒けてでも消し去りたい名前が、その中に存在する。

とはいえ、この名前——諏訪 秋葉。すなわち、俺という人物を語る上ではどうにも外せないらしく、また残念なことに、説明ツールとしては一番優秀な項目なのだ。

馬鹿で天才。 美人で変態。 ドリーマーなりアリスト。 まるでカオスの塊であるその友人の名前は……。

それでは、 ゆっくりと語らせてもらおう。
まあ、コーラでも飲みながら、気楽に聞いてくれると助かる。 なんなら聞き流してくれてもかまわない。

コレはそんな感じのスタンスで聞いてもらうのが一番なんだから……。

V S 三間坂 八代 (1)

「わたしと友達になろう」

こともなげに、まるでそうするのが当たり前のように、みまさか三間坂
八代はそう言った。やしろう

「嫌だ。断る」

勿論。そんなものは却下だ。
コイツがやった事を考慮したのは当然として、それよりなにより、
今のところ俺は友達を作るつもりはまったく無いのだ。
作らないと決めていると言ってもいい。

「何故だ？ こんな美人で可愛い女友達、お前のような年中発情期
の男子学生なら、喉から内臓をブチ撒けてでも欲しがるはずだろう
？」

「それ普通に死ぬからな」

俺の拒否に、三間坂は心底不思議そうな表情を浮かべている。
というか今こいつ、平然と自分を「美人で可愛い」とかぬかしやが
った。

否定はしないが、どうなんだそれは？

「言っておくが、わたしはエロいぞ。 なんせこの身体だ。 もて
余していると言ってもいい。

……そうだな。 わたしと友達になったら三回までなら揉ませて
やる」

そう言って、背中をそらせながら、日本の女子学生の平均サイズをはるかに上回るであろうその胸を強調し、見せつけてくる。

どこを、とは言わずに、ボディランゲージで指し示す当たりに、微妙に手慣れた感が伺えた。

しかし、……くそっ！ マジでデカいぜ！ ボーリングくらいできそうだ！

一瞬、八代の胸から取り出したボーリングおっぱいボールを、これ以上ないほどの綺麗なフォームで投げる自分を想像したが、すぐに頭の中から振り払う。

「揉まないし、揉みたくねえ！」

俺は嘘をついた。ここは素直に認めよう。

だが、男には嘘をついても守らなければいけない何かがあるはずなんだっ！！

「フハハ、やはりお前は良い。わたしのこの誘いを断った男はお前が初めてだぞ、諏訪 秋葉」

「初めてって、今まで何人にそんな恐ろしい誘い文句を使ったんだ？」

「喜べ。男にはお前が初めてだ」

……色々ツツコミたいが、頭が痛くなりそうなので流す。勉強ができる馬鹿^{たち}ってのは、こういうのを謂うんだろっか？
なるほど質が悪い。

「冗談はさておき、わたしの申し出を受け入れろ。　そうしないと
お前は後悔することになるぞ?」

あからさまに雰囲気を変え、八代は凄味を効かせながら、何やら
一枚の写真をスカートの中からゴソゴソと取り出した。

スカートのポケットからじゃなく、スカートの内側から。

その際にチラチラと、不可抗力とはいえきわどい部分が見えた気が
するが、俺は男らしく見なかった事にする。

「てか待て!　　いつたいどこから取り出してんだよ!？」

「ん?　　どこって、パンツからだが?　　大事なモノだからな。　落
とさないように一番安全な場所に隠していたのだ」

そう言いながら、取り出した写真を何でもない様に俺に手渡して
くる。

ほんのりとした生温かさを意識してしまう自分を諷めつつ、いつ
たい何の写真だと目をやった瞬間、そんな微妙な気持ちは跡かたも
無く吹き飛んだ。

絶望、反転、意味不明、羞恥、啞然――。

あらゆるネガティブな感情がその瞬間に頭を埋め尽す。　一番で
かいのは「何故」と「?」。

「お、おおおおお前っ!!　　何でこんな写真を!？」

「よく撮れているだろう?　　厳しいアングルだったが、自慢の一枚
と自負している」

狼狽る俺とは対照的に、八代は不敵な笑みのままそう言い放つ。

誰もが知られたくない姿、見せたくないモノ、禁忌の領域、そういうものを持っているはずだ。

いくなればトップシークレット。　ファイヤーウォールの向こう側。　国家機密。

それを、その国家機密にも匹敵するその姿を。　あろうことかの女はパンツの中から取り出しやがった。

「何故だ？　場合によっては、俺はお前を殺さなくてはならない」

「フハハ、怖いな。　だがわたしが死ねば、その写真が自動でネットにばら撒かれるように自宅のPCにセットされている」

「な、なんてテンプレートな仕掛けを！！」

「諦めろ、諏訪　秋葉。　お前はわたしの友達になるしかないんだよ」

色仕掛けの直後に、有無を言わせぬ脅迫である。　ハニートラップもびつくりだ。　いったいコイツはこの女スパイなのか。

「安心するがいい。　お前がわたしの友達になると宣言すれば、その写真も、元のデータも全て処分することを約束しよう。」

……ちなみに、それは写真用に切り出しているが、元データの方は動画だ」

「……………！！！！！！！！！！」

コレが……、動くというのか？　自分でさえ客観的に見たこともないこの姿が……！！

その写真には、下半身を露出し、あぐらをかいたままテレビ画面

を凝視する俺が写っていた。

その膝元にはそつとボクスティツシュが添えられており、見つめているテレビ画面には、名も知らない全裸の女優が写っている。

つまり、まあ、男の子なら誰もがやるあの時の姿である。

しかし、もの凄く間抜けだ。見れば見れるほど「俺、こんななのか？」と自問自答してしまいそうになるその姿。

武士ならば切腹ものだろう。

「ていうか、これ普通に犯罪だろうが！！ 盗撮じゃねえか！」

「馬鹿をいうな。それは小汚い変態がやった場合のみ適用される法律だ。わたしのように美人で可愛い、綺麗な変態がやった場合は法令の範囲外だ」

「無茶苦茶言うな！！ 変態に綺麗も汚いもあるか」

「ふむ、想像してみるといい。いくらわたしが綺麗な変態だからといって、お年頃なものには変わりない。おまけにわたしは性欲を持て余している。

そんなわたしが、そんな写真をここ数日、毎日肌身離さず持ち歩いていたんだぞ？ フッフ……我慢するのが大変だった」

「な、何を我慢するんだよ……？」

性欲を持て余す——だと。

俺は生唾を飲み込む。ゴクリという音がやたら頭に響いた。

「正直、そんな写真をパンツに入れてたら角がチクチクと下腹部や内ももに刺さって痛くてな。いっそ、その辺に捨ててしまおうか

と何度も思ったが我慢した」

「そこは我慢して当然だろうが！！　　といつかこんなもん毎日持ち歩くな！！」

この女は危険だ。　　主に頭が。

「さあ、いい加減勘念して、わたしの友達になれ！　　諏訪　秋葉っ
！！」

勝ち誇った顔で、まるで自分に非などないかのように言い放つ。
そう、これが俺の友達。

三間坂　八代という女はこんな奴だ。

V S 三間坂 八代 (2)

01

さて、序盤から急展開すぎて意味不明な流れになったが、勿論、こうなった経緯はちゃんと存在する。結果があれば原因があるのは自然の摂理だ。

ただ、この八代に関しては、そんな大いなる自然の摂理でさえ意味をなさない。

なんせ原因から結果に至るまでの全てが支離滅裂、不協和音、混沌無秩序なのである。

だから、俺はアイツが、何故こんな俺のようなはみ出し者に興味を持ったのかさえ、今だに理解出来ないでいる。

類は友を呼ぶなんて諺もあるが、アイツと同類の人間が何人もいるなんて考えるだけで恐ろしい。そして俺は断じて同類なんかではない。ここ重要。

それでも事の始まりを語れと言うのなら、それはその日の放課後、時間にすれば、俺が八代に友達になれと『脅迫』される、せいぜい30分前くらいだろう。

——事件は一通の手紙から始まった。

なんて、お決まりのミステリー小説風な出だしになってしまっが、本当なんだから仕方がない。

場所は教室。時間は放課後。それは一人の女の手によっても

たらされたんだ。

02

「はいよ諏訪くん。ラブレターの出前です」

ラブレターというものを知っているだろうか。

想い人へのアレやコレやを、情感たつぷりの詩的な文にしたためて、ファンシーな便箋なんかに包んだアレである。

携帯電話が普及し、電子でできた手紙が、見えないままにビュンビュン飛び交う現代において、廃れていった文化のひとつとも言えるだろう。

その廃れ方は目を見張るほど凄まじく、生まれて17年、俺には一通も届かなかった程だ。

俺がラブレターを貰ったことが無いのは、お手軽に送受信できる電子メールの普及のせいに他ならない。と、思いたい。

そんな、今や想像上の存在ともいえるラブレター。

この幸せを具現化させたような物質を俺に差し出してきたのは、
かすがやまだいさん
この春日山第三高校の一生徒、ひのやま日野山 あびこ安毘子こと通称『アビ子』
その人である。

「悪いなアビ子。俺はお前の気持ちには答えられない。さっさと帰って、歯あ磨いて寝ろ」

「いやいやあ、これアタシが書いたわけじゃないし。それに何？
今もしかしてアタシフラれた？ 振られちゃったわけ？

諏訪くんなんか好きでもなんでもないし、ましてや告白する気な

んてサラサラあるわけ無いけど、ここまでナチュラルにフラれちゃうアタシってどうなの？」

「うるせえよ。もしかしてじゃ無い。今、お前は確実に俺にフラれたんだ。」

言うなれば喪女だ。モテない女だ。分かったら一人で枕を噛みちぎって泣きながら寝るんだな」

「うわあゝ、フッタ相手によくそこまで言えるよね。諏訪くんってもしかしなくてもドSの人？」

「いや、ハードボイルドな人」

「古っ！！ キモッ！ 臭ッ！！」

「うつせえ！ 臭くねえよ！ 微妙に傷つくだろうが！

……それで、そのラブレターはなんの冗談だ？ なんかの罰ゲームか何かか？」

「ラブレターを貰って罰ゲームを疑うなんて、諏訪くんの青春がいかに寂しいものであるかが伺えるね。」

安心していいのよ諏訪くん。世の中全てが悪意のみで成り立っているわけじゃないの」

諭すようにそう言うアビ子の顔は、慈悲に満ちていた。いや、憐れみか？

そりゃ、俺だってラブレターなんてものを貰うのは素直に嬉しい。なんせ生まれて初めての経験なんだ。

それが下校時の靴箱やら、しらないうちに俺の席の机の中にそっ

と忍ばせてあったモノなら、たぶん今頃は小踊りしながら喜んでるだろう。

……しかし、その受け渡し人がこのアビ子というなら話は別だ。こいつの持つてくるモノに俺が喜んだことなど一つもなく、むしろ面倒なことにしかかった事がない。

『何でも屋』。このアビ子には、我が校において、彼女への認識をそのまま表したような肩書がある。

あらゆる仕事をお客の言い値で請け負う何でも屋。部活のヘルプから、迷子の猫探しまで、この学校の生徒を相手に手広く商売しているのだ。

かく言う俺も、その仕事のうちの一つを手伝った縁があり、以来なにかと、こうして話をするようになったわけだ。

「いやあ、モテモテだねえ諏訪くん。お姉さん妬けちゃうよ」

「嫉妬心の欠片もない爽やかな笑顔じゃねえか」

笑いながら、セミロングよりやや短い髪を俺宛てのラブレターで扇ぎ、サラサラと揺らすアビ子。

その華奢な細腕には、サイズの合わないやたらと不格好なゴツイGショックが、手の動きに合わせて揺れていた。

なんともアビ子らしいというか。「花より現金」がもつとこの彼女の性格を如実に顕しているアイテムだ。

「それはそうと、コレ受け取ってくれないかな。料金前払いだから、そうしてくれないとアタシが困るんだよね」

「お前が困ろうと俺は一切困らない」

「ふふん。 そんな強がり言ってるで大丈夫か？ …… アタシは依頼人の顔を知ってるんだぜ？」

「だから何だよ？」

「言つとくけど、諏訪くんには勿体ないくらいの美人よ。 オマケにスタイルも抜群！ これを逃せば、諏訪くんなんか後は一生脳内彼女としか恋愛できないんだから！」

「酷いことをサラツと言うな！ 俺の頭に脳内彼女なんか居ねえよ！」

「あらゴメンなさい。 アキバなんて名前してるから……。」

「全国の秋葉さんと、某電気街の人達に謝れ」

「冗談はさておき、本当に受け取ってよ。 大丈夫、絶対後悔させないから」

「そのセリフでバリバリ後悔フラグがたった気がするんだが」

「フラグなんて現実には存在しないわ。 要は認識よ。 幸せだと認識すればどんな不幸なことだって、幸せに思えるものよ」

「それ全然フォローになってないからな」

逆に言えば、幸せなんか無いってことじゃねえか。

しかし、こんなやり取りも時間の無駄なのでさっさと手紙を受け

取る事にする。

あくまで、ストーリー進行の停滞を阻止する為であり、美人からのラブレターが気になったとかそういう事では無い。 いやマジで

手紙を受け取り、封筒の表面を見てみる。 白いだけで差出人の名前すら書いてない。

封止めに使われている猫のシールだけが、辛うじてファンシーな演出を……していなかった。

よく見ると、猫の額には「殺」という文字が描かれており、その瞳は怯える鼠を見据えるようにカツと開いている。 口はこれでもかと言わんばかりに開き、二本の牙と舌が威嚇する様に飛び出していた。

どこでこんなシールを購入したのかも気なるが、何よりラブレターにこのチョイスは無いだろう。

「おい、なんだこの斬新すぎるラブレターは？ そもそもこれは本当にラブレターなのか？ 恋心の欠片も伺えねえよ」

「駄目だよ諏訪くん。 人の感性を否定するような人間は大物にならないよ？」

「感性うんぬんの問題より、明確な敵意しか感じられないが」

「まだ中身も見えてないのに何言ってるのさ。 手紙は風体より中身が肝心！ きつと素晴らしい、感動的な恋心が綴られてるんだよ」

やたら押してくるアビ子にせがまれつつ、その敵意剥き出しの猫シールを剥がす。

中には、外見同様、味も素っ気も無い便箋が一枚。 俺はソレを

無造作に取り出し、折りたたまれた文面を視界に入れた。

——絶句した。

驚きである。ここまで引っぱり、「それでもこれはラブレターなんだよ！」と強調してきたアビ子も流石に目が点になっている。結果から言おう。これはラブレターではない。

以下、その内容。

『よお、マザコン。

最近調子こいてるお前を叩き潰してやるから、今日の放課後体育館裏まで一人でこい。

俺、超強いから。

いつとくけどお前なんて指先ひとつで木端微塵だから。開始三秒で終わらせっから。

まあ、これを読んでビビりすぎて座り小便しちゃったら、来なくてもいい。

ただし、その時点で、明日からのお前のあだ名は負け犬に決定だ。by正義の味方』

手紙を読み終えた時点で、俺がソレを無言でビリビリに引き裂いたのは言うまでもないだろう。

そんな俺を見て、「あ……あはは」と乾いた笑い声を出すアビ子。

「素晴らしく感動的な文章だったな」

「こ、こんなはずじゃなかったんだけどね……。まさかあの子がこんな手紙書くなんて」

「で、俺はどうすりゃいいんだろっな？ この正義の味方様に、木端微塵にされりゃ良いのか？」

「う、うん……それはどうなんだろう？」

ほらな？ コイツが持ってきたモノで俺が喜ぶわけがないんだ。こうして、俺の平和な放課後は、ラブレターを装った果たし状により、いつきに血なまぐさい放課後へと変貌した。

v s 三間坂 八代 (3)

中学時代。 今では、こうやって語るのも恥ずかしい思い出なのだが、俺はわりと荒れていた。

「斜に構えていた」なんて言えば聞こえはいいが、まあ、ただ単に捻くれてただけだ。

盗んだバイクで走り回ってみたい、 渡り廊下で先輩を殴ってみたりと、往年の思春期ソングばりの事も一通りやったりもした。

—— 今となつては黒歴史以外のなにものでもないが。

そういう中学時代を過ごしていた俺である。 慣れていると言うわけではないが、この手の荒事にも、多少の心得はあるつもりだ。ましてや俺は、この学校に入学してから一年が経つ今の今まで、いわゆる不良系の学生というものを一度も目にしていない。

みんな真面目で良い子ちゃんなのだ。

そんな周囲で、 そんな過去を持つ俺である。 案の定、価値観というかノリというか、そういう普通の空気とは、 妙に肌が合わないかった。

疎外感とはいかないまでも、微妙なズレを感じたまま、この一年を過ごしてきたわけだ。

そりゃ目の敵にもされるだろう。 周りに馴染めない奴は、攻撃されて当然なのだと言う事も理解しているつもりだ。

ただ、今までが、運よくそういったものの標的に遭わなかっただけで、いつこうなってもおかしくはなかったのだ。

「本当に行くの？」

なんの悪びれた素振りもなく、アビ子がそう聞いてくる。

「行くさ。この手の奴等は無視したって無駄だ、とことんやるのが一番なんだ。それに、舐められんのは好きじゃねえ」

「そっか。んじゃまあ、ガンバってね」

実に軽い。なんだコイツ？　そもそもお前が持ってきた手紙でこんな事になったというのに、微塵も悪気がなさそうとはどういう事だ。

文句の一つも言いたくなかったが、心配されるよりは無関係を気取られた方が楽なのでそのまま無視する。

あくまで、コイツと俺はドライな関係。慣れ合いはこちらとしても望んじやいないのだ。

俺はそのまま教室を出て、目的地へと向かうべく、指定場所である体育館裏を頭の中に思い浮かべた。

普段ならめったに生徒が近付かない場所であり、何かの用でもない限りそうそう縁がある場所でもない。俺だっていまだに立ち寄ったことさえない場所。

要するに、標的を集団で囲むにはうってつけの場所だということなのだろう。

そう考えれば、手紙の差出人である正義の味方と名乗る馬鹿は、十中八九ひとりではなく複数人で待ちぶせていることだろう。凶器だっけ持っているかもしれない。

最近の若者は切れやすいともよく言うし、ひょっとすれば俺もただじゃ済まない気もする。

それでも不安なんて感じないのは、ただ俺が楽天的なだけなのか、それとも平和な日常ってやつに飽きてきていたせいなのか。

ともあれ、久々の荒事の予感に、俺のテンションは少しだけ上向きになっていたことは事実だった。

——上向きになっていたのは事実なのだが。

「遅かったな、諏訪 秋葉」

放課後の体育館裏。俺の予想を覆し、その場所には手紙の差出人である正義の味方が、一人で俺を待ち伏せていた。

やや日も傾き、紅いというよりはオレンジ色に近い太陽が、日中には日射しのあたらない体育館裏を暖色系に染め上げる。

そして、少し湿り気を帯びた地面を踏みつける様に、仁王立ちで腕を組み、俺に真っ直ぐと挑発的の笑みを浮かべるそいつは、粹がった奴をちよいとしめてやろうと画策する不良なんかではなく、それどころか男ですらなかった。

腰までとどきそうな長い黒髪に、気の強そうな釣り目がちな瞳と、すっと整った眉目。

上質なシルクを思わせる様な白い肌には、僅かに曲線を描く、薄い桜色の唇が映えていた。

校舎側から漏れる逆光で、やたら強調されて見える恐ろしく均整のとれたボディラインも、コイツが男性ではない事を如実に語ってくる。

文句なしの美少女。それこそが、こいつの第一印象である事は間違いない。

そして、俺を待っていたらしいこの美少女は、あの手紙の差出人である可能性が高く、もしそうなら、俺はこの美少女に木端微塵に

されるというわけらしい。

……いや、されないけども。

「それとも、わざと遅れて気を焦らす作戦なのか？ フツ、噂と違い、なかなかの策士家でもあるようだな」

遅れたのはただ単に場所を探していた迷っただけなのだが、この状況に俺のデキの悪い脳みそは対応しきれずフリーズしていた。まさか女とは思っていなかったからな。

「あゝ、ちょっと待ってもらえるか。いまいちこの状況が理解できないんだ」

「私が正義の味方だ」

混乱する俺に、目の前に立つ美少女がそうキツパリと言い切る。これで可能性は確定へと昇格した。いや、降格なのか？

「もう一度言おう。私が、正義の、味方だっ！！」

「いちいち句切って強調しなくてもいいんだよ！！」

よほど正義の味方と言いたいらしい。その美少女はなにやら満足そうに笑みを浮かべている。その笑顔が普通に可愛くて、ちょっとドキッとしたのは秘密だ。

「それで、その正義の味方様が、なんで俺に喧嘩売ってくるわけ？ 正直迷惑なんだけど」

ややぶつきらばうに、威嚇しない程度の口調で問いかける。

相手の出方が分からないのもあるが、正直、女と殴り合いの喧嘩なんかゴメンだ。

別にフェミニストを気取るつもりもないが、女と殴り合いなんて気分が良いものではない。

「いや、別に本当にお前を木端微塵にするつもりは無いんだ。あんな挑発的な文章にしたのは作戦なのだよ。

ここ数週間、私はお前を監視し、観察した。その結果、ああいう文章にすれば、確実にお前を呼び出せると踏んだわけさ」

美少女は得意満面でそう語る。 いや、待て。 監視？ 観察？ この女はなんの話はしているのか。

「は？ 言ってる意味が分からないんだけど」

「ぶっちゃけお前をストーキングした」

ぶっちゃけすぎである。

会話とはキャッチボールだとよく比喻されるが、これでは投げる球がミサイルみたいなもんだ。 キャッチどころの話じゃない。

案の定、俺の耳と脳はその意味を理解できずにいたので、ここは避難回避の一手を打つことにした。 いわゆる聞いてないこと作戦である。

「聞こえなかったか？ 私はお前を付け回し、その一挙手一踏足を観察し、食事の内容からトイレの回数に至るまでの全てを監視し、本棚の裏に隠してある成人指定図書の数冊まで把握するほどに調べ上げたのだ。

その証拠としては何だが、その数冊ある本の傾向として、スクール水着ものにえらく偏って収集されていたが、あれはお前の趣味

か？」

無理だ。聞いてないこと作戦失敗である。今度こそこのミサイルは俺の耳と脳に着弾し、爆発した。まさに木端微塵だ。

「ふざけんな！　なんだそれ？　本当にストーカーじゃねえか！」

「だからそう言っているだろう。　気を悪くしたなら謝ろう、ほれこの通りだ」

ぺこりと頭を下げるが、　そんな謝罪など無意味だ。　そんな形にもなっていない誠意では、俺の純真な男子心は救われない。

「だいたいお前は誰なんだよ！？　なんで俺なんか付け回したりしてるんだ！」

その言葉を聞き、ストーカー女がニヤリと笑う。　まるで待ってましたと言わんばかりに。

「私の名前は三間坂　八代。　今日からお前の友達になる者だ！！」

v s 三間坂 八代 (4)

友達。俺の耳が突発性の難聴にでもなっていない限り、そう八代は言い放った。

ただ残念なことに、それは聞き間違いでも、ましてや俺の耳がおかしくなったわけでもないのだろう。

なんせ今の俺は、この目の前にいるストーカーの動きを何一つ逃すまいと、五感をフルに動員し、全神経を集中させているのだ。

聞き逃すことなどあり得ない。(俺の48のスキルの一つ。コンセントレーションマックスである。名前はいま付けた)

もはや喧嘩の腕がどうの、凶器の所持がどうのという話ではない。この三間坂 八代と名乗るストーカーの存在そのものが、俺にとつては危険なのだと察知し、認めた。

「友達——だと？」

「そう、友達だ。知らないか？ 富士山の頂上でおにぎりを食べたり、光る指先を合わせあったりする、あの友達だ」

お前は宇宙人なのか？ なんてツツコミを入れたくなつたが自重する。

今の俺に課せられた使命は、いかにこの危険人物との接触を断ち、今後の穏やかな生活を取り戻すかである。友達など論外だ。

「何で俺なんだよ？ 友達くらいその辺にいる奴等でいいじゃねえか。ましてやお前は女だろ？ 異性間の友情は成立しないなんて説もあるぜ。俺はその説を全力で支持してるから残念だが他を当

たつてくれ」

俺なりに回避しつつ、やんわりと断りを入れてみる。　だが、そんなものはこの変態には通用しなかった。

「女では駄目だと言うのなら性転換しよう。　今日から私は三間坂^{みまさか}八男^{はちお}だ。」

それに、その辺にいる奴等などでは駄目なんだ。　もちろん、私はお前に行き着くまでもこの学校中を探しまわった。　それこそ、入学してから一年が経つ今までずっとだ。

だが、私が求める才能を持つ者はなかなか居なくてな。　それを持つ者をやつと見つけたのさ」

「それがお前だ！」と背景に落雷でも落ちた様なシーンで、ビシヤアアアン！！と八男は俺を指差した。

いやいや、才能って。　いよいよコイツの頭が心配になってきた。

「そんな簡単に性別を変えてんじゃねえ。　それに悪いけど、俺にそんなたいそうな才能なんか無いから。　あと前世とかソウルメイトだとか、実は隠された超能力だとか、そういう設定も無いから」

ついでに言うと八男も無い。

「フッフ、何を勘違いしている。　漫画やアニメの見すぎではないか？　私が言う才能とは、そう『トラブルに巻き込まれる力』だ」

現時点での俺の最大のトラブルがそんな事を言いやがる。

「何だその迷惑極まりない力は？」

「言った通りだ。私が探しまわり、やっと見つけた才能。本人はおるか、その周囲に存在する者達までゴタゴタに巻き込む力。言ってみれば主人公体質。そう、私が欲して止まない力だ」

譲渡できるなら喜んで差し上げたい才能だし、それを欲しがるコイツとも関わりたくない。それに俺は主人公より、サブキャラの味を重視するタイプだ。

「私は！ ハチャメチャが押し寄せてきて！ パーティーの主演になりたいんだ！！」

勝手になってくれればいい。できれば俺の知らない所で。 なんだか頭が痛くなってきた。

——とまあ、ここで冒頭に戻るわけだ。

もちろん俺はこの自称『正義の味方』がやった警察沙汰になってもおかしくない行為に屈することなくもなく、毅然とした態度で断り——できれば良かったのだが。

悪が強いのが世の常とはよく言ったもので、俺は泣く泣くこの提案を受け入れる事を条件に、例のデータやら何やらを即この世から抹消せたのは言うまでもないだろう。

ちなみに、後に自宅を調べたところ、盗聴器四個、盗撮カメラ三台が見つかった。

ガチで身震いしたのはこの時が初めてだったと思う。（どうやって仕掛けたのかも問いただしたのだが、良い子に悪影響なのでここでは伏せさせてもらおう）

そんなわけで、主役になりたい女、三間坂 八代。

こんな奴が隣にいるせいなのか、俺の生活がここを起点に激変したのは多分気のせいではなく、俺は今でも友達解消のアイデアを考
えたりしてるわけだが——なあ、なんか良い案ないか？

V S 裏応援団 (1)

01

これは例えばの話だ。

例えば、どうしようも無いほどの金欠に見舞われ、数日間ろくに食事も取れないような生活をしたでしょう。

そこにパツと、名も知らぬ親切な奴が現われて「これでおいしいものでも食べなさい」と財布から現金を取り出すんだ。

なんて良い人なんだ！と思い、その金に手を伸ばすか。
はたまた、そんな怪しい金はいらないとつっぱねるのか。

これはそんな話だ。

02

平日の昼休み。

その日も俺は、なんとなく居ずらい教室を抜け出し、誰も居ない資料室という名の倉庫に避難していた。

登校途中に買ってきた、芳沢ベーカリーのおみくじサンドイッチと、紙パックのカフェオレを持参して。

これはいわゆる俺の鉄板メニューである。

芳沢ベーカリーのサンドイッチは、その名の通り日替わりでその中身の具材が変わるというちょっと変わった品なのだが、わりと好き嫌いの多い俺でもいまだにハズレを引いた事がない。

「おお！今日はスモークチキンじゃねか。またまた当たりだな」

ビニール包装紙をピリピリと剥がし、中身を確認するこのドキドキ感も、このサンドイッチならではの楽しみ方といえるだろう。まったく、粋なものを作りやがるぜ。

「ほう。 スモークチキンか。 私も嫌いじゃないぞ」

カフェオレの紙パックにストローを突き刺した瞬間、突然背後から聞きたくない声が聞こえた。

ちなみに資料室の扉が開いた音は聞こえていない。

「まったく。一緒に昼食をしようと、お前の教室まで迎えに行つた私を置いて、あまつさえ先に食事を取ろうとは。それでもお前は私の友達の自覚はあるのか？」

やや拗ねたような顔を作り、声の主は俺の背後から、正面の机に移動する。さもそれが当然であるかの様に。

「なんでこの場所が分かった？」

「愚問だな。言わなかったか？ 私はお前のストーカーをしていたと。」

ことさら、この学内に関してのお前の行動は、私は全て把握していると思ってくれてかまわんぞ」

ニヤリと擬音が聴こえそうな笑みで、俺と向かい合わせに座る三間坂 八代がそう答えた。

——そう、俺は八代と友達になったのだ。 いや、ならされたと言った方が正解か。

まさか自分の人生で、自分のストーカーと友達になるとは、お釈迦さまでも思いもしなかっただろう。 夢なら覚めて欲しいとは

まさにこの事である。

「それで、何か面白いことはやってきたか？」

「こねえよ！ 嫌なことなら今、目の前に、現在進行形で来てるけどな！」

友達契約を結んでからこっち、八代は俺のところに来るたびにそんな事を聞いてくる。

コイツは余程毎日暇でもしているのだろうか？ そもそも俺だって、コイツが言う程、毎日ドタバタが舞い込んできた記憶なんてないのだ。

「おいおい、約束が違うぞ！ これではお前と友達になればハチャメチャな毎日が送れるという私の希望的観測はどうすればいいんだ！？」

「しるかっ！ 勝手にそんな希望的観測を打ち立ててんじゃねえ！」

まったく勝手な話である。

「違うぞ秋葉。 お前は どうして そう無自覚なのだ？ せつかく私 が、わざわざお前の才能を教えてやったのに。」

もっと視野を広げろ。 世界は面白いことで満ちているんだ。そしてソレを漏らさず掬い取るのがお前の仕事なんだ。……ん、このサンドイッチ美味しいな。 粒マスタードが良い味を出している」

偉そうな講釈を垂れながら、俺のサンドイッチを何の躊躇もなく食う八代。 俺のサンドイッチを。

「あの、八代さん。何してんの？」

「見て分らないか？ 昼食をとっている」

「そうじゃねえよ！そういうことじゃ無えんだよ！ それは俺のだからが！」

1パック三個のサンドイッチは、量的には必ずしも多くは無い。普段俺は小食とはいえ、そのうちの一つが無くなれば、午後からの授業を空腹で過ごすハメになるのだ。

憤慨する俺を見て、「やれやれ」とでも言いたげなまま、八代は足元からガサリと袋を取り出した。

「私の昼食だ。 仕方ないから特別にお前にも分けてやろう。 何が良い？ 私のお勧めはサラダ味だが」

八代が取り出した袋には、ゴツソリと色取り取りの包装紙に包まれた棒状の駄菓子が詰まっていた。

一本十円というリーズナブルな値段で、パッケージには国民的人気アニメの某猫型ロボットに類似したキャラクターが印刷されたアレである。 五百円分はありそうだ。

「お前、ソレ全部お菓子か？」

「ああ。 うまか棒だ。 私の昼食はうまか棒で始まり、うまか棒で終わる」

「いや、さっきサンドイッチ食ったじゃん」

「五月蠅い！ あんまり美味そうだったからちよっとつまみ食いし

ただけだ！ いいからさっさと好きなのを選べ」

「いらねえよ。　んなもん腹に貯まるか。　育ち盛り舐めんなよ？」

「それじゃーアタシが代わりに、そのめんたいこ味を貰おうかな」

いきなり現われたアビ子が、机の上に並べられたうまか棒の一本を手に取った。　どうして俺の知り合いの女子は、みんなこう突然現われるのだろうか？

「む、日野山か。　仕方ない。　お前には例の件で世話になったからな。　そのめんたいこ味はその礼としてお前に譲渡しよう」

アビ子がいきなり現われたことに、微塵も驚く素振りを見せない八代。

何だろう？　音も無く現われる事は当たり前前の事なんだろうか？　俺がおかしいのか？

「いやあ、無事に作戦成功できたみたいだね八代っち。　あと、アタシを呼ぶ時はアビ子でいいよ。　みんなそう呼んでるし」

「うむ。　了解した」

作戦とは例の手紙の件だろうか？　そういえば、アビ子は八代と面識があるみたいなさ事も言っていた。

というか、何気にこの二人の組み合わせは、俺的には最悪の組み合わせな気がする。　二人とも登場から嫌な予感しかないし。

「んー、久々に食べる駄菓子ってのもなかなか良いね」

うまか棒をシャクシャク食いながら、人懐っこい笑顔を浮かべるアビ子。

この笑顔にみんな騙されるんだ。こいつはそんな爽やかキャラじゃないんだぜ？ どっちかと言えば腹黒い黒幕キャラなんだ！

「ん？ 諏訪くん、なんか今、アタシにとってめちゃくちや失礼なモノローグいれなかった？」

「いや、気のせいだろ。あとモノローグとかメタな発言やめてくれない？ ほら、世界観とかあるじゃん？」

ほらな？ コイツはこういう、へたすりゃ世界が崩壊しかねない危険なことをサラリとやりやがる。

まったく気が進まない。おまけに今は、常にハチャメチャを待ち望む三間坂さん家の八代さんも同席しているのだ。

それでも……。それでも俺はこう言うしかないんだ、そうしないと話が進まないからな。

「それで、今日は何の用なんだ？ アビ子」

「ん、実は今日は諏訪くんにアルバイトのお話を持ってきました！ 喜べ〜」

「おお！ さっそく来たな秋葉！ ワクワクな予感が！」

二人の女子を見やり、俺は深い嘆息をつく。どうやら、今回も嫌な予感的中しそうだ。

残りのサンドイッチを口に放り込むと、ピリリとした辛みの粒マスタードが、俺の舌を刺激した。

V S 裏応援団 (2)

01

「――ストーカー退治!？」

「そう! 純情可憐な女子生徒を、悪い狼さんから助けるのが今回のお仕事です!」

シャクッ! と音を立てて、駄菓子を食うアビ子。

俺はズズズ、とほとんど空になったカフェオレをパックを握り潰しながら一気にストローから吸い込んだ。

いきなりアルバイトの内容を話だしたかと思えば、よりもよつてストーカーである。

俺は向かいに座り、すでに駄菓子を半分程平らげている女を見た。コイツにさえ手いっぱいなのに、他人のまで面倒見ねえ……。

「ん? どうした秋葉。 私に見蕩れているのか?」

「……。 食いかス、ほっぺについてんぞ」

「何!? 取ってくれ!! 舐めながら取ってくれ!!」

「何でだよ! ああ、クソッ! ほら、ハンカチ!!」

胸ポケットに入れていたハンカチを乱暴に八代へ投げる。

八代はそれを片手でキャッチし、広げて、豪快に顔をゴシゴシと

拭い出した。まるで、おしぼりで顔を拭くオッサンである。

「……本当に仲良しさんだねえ。お姉さん、ちよいと妬けちゃうよ」

そんな俺達の様子を見ていたアビ子が、妙に冷めた視線で冷やかにしてきた。

待て、勘違いするな！！

「クンクン……。秋葉の匂いがする」

一方八代は、食いカスだらけになったハンカチに鼻をつけたまま、何やら別の世界へトリップしている。あのハンカチは後で捨てておこう。

「で、どうかな？ 引き受けちゃくれないかい？」

「そもそも、引き受ける理由が無え。そりや大変だろうとは思っけどな、だいたい、そういうのは警察の仕事なんじゃねえの？」

俺は頬づえを着き、アビ子を見ないまま拒否の態度で答える。
しかしアビ子は、俺がそう言うのを分かっていた様にそのまま話を続け出した。

「んー、被害者の子もそこまで大袈裟な話にはしたくないみたいなんだよね。できるなら穏便に済ませたいみたいな」

「それなら、なおさら俺の出る幕じゃねえだろ。話合いなんてガラじゃない」

そうなのだ。アビ子が俺に仕事を持つてくるということは、少

なからず荒事がある場合しか無い。 分かりやすく言えば、必ず暴力沙汰になる。

身にかかる火の粉を払うなら拳だつて振るうが、知らない他人の為にそんな面倒なことはゴメンだ。 なにより気分が乗らない。

「ならば私が引き受けよう」

向かいに座り、さっきまでハンカチの匂いで悦に浸っていた変態がいきなりそう言い切った。

「おい、いきなり何を言い出してんだ？」

「だから、私が引き受けると言ったのだ。 困っている者がいるのなら、助けてやるのが人情だろう！！」

まるで背景に燃え盛る炎でも見えそうな勢いで、八代は立ち上がり、拳を天に突き出さんとばかりに堅く握りしめる。

「やたら綺麗な顔で嘘を吐くな！ お前はただ面白そうだから首つつこみたいだけだろうが！」

「心外だな秋葉。 私はあくまで善意を持って引き受けているつもりだぞ。 助けを求める者がいるのなら、迷わず手を伸ばす博愛の精神。 そういう者に、私はなりたい！」

「勝手になれ」と言おうと思った。 しかし、その言葉が俺の口から出るより先に、横に立つアビ子が「八代の発言に乗っかるなら今だ！」と言わんばかりに捲し立ててくる。

「感動したよ八代ちゃんっ！！ そうだよねえ。 困っている人を

見捨てる様な人間になっちゃお終いだよね！ そんな奴はもはや、人である資格すら無いよね。 畜生にでも転生するべきだよね！」

「いや、それは畜生に失礼だ。 せいぜいゾウリムシが良いところだろう」

八代とアビ子が、まるで哀れな者でも見るかのような視線を俺に向ける。 どうやら俺はこのままだと繊毛虫類に転生されてしまうらしい。

「はっ！ 単細胞生物けっこうじゃねえか！ 博愛精神なんてヘドが出るぜ。 そうだよ、俺は元々悪い奴なんだよ。 悪側の人間だ。 人助けなんてノーサンキューだね」

俺の中のデビル秋葉が暴走しだした。 気分は人類殲滅の為に戦う悪のゾウリムシ戦士だ。

「違うぞ秋葉。 お前はそんな奴じゃない」

いきなり、八代が真顔で俺を見つめながら、真剣味を帯びた声音ではっきりそう言った。 そのやたらシリアスな雰囲気、俺の中のゾウリムシ戦士がやおら委縮していく。

「お……おっ？」

「私はお前ほど良い奴を他に知らない。 悪ぶらなくていいんだ。 お前は困っている者を見捨てることなんて出来る人間じゃない。 そうだろ？」

諭すように、母性全開の微笑みを浮かべる八代。

だが！ そんな手に引つ掛かる俺ではない。 これは落として上げる説得の常套手段だ！ 騙されるな俺！

「知りあつて一週間もたつてないのに何でそんな事わかんだよ」

俺の疑いの表情が崩れないのを確認した八代は「……ちっ！」と舌うちして、さっきまでの微笑みとは真逆と言っていいほどのジト目になる。

まったく油断ならない奴だ。

02

放課後。 アビ子のアルバイトを断固として拒否した俺は、別に何をするわけでもなく教室を出て帰宅しようとしていた。

そつだ。 俺は帰宅しようとしていたんだ。

「あんたが諏訪先輩？」

昇降口へと続く廊下の途中、まるで俺を待ち伏せでもしていたかの様に、廊下の壁に背を付け、腕組みをしたまま、まるで俺を値踏みするように睨んでくる女子生徒と遭遇した。

「……ふん。 やっぱり噂なんて当てにならないわね。 もっとゴツイ奴かと思つてたのに」

女子生徒は遠慮という言葉をどこかへ置き忘れてきたかの様に、ジロジロと無遠慮な視線で俺を見る。 小柄ながら、そのやや釣り目な視線が、どこか猫を思わせるような勝気な印象を受けた。

「あ？ 誰だよお前。 てかそんなに見てんじゃねえよ。 穴が空いたらどうしてくれんだコノヤロー」

どう見ても友好的な雰囲気ではないその女子生徒に、俺もそれなりの対応で返す。

しかし、 そんな態度もこの女子生徒には通じないようで、 視線をそらすどころか真正面から睨み返された。

「雇い主の顔くらいちゃんと覚えてなさいよね！ いい？ 事は一刻を争うの。 こうしてる間にも、 また奴等が現われるかもしれないのよ！」

雇い主？ 奴等？ わけの分からない単語を並べたてながら、 その女子生徒は俺の手を取ると、 その小柄な身体のどこにそんな力があるのかというような膂力で俺をグイグイ引っ張りだす。

「お！？ ちょ、 待て！ 何だいきなり！？」

「うるさい！ いいからコツチに来て！！」

廊下にいた他の生徒が、 何事かとこちらに視線を寄せ始める。 クソっ、 目立つのは嫌いだ。

「——だからっ！ 意味わかんねえって！！」

俺はグツと背筋と腰に力を入れ、 力まかせに女子生徒に掴まれていた手を振りほどいた。

その勢いが強すぎたのか、 女子生徒は「え？ つあひゃあ！？」という間抜けな声と共に、 見事な前転で数メートル転がり、 したたかに廊下の壁に頭を打ち付けて止まるという離れ技をやったのけた。

「だ……大丈夫か？」

さすがに、このまま声をかけないのも忍ばれるので一応の安否をとるが、女子生徒の返事はなく、床に倒れたままだ。

関係ないが、スカートがめくれてパンツ丸出しである。まったく関係ないが。ふむ……ピンクか。

「見損なつたぞ秋葉。まさかこんな白昼堂々とレイプを敢行するなんて」

「うおおっ！？——ち、違うぞ！？俺は無実だ！！」

いつの間にか俺の背後に、汚物でも見るかの様な眼をした八代が立っていた。

「いやいやあ、さすが諏訪くん。学校の廊下で、しかもこんな人目が多い場所で致すなんて。諏訪くんはケダモノの皮を被った変態だねえ」

八代の横からヒョイと顔を出したアビ子が、困った笑みを浮かべながら、この惨事を前にそんな事を口走る。

その途端に、それを見ていた生徒たちの間から「レイプだつてよ……」 「アレ、二年の諏訪だろ？」 「うあゝ、やっぱり噂通りの——。」なんて言葉がそこかしこから聞こえた。

「オラア！！何見てんだコラアー！！見せもんじゃなんだよ！」

俺は混乱する頭のまま、周囲を威嚇する。「ひいつ」という小さい悲鳴を上げ、散り散りに去っていく生徒を見ながら、泣きたい

気持ちをグツとこらえたのは秘密だ。

「落ち着け変態。とり合えず、あのパンツ丸出し女を保健室に運ぶぞ」

「ありやりや、しかし見事に丸出しだねえ。嫁入り前には酷な仕打ちだよこりや」

そういう二人に促され、俺もいまだに倒れたままの女子生徒を見る。

「クソ……。いったい何なんだあの女」

「え？ 諏訪くん知らないで襲つてたの？」

「襲つてねえよ！ 逆に拉致されそうにはなつたけどな！！」

「ふむ。昼休みにアビ子がアルバイトだと言っていただろう。あのパンツがその依頼人だ」

八代は俺を見たまま、親指だけでくいつと女子生徒を指し示す。最悪だ。そんな言葉が頭を過ぎったが、もはや手遅れなのだろう。俺は考えるのを止めて、とりあえずはこの気絶しているパンツ女を保健室に運ぶことにした。

V S 裏応援団 (3)

01

校舎の一階。白を基調とした、消毒液くさい部屋の中には誰も居なかった。

「養護教諭は不在らしいな」

簡易なベンチソファと、レールカーテンで仕切られたベッドが二つ。申し訳程度に置かれている観葉植物だけが色味を持った、まさしく保健室然とした内装である。

「確か、こっちの戸棚に湿布とか置いてあるはずだよ」

アビ子が壁際に並んだ戸棚を慣れた感じでゴソゴソと漁りだす横で、八代はブックラックに置いてあった『思春期の心と体』なんてタイトルの本をパラパラとめくりだしている。

俺はといえば、いまだ目を覚ます気配のない、名も知らぬ女子生徒を背負ったまま棒立ちしていた。

「どうすんだコレ、やっぱ病院に連れてった方が良くねえか?」

「んー、たぶん頭をぶつけて気絶してるだけだと思うけど……。心配なら救急車呼ぶ?」

戸棚をガサゴソやっていたアビ子が、そう言って携帯電話を取り出す。

救急車か。それはそれで何か気が引けるが、しかし人命には変えられない。万が一にでもこれで死に至るなんて事になれば、俺はこの年で殺人犯になるんだろうか？

嫌な寒気が背中に走る。本当に面倒なことになったものだ。

「とりあえず、そのパンツ女をベッドに寝かせたらどうだ？」

「ん、そうだな。横にしといた方が良いか」

保健体育の本を熟読していた八代が、視線だけで並んだパイプベッドを指す。俺は背中におぶっていた女生徒をパイプベッドへとそつと降ろし、頭をなるべく動かさない様を枕を置いてやる。

「ああ、それで、なるべく身体を締め付けるモノは取った方が良い。ボタンを外して、上着は脱がせた方がいいな」

「へえ、意外と詳しいんだな。ちょっと見直したぜ」

「この程度は一般教養だ。別に褒められることではない」

「……………」

「どうした。さつさと脱がせろ」

「俺が脱がせるのかよ!？」

「当たり前だ。私は読書で手が離せないし、アビ子は湿布を探しているので無理だ。今ここに手が空いた者は貴様しかない」

「お前が本読むの止めれば済む話じゃねえか!!　そもそも今、そ

んな本読んでる場合じゃねえだろ!!」

「おやおや、逆切れか？ ハッ！ 勘違いするなよ。 そもそもこのパンツ女を気絶させたのはお前だろう？ ならば介抱するのもお前がやるべきだ。 違うか？ 男なら、自分がやった事の責任は最後まで全うしろ！」

「なっ……!？」

「どうした？ それともお前は途中で責任を放りだす男だったのか？ —— 残念だよ秋葉、私はお前を過大評価していたようだ」

「ぐ…… 上等だっ!! あんま俺を見くびるなよ!? やってやるさ、ああ、やってやるとも!! オラア！ 制服だろうが何だろうが、幾らでもひん剥いてやるああ!!」

半ばヤケクソになりながら、俺は寝ている女生徒の制服の上着に手をかける。

シチュエーションはともかく、寝ている女の服を脱がすという行為に妙な高揚感を感じてしまうが、今はそんな事を言っている場合ではない。

胸よりやや下に位置する大きな目のボタンを外すと、上着の前がはだけ、真っ白なブラウスが女生徒の呼吸に静かに合わせ上下していた。

……違うぞ!? これはあくまで人命救助の一環で、邪な気持ちで脱がせているわけでは決していない!!

——ただ、ただ少し、俺の男の子としての興味やら、その他諸々の思考がとんでもない事になってしまっているだけなんだ!!

違う！ 違う違う違うっ！！ 迷うな諏訪秋葉！！ 今、俺の目の前にあるのはただの布だ！！ 精神を研ぎ澄ませろ！！ 無心になれ！！

俺は仏の様に目を半分閉じ、ざわつく心を無理矢理鎮める。 無だ。 無の境地だ。 宇宙の深淵を思うんだ。

ブラウスの首元のボタンから順に下へ、俺は宇宙の真理を脳内に思い描きながら外していく。 しかし、胸元ギリギリまで開けた瞬間、薄いピンクのブラジャーがチラリと俺の視界にかすめた。

これはもうあかん！！ もうデッドラインぎりぎりやでえ！！

「フフフ……。 どうした秋葉、手が止まっているぞ？」

八代の形をした悪魔が瞳の中に妖艶な輝きを湛えて、俺を次のス Teppuへと促してくる。 もはや保健体育の本など見てすらいない。

「し、しかしこれ以上は……。」

「意気地無しめ。 ほら、あと一つボタンを外せば……。」

八代がそつと腕を伸ばし、胸元のボタンを一つ外す。 その途端に肌面積が広がり、先ほどまでチラリと見えていたブツが、今では完全にその膨らみと淡いピンク色を主張し、俺の眼下に現われた。

「あのお、お二人さん。 何してんの？」

「「え？」」

少し引き気味なアビ子の声が耳に届き、俺と八代が同時に間拔けな返事を返す。

「傍から見てたら完全にヤバい光景なんですけど」

微妙に距離をとったアビ子が、見たらいけないモノを見てしまった様な顔で俺達を指差す。

その時、アビ子の後ろの保健室のドアが勢いよく開け放たれ、一人の男子生徒が鬼気迫る表情でこの保健室に乱入してきた。

「蘭子おおお！！ 無事かああ！！ ——って、 うぎやああああ！！ 今ナウ犯されとる——っ！！！！！」

男子生徒は、ベッドに寝ている女子生徒と、その横に立つ俺と八代を見た瞬間、目を飛び出さんばかりに絶叫する。

「——ちっ。 面倒だな」

横に居たはずの八代から聞こえた声が俺の耳に届いた瞬間、残像でも残しそうな勢いで男子生徒の隣まで移動した八代が、しなりを効かせた手刀をその生徒の首筋に叩きこむ。

不意打ち気味だったとはいえ、叫び声をあげていた男子生徒は「ひぶっ！」と小さい悲鳴を残し、膝から崩れるように昏倒してしまった。

静まりかえる保健室。

「……ん？ あれ？ こことこ？」

誰も口を開かない保健室の中、ベッドで寝ていた女生徒がむくりと上体を起こし、いまだ覚めない頭のまま、周囲を確認する様に視

線を彷徨わせる。

フラフラとした視線は部屋の中を確認した後、アビ子、八代、そして隣に立つ俺を捉えた後、そのまま自分の開かれた胸元へと向けられた。

「なっ！？——え！？何これ！？え？」

「待て！誤解すんなよ！？違うぞ、コレには事情があつてだな、ああちよつと待て、今俺も混乱して」

「黙れ変態っ！！」

パンっ！！と強烈なビンタの音が保健室に響く。

音の発生源がもちろん俺の左頬だったのは、この際言つまでも無いだろう。

01

「ヘイ！ ドリンク五つおまち！」

お盆を片手に掲げ、見事な0円スマイルを振りまくアビ子。
その笑顔には不釣り合いな雰囲気を放つ六人掛けのテーブル席で、俺達は礼を言うでもなく各々勝手にドリンクカップを取る。

もちろんココは学校の保健室なんかではなく、学校からほど近い商店街の一画にあるファーストフード店の中だ。

保健室でのゴタゴタ騒動で、さすがに場所を移した方が良いのではないかという提案が上がり、俺達は今、手頃で気軽に駄弁れるという理由から、この店に移動してきたわけだ。

「さて、それじゃ、何から話そうか？」

席につくアビ子が、場仕切るように席に座る面々を見渡しそう言
うと、保健室からここまでずっと不機嫌な顔でいた女子生徒が、ギ
ロリと睨みを効かせ、牙でも剥き出しそうな勢いで口を開いた。

「何からじゃ無いですよアビ子先輩！ 全っ然話が違っじゃないで
すか！！」

先輩が、頼りになる助っ人がいるから安心しろって言うから会っ
てみれば、こんな変態レイプ魔だし！！

しかも、そのあげくにそのレイプ魔に襲われそうになるし！！
いったいどうなってるんですか！？」

女子生徒がダンダンツとテーブルを叩きながら俺を指差す。

「だから！ 誤解だつつつてんだろぅが！！ あとこんな場所でレイプ連呼してんじゃねえよ！！」

世間の皆さまにあらん誤解を受けたらどうしてくれんだテメエ。名誉棄損で出るところぞコラア」

「落ち着け秋葉。 お前が一番大声で連呼してどうする」

やたら落ち着き払った八代にたしなめられる。 元はと言えば俺がこんな誤解を受けるハメになったのはお前のせいなんだけどな。

「まあまあ、蘭子ちゃん。 ここはこの日野山に免じて許してやってくれい。 それより、その隣の彼はランちゃんのコレかい？」

アビ子が親指を立てながら、蘭子と呼んだ女子生徒の隣に座る男子生徒を見る。

「あつ、自分、蘭子の幼馴染の狩野 （このの） 大輔 （だいすけ） っす！ 一年D組、血液型はA型っす！」

話をふられた男子生徒が、妙に背筋を伸ばしながらハキハキと自己紹介を始める。

校則にひっかからない程度に染めたやや長めの髪に、微妙に着崩した制服でパツと見チャライ印象を受けるが、礼儀という面では隣に座る女子生徒よりはましな様だ。

しかし、その自己紹介を遮るように蘭子は「こんな奴、彼氏じゃありません」と吐き捨てた。

大輔はそんな蘭子を見ると、苦笑いをしたまま人差し指で頬を搔

く。

「ふむ、ではこちらも自己紹介からした方が良さそうだな。私は二年A組の三間坂 八代。」

縁あって今回、アビ子の助っ人という形で手伝うことになった。気軽に八代お姉さまと呼んでくれてかまわない」

やたら堂々と、その主張しすぎな胸をそらしながら自己紹介をする八代。俺は自己紹介で「お姉さまと呼べ」なんて言う奴を生まれて初めて見た。

「八代お姉さまっすかあ！ つうか、あの三間坂先輩と知り合いになれたなんて、俺まじで感激っすよお！」

大輔はこんな自己紹介を受けたにも関わらず、何やら本当に感激しているような表情だ。 なんだコイツ、八代のこと知ってるのか？

「私は二年C組の日野山 安毘子ね。……まあ、私の自己紹介は今さら必要無いかな？」

それで、さつきからそこでブスウっとした顔で座ってるのが諏訪 秋葉くん」

アビ子がついでに俺の紹介まで済ませてくれたおかげで俺は口を開かずに済んだが、対面に座る一年二人の視線が煩わしい。 見んな。俺を見んな。

俺が何も喋る気がないと感じた蘭子は、ふうつと息を一つ吐きテーブルに座る面々を見渡した。

「それじゃ、次は私ですね。 一年D組、笹川 蘭子。^{ささがわ らんこ} 今、ちょ

「　　」
つと困った事になって、アビ子先輩に仕事をお願いしました……。

「　　」
蘭子はそのままで言うと、少しだけ俯き、言葉に詰まる。さつきまでの勝気な雰囲気とは打って変わり、少しだけ表情に影が刺したようにも感じる。

「　　」
「その困った事と言うのは、ストーカーに悩まされている事だな？」

八代が代わりに代弁するようにその言葉を繋いだ。それを受け、蘭子は少し困った顔で話しを続ける。

「正確にはストーカーとはちょっと違うんですけどね。でもあいつ等しつこくて……。それに、最近やることも段々と過激になってきているというか」

蘭子の肩が、徐々にだが、確実に小さく震えている。こんな男勝りな奴が震えだすんだ。余程怖い目にでもあったのだろうか。

「まあ、それで私も、今回は可愛い後輩のためにいっちょ本気で解決してやろうかと思つてさ。

色々と情報を集めてたわけなんだけど。今回はちよつとばかりしやつかいなグループが絡んでたんだよね」

「厄介なグループ？」

ストーカーと聞いていたせいか、相手は一人だとばかり思っていた。まさか集団ストーカーなんて言い出すんじゃないだろうな。

「そう。 やっかいだよ。 なんせ、あの裏応援だからねえ」

俺の疑問を答えるアビ子が、一段トーンを落とした声でそう言う。その場にいる俺意外の全員が、その名前を聞いた瞬間、何か心当たりがある様な表情をするが、俺はそんな怪しい応援なんて聞いたことすらないわけで。

「裏応援とはなんぞや？」なんて質問できそうな空気じゃない事だけは理解した。

02

——裏応援。 学校側には非公認のその応援団は、設立から現在に至るまで学校生活の裏側で密かに活動が続いている謎の団体らしく、所属している生徒数も正確には把握できない。

しかし、その影響力は甚大で、特にほとんどの体育会系のクラブは裏応援団の息がかかっている。 ……らしい。

出典・アビペディア

「なんだこの推測のみで構成された様な解説文は？」

「仕方ないじゃない。いくら私でも、ほとんど表に出てこない、あるか無いか分からない応援団の情報なんて、この程度しか持っていないもん」

裏応援団の名を聞き、皆が静まりかえる中、俺だけが話についていけない事を察したアビ子が、ついでだからと裏応援団について

解説してくれた。

その気配りは称賛に値するが、いかんせんこの解説では余計に意味不明になるだけである。それとも俺の理解力が低いだけなのか？

「話だけなら聞いた事はあったが、まさか本当に実在していたとはな。

フハハ！……うん。面白い！これは面白くなってきた」

八代が見えない敵を見据えるように不敵に笑うが、一年ズはさつきから不安な顔で押し黙っている。

それでも、こいつらの状態を見るだけで、その裏応援団がなんとなくヤバイ団体である事は想像ができた。八代については鼻っから理解不能なので無視だ。

俺はジュースが入ったまま少し柔らかくなった紙コップを口に運び、氷が半分溶けて薄くなったコーラを口に含む。

——そう言えば俺、なんで大人しくこんな話聞いてるんだ？

元々断る話だったじゃねえか。ストーカーだか応援団だか知らないが、俺にはまったく関係の無い話なんだ。

実際被害にあってる蘭子は気のどくだとは思うが、それに率先して関わる気なんて俺にはまったく無いうえに、おまけにレイプ魔だなんて言われる始末だし。

そうだ。何もこのまま大人しく話を聞いてやる必要など無い。どうせ断るんだ、ここに居ることじたいが不自然じゃないか。

ふと、そんな事を思い直し、俺は我に返る。——帰ろう。厄介事はごめんだ。

「——よし、んじゃ俺はこれで帰るわ。ジュースごっそさん」

これ以上関わり合いになる前に、俺は席を立ち、テーブルから離れる。

それを見た大輔が慌てて席から立ちあがり、俺の前に立ちふさがった。

「ちよつ、まじっすか！？ 蘭子を助けてくれないんスカ諏訪先輩！？」

「知るかよそんなもん。 助けてって言えば誰かが助けてくれるなんて目出度えこと言ってんじゃねえよ。」

俺は面倒なのは御免だし、他人の厄介ことなんて背負う気もねえ」

「……なっ！？ あんたそれ本気で言ってるのかよ！？」

「本気だったらどうすんだ？」

俺は前に立つ大輔の両目をグツと睨みつける。 最初は果敢に目を合わせ睨んできていた大輔だが、次第に視線は下がり、ついには足元を悔しそうに見るだけになった。

ハッ！ 主人公体質が聞いて呆れる。 これじゃ俺が悪役じゃねえか。

胸の中に何とも言えないイラだちを感じるが、俺はそれを無視し、テーブルの方に目をやる。

アビ子が困った顔でいる横で、八代がジツと俺を見据えていた。 ちょうど良い。 これで八代が俺に愛想をつかせば明日からまた、退屈で平和な日常ってやつが送れるってもんだ。

「いいよ大輔。 私もそんな人に助けてもらおうなんて思っていない

から」

強気な瞳を取り戻した蘭子が、ハッキリとそう言う。もうその場に俺を引き留めようとする奴は居ない。

俺はそのまま何も言わず、すっかり空気が悪くなった店を後にする。

ほらな？ やっぱりこんな厄介事に首を突っ込むもんじゃないんだ。胸のイラだちが段々と強くなるが、俺はそれをどう解消すれば良いのか知らなかった。

やっちまった……。

早朝と呼ぶにはどうにもお日様が昇りすぎな明るさがカーテンの隙間から目に入る。

セットしていたはずの携帯のアラームはとくに鳴り終え、ディスプレイには、遅刻と言うには遅すぎる時間を表示していた。

昨日、ファミレスからそのまま自宅アパートまで帰り、やたらイラつくままにふて寝したらこのあり様だ。爆睡にも程があるだろ俺。

一瞬、今日はもう学校をサボってしまおうかという考えが頭に浮かぶが、それも負けたような気がする。

寝すぎて逆にダルイ身体を起こし、寝巻用のジャージをのろのろと脱ぎ、昨日着替えて放りだしたままの制服を着込む。洗面台で軽く寝癖を直して、顔を洗い、歯を磨けばもう、登校の準備は完了だ。

朝食は昼と一緒に食えば問題ないだろう。財布と鞆の中身を確認し、玄関に立つ。

ほぼ一人暮らしといって差し支えない2DKの部屋を見れば、汚くない程度に散らかっていた。週末は軽く掃除でもするか、なんて考えながら靴を履き部屋を出ると、いつもの時間より明るい太陽が「お前は遅刻したんだ」と言わんばかりに俺を照らしてくる。

「言われなくてもわかってんだよ、バカヤロー」

呟くように、自然と愚痴が口から漏れる。　どうやら昨日に引き続き、妙なイラつきは継続中らしい。

原因はもう分かっている。昨日、その気はなくなるとあの一年共に関わってしまった、ヘタに事情なんか聞いたせいなのだ。

そりゃ同情もするし、助けてやれば気分も良いのだろう。

しかし、そんなものはその時だけだ。　後になれば何かしら後悔する。「他人の為に」なんてのはどこまでいっても綺麗事でしかない。　自分に関係のない事なら、放つとくのが一番利巧な選択なのだ。

普段よりずっと静かな通学路。　いつもなら自分以外にもチラホラ散見する同じ制服の生徒達も、今は犬を散歩させる老人くらいしか目に入らない。

「おう坊主！　今日はやたら重役出勤じゃねえか」

ふいに声をかけられた方を見ると、通い慣れたパン屋の女主人が店先でタバコを口にくわえたまま競馬新聞を広げていた。

芳沢 遥 はるか さん。　この芳沢ベーカリーを一人で切り盛りする女主人であり、俺が頭の上がない数少ない人物でもある。　ちなみに三十二歳独身だ。

「どうした？　お前えが遅刻なんて最近じゃ珍しいじゃねえか。
ガキン時以来か？」

「うつす遙さん。　ガキつて、たかだか二年前だろ。　別に珍しくもねえよ」

俺はそう悪態を吐きつつ、店主の横を通り芳沢ベーカリーと銘打

たれた扉を開け店内に入る。

十畳程の店内に入った瞬間、焼き立てのパンの香りがほんわりと漂い、均一に並べられたトレイには、やや少なくなった色々な種類のパンが並べられていた。

店内脇に設置された保冷庫に目をやり、目的であるサンドイッチを探す、既にその場所には『売り切れ』の看板が置かれている。

「……まじかよ」

「フツ、残念だったな。 おみくじサンドイッチはうちの主力商品よ。 朝一を逃せば売り切れちまう。 今日は大入しくアンパンでもかじってな」

「んな甘ったるいもんいらねえよ。 クソっ、仕方ねえ。 今日は他のいまいちのパンで我慢するか」

「んだと糞ガキっ！！ うちのパンはどれでも最強のパンだろうが！！」

最強のパンって何だよ。 俺は口に入れた瞬間、歯が欠けそうなやたら食いずらいパンを想像するが、馬鹿らしいのでさっさと代わりの昼食用のパンを見つくるう。

クロワッサン、ウイナーロール、カレーパン。 普段よりは少し多めだが、朝を抜いているので問題ないだろう。

それらをトレイに乗せてレジへ運べば、いつのまにか店内に入っていた遙さんが、手慣れた手付きでさっさと紙袋へ詰める。

「ほらよ。 オマケして三百円だ。 そういや、団十郎は元気か？」

「サンキュー。 さあね、最近はあるまり帰ってこねえし、でも殺

したって死にそうにないオヤジだからさ。　今頃どつかの国道を走ってんじゃね？」

団十郎とは俺の父親である諏訪^{すわ} 団十郎^{だんじゅうろう}のことだ。　生粋のトラツク野郎であり、遙さんとは学生時代からの付き合いらしい。　オヤジは職業柄、家を開ける事が多いせいか自宅には月に数回しか帰ってこない。

「ったく、あの馬鹿野郎が。　一人息子放っぱいて何やってやがんだ」

「いや、仕事だから仕方ねえよ。　それに気軽な一人暮らし気分も悪くねえしさ」

俺がそう言うと、遙さんは顔をグツと近づけ、女性とは思えない程の年期の入った眼光を俺に向ける。

「んなしよぼくれた顔で何言ってやがる。　何悩んでるか知らねえが、男がんなしよっぱいツラしてんじゃねえや！」

ぶつきらばうに、力強く俺に向けてそう言う遙さん。　別に脅しているわけではなく、励まそうとしてくれるんだろが、正直その眼光は引く。

しかし、俺はそんなにしよっぱい顔をしていたんだろっか？

「何かあったら何時でも相談しに来な。　あんたの親父はあてにならないからね」

「……考えとくよ。　んじゃ、学校行ってくる」

「おう！ 気張ってこい！」

遙さんに見送られ、俺は店内から出る。少しだけ心が軽くなったのは多分気のせいではないだろう。

02

学校に着くと、当然のごとく門には誰も居ない。携帯を開き、今がちょうど四限の半ばあたりの時間であることを確認する。

このまま教室に入るのも躊躇われた俺は、上靴に履き替え、少し早めの昼食を取ろうと資料室を目指した。

全校生徒合わせて三百人は居るはずの校舎の中は、ときおり人の気配は感じるものの恐ろしいほど静かだ。そのまま誰とも会う事なく、目的地である資料室まで到着し、少し痛んだ扉を開ける。

「……何してんだ？」

誰も居るはずのない資料室。埃を被った雑多な教材を、文字通りに詰め込んであるスチールラックの傍に、ソイツは立っていた。

「遅いぞ馬鹿者っ！ いったい何時間の遅刻だあゝあ！」

似てもいない生徒指導の教師のモノマネをしながら、八代はツカツカと俺の目の前まで歩いてきた。

「誰も待つてろなんて言ってねえし。てかお前、今授業中だろ。なんでここに居んだよ？」

「当然サボった」

「……あつそ」

それだけ言葉を交わし、俺は定位置である椅子に腰を降ろす。
八代も昨日と同じ様に俺の向かいに座り、何を話すわけでもなくただ俺を見る。

「……何？」

「ふむ。何も起きていないようだな」

「いやいやいや、言ってる意味がわかんねえんだけど」

察する様な八代の視線に、遥さんに『しょっぱい顔』と指摘された事を思い出した。俺は顔中の筋肉を総動員させ、頭の中に描くイケメンな自分を己の顔面に具現化させようと試みるが、それを見た八代が少し引き気味に「どうしたんだ秋葉、いきなり顔面痙攣の練習か？」なんて失礼な事を言うので諦めた。

「それで？　なんだって授業をサボってまで俺を待ってたわけ？
その前に、俺がココに来なかったらどうすんだよ？」

「その時はお前の家まで押し掛け、アレやコレやをいじくり回したあげく、お前に「うひい、もう勘弁して下さい八代様！　わたくしは卑しい豚でございます！　どうか八代様の奴隷として飼ってください！」と言わせるだけだ」

「そんなセリフ死んでも吐くか！！」

コイツが変態なのは理解していたつもりだが、どうやら俺の認識は甘かったらしい。コイツは変態ではない。ド変態だ。

「……言つとくけどな、例の一年共の件なら手伝わねえぞ」

買ってきたパンを机の上に置きつつ、八代がわざわざ俺をココで待っていた理由であろうその話を先に出す。何と言われようと俺にその気はないのだ。

「ああ、理解してるさ。お前は手伝わない。——お、このカレーパン美味そうだな、貰ってやろう」

「やらねえよ！ テメエは駄菓子食つてろ！」

「……ケチな男だ。パンの一つや二つ、可愛い女生徒にあげないようでは男としての器が知れるぞ。この女々しいオカマ野郎め！」

「何で貰う側のお前がそんな強気なんだ？ ねえ、おかしくない？」

「おかしくない。さあ、分かったら私にそのカレーパンを寄こせ」

一瞬、顔に投げつけてやろうかとも思ったが、パン一つで大人しくなるのなら安いものかとも考えてしまう。昨日、嫌な別れ方をしたにも関わらず、普段通りに接してきた八代。コイツの事だから、どんな事をしてでも俺を手伝わせようと画策していたなんて考えていた自分が少し恥ずかしくなり、心の中で詫びつつ俺はカレーパンを渡した。

——この時、俺は気付いておくべきだったんだ。

何故この常にハチャメチャを待ち望む八代が、この時は何も言っていないのか。そして、八代が言う『トラブルに巻き込まれる才能』というものの力を。

結局、昼休みは普通に八代と過ごした俺は、その後は普通に午後の授業を受け何事もなく放課後を迎えた。

担任に小言の一つでも言われるかとも思っていたが、特にそういう事も無く拍子抜けしたくらいだ。

教室でアビ子とも話をしたが、「八代っちに今回は諦めろって言われちゃってさあ」なんて言いながら、それ以上は話題に上ることも無かった。

——まあ、これで良かったのだろう。後はアビ子なり八代なりが何とかするさ。そもそも在るか無いかも分からない正体不明の応援団なんざ漫画やアニメの中だけで十分なのだ。そんなもの、こんな平凡な一高校にひよいひよい有ってたまるか。

俺は机の横に下げていた鞆を取り、教室を出る。晩飯は何を食おうか？ なんて考え事をしながら校門までさしかかると、見覚えのある顔が俺に近づいてきた。

「諏訪先輩、ちょっといいですか？」

昨日、ファミレスで自己紹介を受けたばかりのソイツは、人懐っこい困り顔で後ろ頭を掻きながら、俺を見る。

「確か——狩野 大輔だった？ 何の用だ？ 昨日の話ならもう終わったろ？」

別に威圧するつもりはなかったのだが、ぶっきらぼうな俺の反応に、大輔は狼狽えながら姿勢を正す。

「いや、違うんス！ 今日とは昨日の事とは別の用事で。相談つて
いうか、話を聞いて欲しくて」

何やら必死で弁解をする大輔を横目に見つつ、そういやあ後輩に頼られるなんて中学以来だなんて思ってしまう。

そんな懐かしさが手伝ったのか、「しょうがねえなあ」なんて口に出したのが間違이었다。俺がしぶしぶ了承したのを確認した大輔は、すぐ済みますんで！ なんて言いながら今きたばかりの俺を校舎の方まで連れて行こうとする。

「何だよ。また学校の中に戻るのか？」

「いや、学校の中はまだ人が結構いるんで、部室棟の方まで良いですか？」

大輔はそう言いながら、昇降口には入らず途中で曲がりながら体育館の方向を指差す。

正直、部活動なんて縁のない俺にはあまり近づきたくない場所なのだが、一度相談にのると言ってしまった以上、ここで断るわけにもいかないだろう。

内心しぶしぶながらも、なるべくすました顔で、大人しく先を歩く大輔について行くことにする。

しばらく歩くと、だいぶ人気も薄れだし、周囲が雑木林で覆われた様な場所に着く。

本当にここは学校の敷地内なのだろうか？ なんて疑問を抱かせ

るぐらいに地面は雑草で荒れ、目に入る建物も無い。

「おい。どこまで連れてく気だよ」

いい加減焦れ出し、前を歩く大輔に声をかける。

「……諏訪先輩。——すみません！」

俺に背中を向けたままの大輔が、震える声でそう言った。

「あん？ いきなり何言ってたんだ？」

俺がそう言ったと同時に、周囲の雑木林から一斉に、数人の学ランをきた男達が飛び出してきた。あきらかにこちらに対して敵対心を持った視線が俺に集まり、緊張感が高まる。

男達は一定の距離を保ちつつ、俺と大輔を円状に取り囲むと、胸を反らせ、手を後ろ手に組み、やたら背筋を伸ばした姿勢で停止した。

警戒しつつ一人ひとりの顔を確認しようと思えば、全員が目元を赤い鉢巻きで隠し、頭には学帽を被っている。何だこの時代錯誤のコスプレ集団は。

「よくやった、狩野」

背後からやたらとドスの効いた声がすると、大輔が飛び跳ねた様に肩を上げ、百八十度回転しこちらに向きなあった。

その顔を見れば、情けない程引き攣っており、両目と鼻からはダラダラと涙と鼻水が流れている。

大輔の汚い泣き顔をこれ以上見るのはゴメンなので、俺も声のした方に振り返ると、学ラン連中からは頭一つ飛び出た大男が立っていた。

周りの黒い学ランとは違い、純白の学ランを着込んだその大男は、俺と目が合うなり、ニヤリと笑う。何だコイツは？ 本当にこの生徒か？ 父兄かなにかが間違って入ってるんじゃないのか？

二メートル近い身長、俺の太もも程もあんな二の腕、極めつけはスキンヘッドに口ひげである。どこの男塾から抜け出して来たのだろうか？

「貴様が諏訪 秋葉か。 成程、最近の奴には珍しく良い目をする」

腹に響きそうな低い声で、大男が顎をさすりながらズンズンとこちらに近づいてくる。

「おい大輔。 こりや 一体どういうことだ？」

俺は大男から目を離さないまま、背後に居る大輔に問いかける。

「すいません、マジすいません！」なんて泣き声混じりの謝罪の声が聞こえてはくるってことは、どうやら俺はコイツにはめられたって事になるのかもしれない。

「なあに、簡単な事よ。 その狩野も、うちの団員というわけだ。
——この裏応援団のな！」

大男は手を伸ばせば十分に届く範囲まで接近すると歩みを止め、文字通りに俺を見下ろしてくる。この距離まで近付くと、俺は見上げるしか大男の顔を確認できない。

いったい何を食えばこんなでかくなるのだろうか？

「話が見えねえな。 お前らがあの一年の女をストーカーしてたんだろ？ ……なあ大輔、お前がストーカーの正体なのか？」

「ストーカー？ そんな軟弱なもんと一緒にされちゃ敵わんな。我々裏応援団は常に、日本男児たるこそが本懐よ！！」

大男が、大輔の代わりにそう返事を返してくる。

「うるせえハゲ。 テメエにや聞いてねんだよ。 おい大輔！ どうなんだ？ お前が犯人なのか？」

さつきよりも声を張り、後ろにいるはずの大輔に問いかけるが、返事は返ってこない。 ——っクソが。

「……もういいだろう。 そんな事よりも諏訪 秋葉。 今日貴様を粛清しにきた」

「粛清だあ？」

「その通り！ 我々、裏応援団は日の本を背負いし男の中の男！！ 真の日本男児として、貴様の蛮行は許し難い！ よって、貴様を粛清する！！」

大男の筋肉が膨れ上がり、明確な攻撃の意思を剥き出しにしながら、俺を睨みつけてくる。 覆いかぶさる様な威圧感が、肌をチリチリと焦がす。

「おい、意味わかんねえ事言ってんじゃねえよ！ ちゃんと日本語

通じてんのか？」

俺は迎撃の体勢をとりつつ、右足を半歩後退させる。喧嘩になればこの距離は不利だ。掴まれてもすれば、この巨漢を振り切る自信は正直無い。

「ハッ！ まだ白をきるか！ 貴様は昨日、そこに居る狩野の想いを襲った。 肅清には充分な理由よ！！」

「はあ！？ おいちよつと待て！！ そりゃ誤解——」

「問答無用おおつ！！」

俺が誤解を解こうと気を緩めた瞬間、まるで鉄球で腹をブチ抜かれたかと思う程の衝撃が胴体を突き抜ける。

三メートル程吹き飛んだのだろうか？ 背中から地面に叩きつけられ、一瞬呼吸ができない程の痛みが全身を襲う。これが、大男の力任せに放たれたボディブローのせいだと理解するまでに数秒かった。

「がはっ——！！ ゲホッ！！ ゲホッ！！」

やばい。 完璧良いのもらっちゃった。 アバラ逝ったんじゃないかねコレ？

身体が言う事を聞かないまま、地面を掻く様にもんどり打つ。追撃がこないのがせめてもの救いか。

「ふん。 この程度か。 所詮、たかが不良というわけだな。 興醒めだ。 後はお前らで教育してやれ」

大男が見下した様にそう言い放つと、周りに立っていた学ラン達が俺を取り囲む。踏み付けるような皮靴の蹴りが、四方八方から俺の身体中に浴びせられた。

02

どのくらい時間がたったのだろうか？ 腫れあがり、視界が狭くなった目で空を見れば、さっきまで青かった空は、すっかり夕焼けの赤に変わっていた。

身体中が鈍痛と気だるさに包まれ、このまま寝てしまいたい衝動に駆られる。

「すんません！！ 諏訪先輩……。俺……俺っ！！」

裏応援団が俺をボロ雑巾に変え、意気揚々と去って行った後も、大輔は俺の傍で泣き続けていた。……泣きたいのはこっちだつづの。

「いつまでも泣いてんじゃねえよ。いいからさっさと何でこうなつたか話せ。あゝクソっ、口痛え！！」

俺は大の字に寝転んだまま、隣で泣き続ける大輔を見る。喋るだけでも結構身体に痛みが響いた。本当、好き勝手やってくれたものである。

「お、俺ずっと、蘭子の事が好きで……。でも、蘭子は俺みたいな軟弱な奴は嫌いだって言うんす。——それで、知り合いから裏応援団の話をきいて、ひぐっ——うぶうっ」

泣きながら話す大輔の話を要約すると、男らしくなりたい！と入った裏応援団だったが、入団動機を聞いたあのハゲ（団長らしい）が「女など無理矢理自分のモノにすれば良い」などと言い出したせいで、裏応援団総出で蘭子に大輔の女になれと詰め寄せたらしい。それでも蘭子は首を縦に振らず、その態度に段々焦れてきていた。団。それに危機感を覚えた大輔は、昨日の出来事をハゲに話し、蘭子は諏訪のモノになってしまった。だから蘭子の事は諦めると、蘭子へのストーリーカー行為を止めようとしたらしい。ここで何で俺のモノになってしまったとなるのか本当に理解不能だ。

まあ、それであのハゲがこうして俺をリンチしに来たというわけだ。なるほど。俺がこうなったのは全部この泣き虫野郎のせいってわけか。マジウケる。

「あゝ、内容はだいたいわかった。とりあえず、お前は後で思いっきりブン殴る」

ギシギシと痛む身体を無理矢理起こし、雑木林を見る。俺の予想が当たっているなら、あいつは間違いなくここに居るはずだ。

「おい！ 八代、居るなら出てこい」

そう声を上げ、周囲を見渡すと、ガサガサと頭に葉っぱを付けたままの八代が姿を現した。こんな時間までよく潜んでいたものだ。

「何故わかった？ せっかく、お前が気絶してからネットリと熱い介抱をしてやろうと思って待機していたのに」

少しむくれた顔で、八代は俺にハンカチを差し出す。ちなみにコレは昨日俺が貸してやったハンカチだ。というか気絶しないと介抱しないつもりだったのか？ その前にねっとりって何だ！？

「で、どうせただ見てただけじゃねえんだろ？ 収穫は？」

俺は受け取ったハンカチで切れた唇を拭いながら、八代の右手に握られているデジカメを見る。

「ぬかりは無い。全員バッチリ撮れているぞ」

八代はデジカメをかざし、にんまりと笑顔を見せる。さすがモノホンのストーカー。盗撮技術は俺のお墨つきってわけだ。

「やる気になったのか？」

その八代の問いに、俺は「いいや」と答えた。

「これは昨日の話とは別問題。あくまで俺が借りを返すだけだ。——ただ、もう二度とストーカーなんて出来ないくらい徹底的にぶっ潰すけどな」

俺の言葉を聞いた八代は、その大きな瞳の輝きを一層際立たせ「よし！」と頷いた。

「うつわあゝ、どしたん諏訪くん？ えらい男前になっちゃって？」

「うるせえよ。俺は元から男前だつつの」

教室へ入るなり、俺を見たアビ子が大袈裟に驚いた顔をながら、雑談中の女子の輪を抜けてくる。

始業前の朝の教室。アビ子につられて俺の顔を見たクラスの連中が、皆一様に顔をしかめていく。見んな。俺を見んな。

自分でも分かっているのだ。青黒く残った痣に切り傷が残った唇、右目の上にはガーゼが貼ってあるこの顔を見れば、誰でも何かあったと勘繰るだろう。

「階段から落ちました」なんて古臭い言い訳はどう考えても通用しそうにない。

昨日あの後、痛む身体をなんとか堪えながら帰宅したまでは良かったのだが、部屋に着いた時点でそのまま力尽き、泥の様に眠ってしまった。

案の定、朝起きて鏡を見た瞬間、自分でも笑えるくらい無残な顔がそこにあったわけだ。

とりあえずは家にあったガーゼで、特に腫れが酷かった右目だけは隠してきたのだが、この反応を見る限りあまり意味は無いっぽい。

「……もしかして、例の件絡み？」

何かを察した様に、アビ子が生を潜め耳打ちしてくる。

実際その通りなのだが、俺は「違ふ」と否定した。あくまでこれは、俺と連中の問題にしたかったからだ。余計なしがらみがあれば、その分動き辛くなる。

「これはただ階段でこけたただけだ。お前には何も関係ない」

俺はアビ子の目を真つ直ぐ見る。もちろん、階段でこけたなんてアビ子は信じないだろう。それでも「関わるな」という俺の意思は通じたはずだ。

「はいよ。わかりました。——本当、八代っちの言つた通りになつちやつたわ」

「あん？ 八代が何だつて？」

アビ子は「何でもなあい」と言いながら、その場からさつさと立ち去つて行く。少しだけふてくされた様に見えたのは気のせいだろうか？

02

昼休み。いつもの様に資料室で昼食をとる。

また八代が待ち伏せしているかとも思ったが、部屋の中には誰もおらず、埃をかぶつた資料達だけが俺を迎えた。

今日はちゃんと買ったサンドイッチを机に置き、椅子に座る。

さて、実際問題、どうやって奴等に借りを返すか。実を言えば、昨日からそのことばかりが俺の頭の中を占めていた。胸中とはつくに煮えくりかえっている。一方的にやられ放題だった昨日の事を思い出す度、悔しさがこみ上げるのだ。悔しすぎて泣けてくる。

「何て顔をしとるのだ、この負け犬が」

気付けばいつもと同じ様に、八代が俺の向かいに座り、ムシヤムシヤと俺のサンドイッチを頬張っていた。

本当にコイツは神出鬼没を地でいく奴である。ただし出るのは鬼の方だ。

「負け犬言うな。てか何勝手に食ってんの？ せめて断りくらい入れてくれない？」

「いや、何時までたっても情けない顔をしたまま手を付けなかったからな。てつきりコレは私への貢ぎ物かと」

「貢がねえよ！ 他の誰に貢いでもお前にだけは絶対貢がねえ！！」

「……それ、ニュアンスが愛の告白っぽいな。愛するが故に厳しく当たるというか」

「お前の感性はいつたいていどうなってるんだ？」

八代が喋りながら食うサンドイッチを見れば、ローストビーフにスライスオニオンという黄金コンビが白いパンに挟まれていた。

ぐあっ！ よりによって大当たりの日じゃねえか！！

おみくじサンドイッチの中でも、俺が特に好きな中身である。しかし、無残に引き裂かれた包装紙には既に残り一個しかない。

「何してくれちゃってんのお前？ 何なの？ 俺を虐めて楽しいの？」

「食い物一つで五月蠅い奴だな。 ほら、私のうまか棒を分けてやるから落ち着け。 ちなみに、私はわりとマゾだから、どちらかと言えば虐められる方が好きだ」

「お前の性癖なんか聞いてねんだよ。 なにサラツとカミングアウトしてんだよ。 ちよつと意識とかしちまったらどうしてくれんだよクソが」

俺は泣く泣く、残り一つになってしまったサンドイッチを味わいながら食べる。 ちなみに駄菓子は断った。

「それより、コイツを見て欲しい。 …… コイツをどう思う？」

八代はゴソゴソとスカートの中に手をつ込み、ひょいっと手帳を取り出す。 だからなんでいつもスカートの中から取り出すんだコイツは？ ポケットという物を知らないのだろうか。 だったら悲しい脳味噌だ。

八代から手帳を受け取り少し癖の付いたページを開くと、写真がバラバラと数枚落ちてきた。 床に落ちた写真には、忌々しい学ラン連中の姿が写っている。

「手帳の方には私が知らべられる限りのそいつらの情報がメモしてある。 まあ、多少アビ子にも手伝ってもらったがな」

そう言われ、手帳の中身に目を通せば、数人の名前と所属クラブ、携帯の番号からオマケに住所まで書かれていた。

個人情報の取扱いに厳しいこのご時世に、よくぞここまで調べたあげたものだと思ってしまう。

俺は写真を拾い、何枚か流し見し、一枚を机の上に置く。写真には白い学ランを着たスキンヘッドの大男。連中のボスだ。

「ザコは後回しでいい。まずはコイツからだ」

「……普通こういう時は周りの連中から潰していくのがセオリーではないのか？ いきなりボス狙いとは大胆にも程があるぞ」

「いいんだよ。俺はコイツが気に入らねえ。だからこのハゲを一番にボコる！！ 今度はこっちも本気でいく。舐められっぱなしは我慢できねえ」

俺の中に、確実に熱いモノがこみ上げていた。もうエンジンは点火しているのだ。

「その心意気は買うがな、残念ながらソイツに関しては在籍しているクラスと名前くらいしかわかっていないのだ。オマケにほとんど学校にも姿を見せんらしい」

八代が俺から手帳を取り、ペラペラと数ページめくりだした。

目的のページを見つけたのか、手帳から俺に視線を移し、ソレを読みあげる。

「名前は早乙女なまこめ 薫。かおる 在籍しているクラスは二年B組。ちなみに二年間留年しているから、今年で十九歳らしい」

「……………」

何からツツコミを入れればいいのだろうか？ あの手ゲ、どこまで俺を複雑な気持ちにさせれば気が済むんだ。 チクショウ！！
カオルめっ！！

03

放課後になり、帰宅しようと席を立つ。

連中の素性はもう分かつているのだ。 後はどうやってあのハゲを引っ張り出すか。 こうなりや片っ端から潰していくか……。

なんて考えながら歩いていると、廊下の向こうからまたも見覚えのある顔がこっちへ来るのが見えた。

「……最悪」

人の顔を見るなり、そう吐き捨てるコイツは笹川 蘭子。

よほど俺には会いたくなかったらしく、まさに苦虫を噛み潰した様な顔で目を逸らしてきた。 俺も別にコイツと話することなんて無いので、ムカつきはしたが、そのまま無視して通り過ぎようと足を動かす。

しかし、すれ違って数歩もいかないうちに、「ちょっと待ちなさいよ」と何んにか呼び止められてしまった。

「アビ子先輩いないの？」

呼び止めたくせに、俺を見ないままでそう言う蘭子。 コイツは先輩に対する敬意とかそういうものは無いのだろうか？ それともこの態度は俺に対してだけか？

「知らん」

俺がそれだけしか言わないまましていると、蘭子は心底嫌そうな顔をして俺の顔を見る。

「ふん。 やっぱりアンタ、ただの不良ね。 アビ子先輩が「噂とは違って本当は良い奴」なんて言ってたけど、噂通りの不良じゃない！」

誰かれかまわず喧嘩ふっかけて。 何その顔？ 逆に返り討ちにでもあつたわけ？」

蘭子は勝ち誇った様に俺を指差しながら、皮肉たっぷりにそう罵倒してくる。 俺の顔がボコボコなのが余程お気に召したらしい。

「……で？」

「で？ じゃないわよ！！ もう金輪際アビ子先輩に近付くのは止めてよね！！ アンタみたいな奴と一緒に居たら、アビ子先輩にまで良くない噂がたっちゃうわ」

今にも噛み付かんばかりに、言いたい放題に蘭子が吼える。 凄えなコイツ、気が弱い奴なら登校拒否にでもなりそうな台詞をよくもまあここまでハッキリと言えるもんだ。

「そうだな、気をつけとくわ」

だが、確かに今は誰とも一緒に居ない方が得策ではある。 何せ今からが本番なのだ。 多分もっと俺の周りは危険になる。 余計な関係は切れるうちに切っておいた方が良いだろう。 その方が面倒が無くて済む。

俺が了承したのを確認した蘭子は、踵を返した歩きだ……あ、コケた。

ふむ……今日は青か。反対方向なので顔は見えないが、髪から出ている耳が真っ赤になっていた。

「……ドジな奴」

俺がそう言ったのが聞こえたのかどうか知らないが、蘭子がキッと振り返り睨んでくる。これ以上ここにいたらまた何を言われるか分からないので、俺はさっさとその場を後にした。

日も沈み、街灯もポツポツと灯り出す時間。住宅街の外れに位置する空き地に俺は居た。

まだ新しめの立ち入り禁止の看板が立つその空き地は、更地になって日も立っていないせいか、土と砂で綺麗に整地されている。

「か、勘弁してくれ！俺だってあんな事しなくなかったんだ！」

八代から貰ったメモを頼りに、とりあえずは一番上に記載されていた奴の携帯に電話をかけ、この場所に呼び出したのだ。

電話口では動揺しながらも白を切ろうとしてきたが、記載されていた住所を読みあげたら腹を括ったらしく、ソイツはやってきた。

と、ここまでは良かったのだが、問題はソイツはここに来て俺を確認した早々、制服が汚れるのもかまわず土下座を繰り返してきたことだ。

「……あん？」

「団長に脅されて、俺も嫌々やらされたんだよ！——だって、やらなきゃ自分が肅清される——俺だって怖かったんだ！」

半泣きになりながら、そう俺に請う男子生徒。これが先日、俺を好きなようにいたぶってくれた連中の中身とは思えないくらいだ。

「調子良い事言ってるなよ。——立て、座ってちゃ殴れねえだろ

うが」

「ひいっ！！ ま、マジで無理だって！！ 本当にすみません！
！ 許して下さい！！」

男子生徒はとうとう泣きだし、俺の脚にすがり付いてくる。

何だコレは？ これじゃ俺がイジメている様じゃないか。 胸クソ悪い。 日の本を支える日本男児が聞いて呆れる土下座っぷりである。

「とりあえず離れるコラ。 鼻水付いたらどうしてくれんだ。 ……
クソったれ。 ならお前が知ってる連中の情報出せ。 特に、あのハゲの連絡先とか」

戦闘態勢を解き、男子生徒を引き離すと、男子生徒は感謝しながらベラベラと裏応援団の内情を語りだした。

長いので要約すると、裏応援団は今完全にハゲの独裁グループであること。 団自体は昔から存在し、元々は部活間の自治目的の組織だったらしい。

そのため、主要幹部は各体育会系の部長や副部長が担っている（ちなみにコイツは卓球部の部長らしい）。

あの場にいた学ラン達は全員幹部であり、その下には準団員（大輔とか）で構成されるらしく、基本的に準団員には幹部の素性は明かされない。

そもそも準団員は完全のパシリ要員でしかない。 今回の蘭子に對してのストーカー事件も、団長の暇つぶし程度の遊びだと。

……何の事はない。 生徒達から恐れられていた謎の応援団は、蓋を開ければただの馬鹿共の集まりでしかなかったわけだ。

それが、今は早乙女 薫という日本男児かぶれのせいで、少しばかり過激なグループになってしまった。

「俺だつてこんな団、入りたくなかつたんだ。……でも伝統とか部の繋がりもあるし」

「うるせえよ。 テメエの愚痴なんか聞きたくねんだよ。 ——それで、あのハゲはどこに居んの？」

「それは、俺達幹部も知らされていない。 あの人からの連絡は、いつも空手部の部長から周ってくるし」

「……空手部、ね」

「もう帰つてもいいかな？」とヘラヘラ笑う卓球部部长を解放し、大きくため息を吐く。 怒り以上の呆れを感じながら、俺もそのまま空き地を後にした。

話を聞いた限り、メモにある他の奴等呼び出しても、今の奴と大して変わらない結果になるだろう。

涼しいよりは肌寒さを感じる風に、 まだ傷が残る唇が少だけ痛みを感じた。

02

「てなわけで、 あのメモはあんま役に立たなかつた。 だから俺の昼飯を分ける必要もねえ！！」

「馬鹿者め！！ あれだけの情報を調べるのに、 いったいどれだけ

の苦勞がかけられてると思ってるのだ！！　これでは、その使命の為に己の柔肌を差し出した私が報われないではないか！！」

「差し出したって、……誰に？」

「決まっている！　お前にだ。昔から言うだろう？　『。。。の為に一肌脱ぐんだからね！』、と」

「妙な言い回ししてんじゃねえよ！！」

資料室での昼休み。昨日聞き出した情報を八代に話ながら、俺は自分のサンドイッチを死守していた。

どうやらすっかり八代もこれを気に入ったらしく、今日は部屋に入るなり「さあ。貴様のサンドイッチを出せ」と開口一番に宣う程である。駄菓子好きの設定はどこにいつてしまったのだろうか？

「それで、どうするのだ？　今日はその空手部の奴に会うのか？」

サンドイッチを諦めた八代が、俺が守り忘れた飲みかけのカフェオレを取り、ストローに口を付けながら聞いてくる。

「おま、それ——間接っ！！……嫌、何でもない」

コイツにそんな事を意識すること自体アホらしいので、俺はあえて何も言わずに、白から茶色に変わるストローを横目に見る。

程なくして、ゾゾゾ……っと、中身が無くなるのを知らせる音が響いてきた。コイツに遠慮という言葉はないのだろうか？

「昨日、私はアビ子の方に付いていたからな。今日はお前の方へ付いて行くと思う」

八代が中身の無くなった紙パックを両手で丁寧に潰しながら俺を見る。何気に一番自由なポジションを取っているあたりがコイツらしい。

「そんなローテーションいらねえよ。てか何？ 奴等まだ笹川に付き纏ってんの？」

「いや、お前が連中にボコボコにやられた次の日から、そういうのはパツタリ止んだらしい。昨日はお礼がてら、前に行った店で食事をご馳走になってきた」

「あつそ。てか、もうちょいオブラートに包んだ言い方してくない？ ……それにしても、少し安心しすぎだろ。昨日の今日でお礼って」

あの日からまだ二日しか経っていないのだ。連中がまた蘭子にちょっかいをかけ出す可能性は充分にある。なんせ、連中にとっちゃコレはただの暇つぶしらしいからな。

「さあな。——良いんじゃないか？ それに、裏応援団はじきにお前が潰すのだろう？ それとも、影で犠牲になった自分に感謝しろとも言つか？」

「くだらねえ事言ってんじゃねえよ。友達解消すんぞ」

「それは困るな。なら、これは私達だけの秘密としよう」

八代は悪戯を叱られても懲りていない悪ガキの様な顔でそんな事を言う。なんでちょっと嬉しそうなんだ？ そう言えばコイツ、

「自分はMだ」とか言っていたのを思い出す。 駄目だ、勝てる気がしねえ。

「そういえば、もう一人秘密を知ってる奴がいたな」

「ああ、大輔だっけか。 アイツはどうしてんだ？ 昨日は一緒だったんだろう？」

「昨日は私と蘭子とアビ子だけだった」

——何故だろう？

その時、やたら嫌な予感みたいなものが、俺の胸の中にぬるり入り込んでくるのを感じた。 そしてこういう予感は、俺の経験上、得てして当たってしまうのだ。

事が起こったのはその日の放課後。

空手部へ向かおうにもその空手部がどこにあるのか知らない俺は、とりあえず体育館周辺へと足を伸ばしていた。

思えば、最近この周辺でろくな目に遭っていない気がする。局地的な呪いでもかけられているのだろうか？ まあ、俺には場違いであることは間違いないが。

なんてことを考えながら、爽やかに部活動で汗を流している生徒達（主に女子）の姿を見つつ探索していると、携帯のバイブが俺の右ももを震わせた。

取り出し、発信者者確認を見れば、アビ子の文字とその携帯番号が明滅している。

「はいよ、こちらイケメンの携帯」

「大変だよ諏訪くんっ！！ 大輔くんがあいつ等に攫われたみたい！！」

——ん？ 今イケメンって言った？ もしかしてアタシ、かける人間違った？」

「は！？ 攫われたって何だよ！？ あと間違えて無いから。 諏訪で合ってるから」

「ともかく！！ 大輔くんが、例の裏応援団の奴等に連れてかれた

みたいなの！！ たぶん、空手部の道場だと思う。 アタシも今から蘭子ちゃんと向うから――」

「待てっ！ 危ねえから、お前らは教室で待ってる。 空手部には俺だけで行く」

「でもっ！！」

「いいから。 ここはまかせろ。 ちゃんと大輔も連れてくつから」

それだけを言い、通話を切る。 まったく、何だって今さら大輔なんか攫うのか。 アホの考える事は理解不能だ。

「何をグズグズしている秋葉！！ 道場はこつちだ」

八代がもの凄いスピードで俺の横を走り抜けていく。 いったい何時の間にそこに居たのか。 オマケに今の話も知っているようだ。 もしや、いまだに俺へのストーカー行為は続いているのではなからうか？ とも思ったが、今は八代の案内を優先させるため、黙ってその後を追った。

体育館の横を突っ切り、焼却炉を横切ると、年期を感じさせる平屋が見えてくる。 昇降口を見れば、武道場の看板が掲げられていた。

「ここだ」

そこそこの距離を全力疾走したにも関わらず、八代は息一つ乱さずにその道場の前に立つ。

付いてきた俺はといえば、割と乱れ気味だ。 いや、正直に言え

ば少しだけ脇腹が痛かったりする。

深く息を吸い、乱れた呼吸を整え、制服の上着を脱ぐ。

自分の中にあるスイッチを切り替える様に一度目を瞑り、武者震いを感じる膝にグツと力をこめた。腹の中に熱いものを感じ、鼓動が少しづつ速まっていく。戦闘準備は完了だ。

「八代、お前も隠れてろ。たぶん、派手に暴れる事になる」

「何だ？ 私を心配してくれるのか？ 優しいなあ、秋葉は」

「女は邪魔だつて言ってたんだよ。ことが始まれば、お前まで助ける自信なんか無えからな」

真剣味を込めて言ったつもりなのだが、八代は「ふん。良いツンデレだ」なんて間の抜けた返事を返し、校舎の方へ歩いていった。高めた緊張感が台無しじゃねえか。

気を取り直し、道場の方に向き直る。土足厳禁と書かれた昇降口には、あの日見た皮靴が数足並んでいた。

開け放しの玄関に入り、一段高くなった板張りの床に足を降ろす。もちろん靴なんか脱がずそのまま土足だ。こっからは目に入る奴は全員敵。片っぱしから殴り倒してやる。

02

武道場内は三区画に別れており、空手部の道場は一番奥に位置していた。

ここに入り込んだのが間違いなのだと思わせる様な、独特の静けさが建物全体に充滿している中、その厳かな静寂には不似合いな、何かを嘲るような笑い声と、くぐもった呻き声が耳に届いてきた。ギリギリと無意識のうちに奥歯を喰いこむ。こんな平凡な学校で、まさかこんな最悪な気持ちになるとは思わなかった。結局、場所が変わろうが、人が変わろうが、クソみたいな奴はどこにでも居るということなのだろうか？

俺は歩みを速め、道場の奥へと急ぐ。過去を振り切る様に、今、この先に居る敵を睨みつけながら。

「おやあ？ お友達が来たようだよ」

学ランの男の一人が道場の入り口に立つ俺を見つけ、茶化す様な口調で笑う。それに合わせた様に、周りにいる同じ姿をした男達もゲラゲラと笑っている。板張りの床には、後ろ手に縛られた大輔が、顔を踏みつけられたまま倒れていた。

「す……諏訪先輩、なんで」

頬を足で押さえつけられたまま俺を見た大輔が、目を見開きながら驚いている。

「何だよ、助けに来てやったんだからもうちょい喜べよ。人質甲斐の無え奴だな」

「……何でっすか？ 俺、先輩を利用したのに、——俺なんかこうなっても仕方ないのに！！」

大輔の両目に涙が溢れ、殴られ、血の滲んだ頬を濡らしていく。それを見た大輔を踏みつけていた男が、「うわ、汚ねえ!!」と大輔の顔を蹴りあげた。

「何だよお前ら？　もしかしてアレ？　お水も達ってやつ？　やっべえ！　マジきめえ!!」

「ギャハハハハ、それマジウケるし!!」

道場中に下卑た笑いが響き、一番奥に座る男が立ち上がり声を上げる。白い学ランを着込み、剃りあげたスキンヘッドは見上げる程高い。

「何の用だ諏訪？　まさか、まだ教育が足らんかったか？」

見下しながら、憎たらしい口ヒゲをニヤリと上げるその顔は、侮蔑と己に対する自信に満ちている。こいつ等のボス、早乙女 薫である。二浪しているそうだがどうみても三十代にしか見えない。

「なんで大輔をボコってんだ？　お前らの仲間じゃねえのかよ？」

俺のその問いに、学ラン共がまたゲラゲラと笑い出す。

「コイツは裏切り者よ。どこから調べたか知らんが、応援団幹部の情報を売り渡しおった」

学ラン共が、ゴミでも見る様な眼を大輔に向ける。ただ、その中の一人だけは、自分の身を隠す様にしながら、伺うような目を俺に向けている。

おそらくあいつは、昨日の卓球部部长だろう。大方、昨日俺に

吐いた事を全て大輔に擦り付けでもしたってところだろうか。俺と目が合った瞬間、いきなり拳動不審になったところ、この推測もあながち外れていないだろう。

「まったく、しょうもなくて泣けてくるぜ。もういいよ。――めんどくせえ」

俺はグツと拳を握り込み、一番近くにいた学ランの肝臓にその拳を叩き込む。いきなりの強襲に身体力が抜けていたソイツは、白目をむき、嘔吐しながら崩れ落ちていった。

「ほい、一人め終わり。おら、次だ!!」

続いて、大輔を踏みつけまま固まっている学ランの腕を取り、逆手に捻じり上げつつ足を払う。顔面から硬い床板に叩きつけ、とどめに膝を後頭部へグシャリと降ろせば、リタイヤ二人目の完成だ。

この時点で、残りはハゲを含め四人。現実的にいえばまだこちらの方が当然厳しい。しかし、なるべく残忍に、確実に一撃で倒す方法を取ることで相手を委縮させれば、なんとかいける人数ではある。

そして予想通りに、数で勝る学ラン達はうかつにかかる事はせず、警戒したまま俺を囲んできた。

「ハッ！ 何ビビってたんだお前ら。こんな奴、ただの不良じゃねえか!!」

学ラン達の中でも、割と体格の良い一人が半歩前に踏みだしてくる。中腰に構え、正中線を隠すように両拳を上げたまま、さらに半歩前進。

たぶんコイツが空手部の部長だろう。そして腕にもだいぶ自信がある様に見えた。

「見てろ！！　こんな毎日遊び呆けている奴に、日々辛い訓練に耐える俺達が負けるわけ無えんだ！！　喧嘩と違う、本物の武道を見せてやるぜ」

不敵なまま、空手マンはその言葉も言い終わらない内に俺の目の前まで詰め寄ってくる。

右肩が動くのを確認し、正拳突きが来るのを予想しながら、俺はそれを受けるために左腕でガードの体勢に移る。

だが、衝撃は俺の予想を裏切り、左の脚を突き抜け、バシッ！　と、何かを強く打ちつけた様な音を道場内に響かせた。

空手マンのフェイントを織り交ぜたローキックが、見事に俺の左膝上を射抜く音だった。

——フェイントかよ。　流石は腐っても部長つてとこか。

鈍い痛みに一瞬気を取られた瞬間、目の前に拳ダコで武装された拳が迫るのが見えた。

拳はそのまま俺の左腕を突き抜け、硬い鈍器の様な重い一撃が俺の顔面をへこませる。

「——っがは！！」

ズクンとした疼く痛みが鼻のあたりに走り、板張りの床にボタボタと血を落とす。

脳内にドクドクとアドレナリンが溢れ、その痛みよりも更に強い怒りが俺の感情を塗り潰していく。

「どうだ。これが本物の空手——グベボツ!!」

見事なコンビネーションをくれて油断しきった空手マンの顔に、全力の右ストレートを叩き込む。拳はベキベキと空手マンの歯をへし折り、ゴリユツとした顎の碎ける感触を俺に伝えてくる。

空手マンは白目をむき、受身も取らないまま後ろに倒れ込んだ。

「はい三人目。どうしたよ？　これが本物の武道か？」

それを見た他の学ラン達が「もう嫌だ!」「俺は関係ない!!」などと勝手なことを口にしながら、散りじりに道場から飛び出していく。

ただ一人残った団長である早乙女は、その顔から余裕を完全に消し去り、沈黙したまま俺を睨みつけてくる。

「よお、大将。後はテメエだけみたいだな」

鼻血を拭きつつ、右拳に刺さった空手マンの歯を抜き取る。良い感じに温まった身体は、痛みよりも興奮を覚え、次の獲物を欲した様に自然と早乙女に構えをとった。

「——解せんな。貴様のような不良が、何故こんな奴を助ける？　こいつはお前を利用し、それだけでなく我等も裏切った蝙蝠の様な下種だ!!　助ける価値など無かるう!？」

早乙女の腹に響く怒声と射殺するような視線が、うずくまったまま震える大輔を更に委縮させる。

「勘違いしてんじゃねえよハゲ。こいつはオマケだ。俺はテメエ等が気にいらねえ。だから徹底的に潰す。——そんだけだ!

！
」

拳をさらに握り込み、見上げる程の巨漢に歩を進める。恐怖心など微塵も感じない。

今は、今だけは、この目の前に居る、憎たらしいハゲのツラに拳を打ちこみたくて堪らない。

「又ハハ！ 所詮は貴様の私怨か！！ その負けん気は嫌いじゃないが、己の為に振るう拳など、たかが知れている事を教えてやる！
」

「ぐだぐだウツセんだよ、——このクソハゲがああああああ
！！！！」

俺が腕を振り上げると同時に、早乙女の丸太の様な剛腕が振り落とされる。

ガツンという音と共に、目の前に火花が散るのを見た瞬間、急に膝から力が抜けるのを感じ、ぐらぐら震える両膝に力を込め踏みとどまった。

目の前を見れば、口からボタボタと血を垂らす早乙女が、驚愕と怒りに満ちた顔を俺に向け立っていた。

——血が目に入り、視界が滲む。口の中は血の味がするわりに喉はカラカラだ。荒い息をつく度に肩が動き、それだけで疲れを感じる。

目の前にいる早乙女を見る分にも、状況は似た様なものだろう。

純白だった学ランも今は所々に血が付き、胸のボタンは引き裂いたように開かれている。

顔面なんかもつと酷い。しこたま殴ってやったかいもあり、今やボコボコに腫れあがったオッサン顔は軽いスプラッタである。

グロ注意の標識がなけりやとてもお見せできないだろう。もっとも、それは俺にも言えることだろうが。

「見事だ諏訪、わしとここまでやり合った者は貴様が初めてだ。それ故に、残念で仕方ない。貴様さえ望めば、ワシの右腕として団に迎えたものを」

ゼエゼエと息を吐きつつ、早乙女がどこかで聞いた様な贅辞を送ってくる。何でコイツは一々言う事が芝居染みてるのか。漫画の読みすぎだろうか？生まれてくる時代を間違うにも程がある。ギシギシと軋む身体を上げ、殴りすぎて痛む拳を前に突き出す。負ける気なんざサラサラないが、身体が言う事を聞かなくなってきた。出来るならそろそろ決着を付けたい。

「こんな腐った団頼まれたって入るかよ。それに俺は、一人が気

「楽で好きなんだ」

「その通りだハゲめ。それに秋葉は私のモノだ。そんなストーリー軍団に入団させるなど認めん！」

いきなり背後からそんなセリフが聞こえ、驚きつつ後ろを振り向けば、道場の入り口に八代が仁王立ちして立っていた。その後ろにはアビ子と蘭子の姿も見える。

「……何で来てんだよ。待ってろって言っただろうが」

俺が呆れながらそう言うと、「だって暇だったし」とアビ子。野次馬根性かよ。

気が抜けそうになりつつも、その隣に立つ蘭子を見れば、道場内の惨状に顔を真っ青にして震えている。

しかし、その釣り目がちな大きな眼が後ろ手に縛られ倒れている大輔を捕えた瞬間、「大輔っ！！」と叫び、弾かれた様に駆け寄っていた。

「——何で？ 何でこんな風になっちゃうの！？ 私達が何をしたって言うのよ！！」

ボロボロと涙を流しながら、大輔を縛る縄を解こうとする蘭子。

大輔は、泣きながら問う蘭子から顔をそらす。下唇を噛みしめ、その表情は後悔の色を湛えているようだ。

何も言わない大輔を見た蘭子は、その視線をキッと俺に向ける。涙で濡れる瞳には明らかな敵意が宿り、全て俺が悪いのだと口に出さないまでも、訴えてくる様だった。

「勘違いするなよ蘭子。秋葉を恨むのは筋違いというものだ」

それを見た八代が、ハッキリと正す様にそう言った。 ゆっくりと俺と早乙女の間に進み、しかし視線は蘭子に向けたままだ。

「今回の事件、お前やアビ子。そして秋葉を巻き込んだのは、そこに居る大輔だ。 ついでを言えば、この裏応援団も、その大輔の片思いに巻き込まれたといったところか？」

八代の言った言葉に、蘭子は理解できないといった顔で大輔を見る。 大輔は蘭子と目を合わせないまま「……ゴメン」と呟くだけだった。

「えええい！！ 何をゴチャゴチャと！！ ——女ごときが間に入るなあああ！！」

その時、今まで空気だった早乙女が怒声を上げながら、間に立つ八代に掴みかかる。

——しまった！！ と思ったのも一瞬。

八代は迫る巨体をひらりとかわし、制服の背中からスリりと木刀を取り出す。 そして、勢いを殺せず前のめりになった早乙女の後頭部に、右手に構えた木刀をこれでもかと振り下ろした。

打撃音が道場に響き、頭から突っ込むように昏倒する早乙女。

そして、その巨体に片足を預け、涼しげな眼で微笑さえ浮かべ見下ろす八代の姿は、美しいを通りこして逆にひいた。 死んではいないと思うが、躊躇の欠片もないその一撃を平然と放つ八代の姿は、俺から言葉を失わせるには充分だった。 なんて女だまったく。

「お疲れ様だね。 諏訪くん」

校舎の中庭に設置された自販機の前。 スポーツドリンクを俺に差し出しながら、アビ子も自分の分に口を付ける。 本当にお疲れ様だまったく。

あの後、混沌と化した道場で蘭子と大輔をとりあえず先に帰宅させたまでは良かったのだが、残った応援団の連中をどうするかとなり、どこから持ってきたのか左に荒縄、右手にデジカメを携えた八代が「後は私にまかせろ」と俺とアビ子を道場内から追い出してしまった。

正直これから奴等がどうなるかと同情さえ感じたが、助ける義理も気力もないので、今はこうして中庭で疲労しきった身体を休めている。

「でも、本当に解決しちゃったねえ。 やっぱ流石だわ諏訪くん」

「俺にはよりいっそう面倒くさくなっただけにしか見えねえけどな」

実際、これで蘭子に連中が付きまとう事は無くなると思う。

しかし、大輔と蘭子の関係はどうなるのだろうか？ 大輔は純粋に蘭子の事を思い、頑張ったのだろう。 それが例え、俺を利用する様な形になってしまったとしても。

「まったく。 八代の馬鹿が余計なこと言いやがって」

「それは違うよ。 八代ちゃんは、ちゃんと言ってたからね」

「……何をだよ？」

「最初に、皆が集まった店あったじゃない？ 諏訪くんは途中で帰っちゃったけどさ」

そう言っアビ子はあの日、俺が居なくなつた後の事を話した。俺の態度に腹を立てた蘭子と、それを宥める大輔。そして、それを見た八代がこう言つたそうだ。

「これで秋葉は、絶対にこの件を解決させるだろう。ただしお前達も覚悟しておけ、もしそれがお前達の望んでいなかった結果になつても、それは全部自分の責任だという事を」

案の定、そう言われた大輔も蘭子も、意味が分からないといった風な顔をしていたそうだ。聞いた俺も意味が分からない。

「でもさ、アタシも何となくだけど、八代ちゃんと同じ事思つてたんだよね。責任とかそういう事じゃなくて、諏訪くんは絶対何かやらかすみたいな」

「何だそりゃ？ 言つとくがな、俺は本当に関わる気は無かつたんだ」

呆れながらそう言う俺に、アビ子は「だって諏訪くんってそういうキャラじゃん」と言つてのけた。

どうにも変な誤解が生じている気がする。言つまでもなく、それは八代が発端であり、そしてその誤解は俺としては甚だ遠慮願いたいものだ。

「諏訪くんはさ、自分は関係ないとか言いながら、結局は全部抱え込もうとしちゃうんだよね。しかも、それを自分で分かつてるかワザと人を寄せ付けけない態度とつてる」

「うるせえよ。勝手に俺を分析してんじゃねえよ。何のカウンセリングだよクソが」

それがそもそも誤解なのだ。俺はなるべく他人の荷物なんか持ちたくないし、自分がそれをどうにか出来るなんて思っちゃいない。自分が無力な事なんか、とつくの昔に理解している。

「まあ、何にしろ蘭子ちゃんと大輔くんの事は本人達の問題だよ。アタシ達ができる事はここまで」

アビ子が飲み終えたアルミ缶をゴミ箱に捨て、「八代ちゃん遅いねえ」なんて背伸びしているのを見ながら、俺は思う。

もし俺の目の前に、見知らぬ誰かが困っているとしても、俺はそいつを見捨てるだろうし、それは困っているそいつが悪いのだと思うだろう。それが逆の立場なら、俺は誰かに助けを求めたりしたくないし、助けられたくもない。

——それでも、どうしようも無い程に困っていたのなら、俺はそうする事ができるだろうか？

「……アホくさ。んな事考えるだけ時間の無駄だな」

ぬるくなつたスポーツドリンクをグイッと飲み干し、余計な思いと共にゴミ箱に放る。

やたら疲れた痛む身体を伸ばし空を見れば、夕焼けも沈みだし、藍色が空を中途半端に塗り替えていた。

V S 裏応援団 (11) (前書き)

エピソード

あれから三日。顔の腫れだいぶひき、俺はいつも通りの日常を
変わる事なく過ごす毎日だ。

——なんて綺麗な落ちを期待したのなら、そいつはとんだ甘ちゃ
ん野郎と言っておこう。

この三日間の事を思い出しただけでも、軽く眩暈を覚えるほどに
色々な事があった。

まず初日からして最悪だ。なんせ登校してすぐに職員室に呼び
出されたかと思えば、俺以上に困惑した教師達に質問攻めにあう始
末である。

「いったい何があった？」

「武道場のアレはなんだ？」

「本当にお前がやったのか？」

顔を青ざめた教師達がうるたえながらそう問い立てる原因は、学
校中に貼られまくった写真が原因なのは言うまでも無い。

なんせ、朝っぱらから校内はその話題でもちきり、ホームルーム
まで中止になる始末である。

どこのS M雑誌から切り抜いてきたのかと思うほど、見事に荒縄
を身体に喰い込ませ苦悶の表情を浮かべる裏応援団の面々。顔に
は気持ち程度の目線が引かれてはいるものの、知ってる奴が見れば
一発で本人だと見分けることができるだろう。

半裸の身体には油性マジックで「僕達は悪い事をしました」など
と書かれており、早乙女に至っては額に「ナッパ」とまで書かれて
いる。

そんな写真が校内のいたる所に張り出されていたのだ、教師連中のこの慌てようも納得だろう。

むしろ納得いかないのは、何故それを俺がやった事になっているかなのだが……。

これはまあ、曰くその日、俺が武道場に入っていくのを見たとか、前日にこの写真の連中と揉めていたとかの噂を耳にした教師の判断らしい。

もちろん、そんなものは知らぬ存ぜぬで突っぱねたのだが、顔に残る傷を指摘され窮地に陥っている所に、意外な人物が俺に助け舟を出して来た。

「——その人は関係ありません。この写真は俺が撮って校内に貼りだしました」

問い詰められる俺の前に出て、全て自分がやった事だと胸を張り、深く礼をする大輔。その隣には一緒に頭を下げる蘭子の姿もあった。

それを見た教師達はより一層混乱し、そのまま俺も職員室を追い出されてしまった。

「フッフ、えらい事になったな」

ピシヤリと閉ざされた職員室扉の前、八代が追い出された俺を見ながら、妙に晴れやかな顔でそんな事を言う。

「なんでお前がそこに居る」なんて言うのも無駄なので、俺はそのまま教室へと歩を進めた。八代もそんな俺の態度は慣れたものなのか、何も言わずに隣に並んでくる。

「フッフじゃねえよ。お前があいつ等けし掛けたのか？」

「人聞きの悪い事を言うな。 あいつ等はあくまで自主的に入っていった。 私はあらぬ誤解をかけられた憐れな子羊の様子を見に來ただけだ」

真犯人がどの口でそんな事を言いやがるか。 今すぐにでも八代の首根っこを引っ掴んで「犯人はコイツだ！」と職員室にとんぼ返りしたくなつたが、俺の前に名乗り出た大輔の顔を思い出し、それは野暮なことだと思う。

大輔はこれを奴なりのケジメとしているのだろう。 なら、それを邪魔する気なんて俺にはまったく無いのだから。

「……それより、アレ全部お前が貼つたのか？ いったい何枚ばら撒いたんだよ」

「ああ！ 大変だつたぞ。 昨日帰ってから現像とコピーを三百枚ほど終わらせたらもう夜中だな。 真夜中の校舎に忍びこみ、駐在の警備の目をかわしながらの作業は骨が折れた」

「……ああ、そう」

大変だつたと言う割に、楽しくて仕方なかつた様子で語る八代を見れば、コイツには何を言つても無駄だろうと達観してしまう。

いまだザワツきの絶えない廊下を歩きながら、まあこんな終わり方も悪くないなんて思った。

——これで終わったのなら本当に良かったのだけれども。 問題はそれから二日後、つまり今日の昼休みの事だ。

いつものごとく資料室へ向かう俺は、その日やたらと視線を感じながら教室のある本棟から、実習棟へ続く渡り廊下を歩いていた。

誰かの視線というわけでもなく、全体の視線とでも言えばいいのか。

そもそもこの日は登校してから教室に入った時点でおかしかった。もちろん、俺が登校してきてクラスの中と爽やかに朝の挨拶を交わすなんて光景は入学以来一度も無いのだが、それにしたって皆余所余所しい。

俺が教室に入った瞬間に、それまで廊下にまで届いていた談笑やら椅子を動かす引きずる音がピタリと止み、誰もが極力俺を見ない様に静まり返る。

それでも、アビ子だけはお気楽に「オハヨ」なんて声をかけてきたが。

そんな空気がずっと昼休みまで続いたのだ、普段から居づらい教室も今日は八割増しで居づらい。むしろ居たたまれない。

昼を告げるチャイムが鳴った瞬間、俺が教室を出たのを誰が責められよう。

それでも、教室を出ればそんな空気が解放されると思っていた俺は甘かったのだろうか。すれ違う生徒達は俺を見れば露骨に怯え、目が合おうものなら百八十度ターンを決めて逆方向に走り去っていく奴もいた。

なんだコレは？ 新手のイジメにしては大人数すぎやしないか？ 校内イジメを地でいく人数が投入されている気がする。

「それはな。裏応援団を殲滅させたのはお前だという噂が校内に知れ渡ったからだ」

資料室に到着し、今朝からの異変を先に来ていた八代に話せば、そんな答えが返ってきた。どうでもいいが、チャイムが鳴った瞬間に教室を出た俺より早くここに居るのはおかしくないか？

「殲滅て……。なんだその噂!？」

「簡単な事だ。職員連中にはアレは蘭子と大輔のイタズラ程度の認識しかされていないが、生徒達がそんな事信じるわけが無いだろう？」

あんなヘタレが裏応援団を潰せるわけがない。……じゃあ誰がやったんだ? とな」

「おう、それだよ。　そーいやあの二人、あれからどうなったんだ?」

「嚴重注意で済んだらしいな。　元々学校側にも非公認の連中だ。問題にするより内々に処理するようにしたんだろっ」

いかにもつまらないといった様子で、八代は駄菓子をシャクシャクと口に放っている。その量に見てるこっちが胸やけしそうになったが、それよりもまず俺は問い質さねばならない。

「……で?　噂の出所はどこなんだ?」

「さあなあ。　おい、そんな事より聞くんだ秋葉!　実は最近、この周辺の山で人面犬の目撃情報を入手したんだが」

わざとらしくシラを切る八代を見て俺は確信する。

「犬なんざどうだっていいんだよ!　……ああ、薄々分かつちやいたがやっぱお前か」

「私だけじゃない。　主に私と、ちょっとだけアビ子だ」

「ああ、そうですか。 てか、なんでそんな偉そうなの？ ちよつとは悪そうな顔しろや！」

「なあ、人面犬って何を食べると思う？」なんて無邪気に聞いてくる八代を見ながら、俺はどうやって人面犬の探索を回避するかを考えていた。

v s ハーレム主人公 (1)

01

昼飯も食い終え、まったりと過ごす昼休み。十畳程しかない資料室の中、今日発売された週刊漫画をペラペラと機械的にめくりつつ、俺の視線は珍客へと向けられていた。

そいつはソワソワと室内を見渡し、しきりに「すっげえ」だの「秘密基地みたいっすね!」と興奮しながら目を輝かせている。

「ちよつと落ち着け馬鹿。そこに予備のパイプ椅子あつから、とりあえず座れ」

「あ、マジっすか?」と言いつつ、部屋の隅に掛けられたパイプ椅子を一つとり、俺の目の前に座るのは狩野 大輔。

裏応援団の騒動もだいぶ落ち着きをみせ、生徒達の俺への過剰な余所余所しさも薄らいできたここ最近、やっと俺のまったりスクールライフも通常軌道に乗ったかと思えば、これである。

「いいっすね、この部屋! なんか秘密基地みたいで。俺も通っちゃおうかな」

「ふざけんな。ここは俺のマイフェイバリットスペースなんだよ。分かるか? フェイバリットなんだよ。わかったら金輪際ここにくんない」

ただでさえ最近では八代までココに居座っているのだ。これ以上俺の学内での平穩空間を誰かに侵されてたまるか。

「それで、なんの用だよ。用が無いなら帰ってくんない。ほら、俺いまジャソプ読んでっから。めっちゃ忙しいから」

「あ、それ今週号っすか？俺もまだ読んでないんすよ。後で読ませて貰っていいスか？」

「良くねえよ！ちょっと図々しいなデメエ！いいからさっさと要件を言え」

いったい何の用が有ってコイツはここに来たのか。職員室でコイツを見て以来、今日まで姿を見ないと思えば、いきなり現われやがった。

別にもう終わった事なのでコイツをどうしようなんて考えちゃいないが、今さら何だっただ俺に会いに来たのか皆目見当もつかない。

「そつえば、八代先輩は居ないスか？」

「あん？……そついやぁ今日は来て無いな。何で？」

要件を促された大輔はしきりに視線を動かし、妙にソワソワします。喉まで出かかった言葉が出ない焦れったさを耐える様に押し黙ったかと思えば、意を決した顔で俺を見据えてくる。

「——あの、諏訪先輩と八代先輩って、仲良いですよね？」

「……それで？」

「それでって！？あ……いや、それで、実は俺、見ちゃったんで

すよ！！ 昨日、八代先輩が他の男と歩いてる所を！！」

「……は？」と呆け顔で返す俺に、大輔は悔しそうに拳を自分の膝に叩きつけ、誤解と呼ぶには余りに恐ろしい事を口にする。

「——俺、諏訪先輩と八代先輩には感謝してるんす。それに、お二人は俺の理想っていうか、目標なんすよ！！」

……それがこんな事になっちまうなんて！ チクショウつ、この世に神なんていないツスよ！！ 女なんか信じらんねえ！！」

「おい、待て。 お前はえらい誤解してるぞ。 そんなで、なんでお前ちよつと女性不信気味なキャラになつてんだよ。 お前の立ち位置の変化には驚くばかりだわ」

その後、何故か話題が「大輔の蘭子への届かぬ想い」という話になり、結局、俺と八代はそんな関係では無いという誤解も解けないままで昼休みが終わってしまった。

余談ではあるが、大輔の告白は遂に二十回を超えたらしい。 本当にどうでもいい。

02

教壇に立つ担任が連絡事項を述べ終え、教室から出て行けば、やっと今日のお勤めも終了。 気楽で暇な放課後がやってきたわけだ。 クラスメート達が各々好きかって席を立ちだす中、教室の出入り口から、一人の男子生徒が真っ直ぐに俺の席に歩いてくる。

「やあ、諏訪 秋葉君だよな？」

そいつは俺の前まで来ると、やたら慣れ慣れしい笑顔で話かけてきた。

自慢じゃないが、この学校で俺に話かけてくる奴なんて片手で足りる程だ。オマケに、ここ最近はさらに一般生徒から避けられ気味である。

そんな俺に、堂々と前に立ち、それどころか親し気に話かけてくる生徒の存在に、俺以上にクラスメート達の方が驚いたらしい。途端にザワつきだす教室内に、その男子生徒は苦笑を浮かべながら「少しだけ時間良いかな？　ここはちよつと話辛しい」と教室を出る。

別に断る理由もないし、何より早く教室を出たいと思った俺は、誘われるまま、その男子生徒の後に続いた。

「悪いね、もしかして用事とかあった？」

廊下を歩きながら、男子生徒は気を使ったように言葉をかけてくる。上背もあり、体格も締まっている風を感じる割に、その雰囲気は柔らかく、物腰も低い。

「別に。――それより、あんた誰だよ。　たぶん初対面だよな？」

俺の返しに男子生徒は「ああ、ゴメン。　僕の方は君の噂は良く聞くから、他人って気がしなくて」などと言いながら苦笑する。

なんとか、無条件に警戒心を解かされるような平和オーラが漂ってくる。「たぶん良い奴なんだろう」　と強制的に思わせる様な違和感だ。

「うん、この辺なら問題ないかな」

男子生徒はそう言い、中庭に設置されている簡易テーブルの椅子に座り、俺に相席を進めてくる。特に拒否する理由もないので、俺も言われるまま腰を降ろすと「あ、何か飲む？ なんなら買ってくるけど」なんて気を使ってきた。

「いや、いいから。それよりさっさと話進めてくんない？」

しかし男子生徒は「でも、少し長くなるし、ここは俺が奢るから。ちよつと待ってて」とそそくさと席を立ち、自販機まで歩いていく。

何故だろうか？ その時、俺はハッキリと気持ち悪さを感じていた。別に飲み物を奢られる事が理由ではない。あえて言うなら生理的な拒否感。

何故そんなモノを感じるのか自分でも分からないが、ハッキリとコイツの事が苦手だと思ってしまった。

自分でも理解不能な気持ちに困惑しつつ、自販機に向かった男子生徒の方に目をやれば、何やら順番待ちしているらしく、のほほんとつつ立っている。

先に自販機の前にいた女子生徒が小銭を投入し紅茶のボタンを押すが、自販機のボタンは点灯したまま、一向にブツを排出する気配をみせない。

待てど暮らせど、自分が購入したはずの飲み物が出ないことに焦れた女子生徒が「え、何これえ」なんて言いながらボタンを押し直したり、釣銭返却のレバーをガチャガチャやるが、自販機はウンともスンともいわず沈黙していた。

「ゴメン、ちよつと良いかな？」

それを見ていた男子生徒が、その声をかけながら自販機の側面に

周り、ドンつと蹴りを加える。

途端にガコンと紅茶が取り出し口に落ちてきたかと思えば、ついでに釣銭まで戻ってきた。男子生徒は紅茶を取り出し、それを女子生徒に手渡す。女子生徒はしきりに男子生徒に礼を言いつつ、何やら自己紹介まで始め出した。その顔は心無しか妙に紅い。

一通り挨拶を済ませたのか、お互いに手を振りながら女子生徒と別れると、男子生徒は財布から小銭を取り出しコーヒーを二本、自販機から取り出す。

それを持って「いやあ、悪いね。少し時間がかっちゃった」と苦笑しながら俺にコーヒーを渡す男子生徒は、やっぱり気持ち悪かった。

「それじゃあ、まずは自己紹介した方がいいかな？ 僕は三年A組の田原たはら まこと誠。」

君と同じ、三間坂さんに才能を認められた一人だっていったら分かりやすいかな？」

椅子に座り、田原と名乗る男子生徒が、コーヒーのプルタブを開けながら、そうサラリと自己紹介を済ませる。

ただし、全体に漂う柔らかな雰囲気には似つかわしくない、鋭い視線を俺に向けながらだが。

「……帰っていいか？」

何だつてここでそいつの名前がでるのか。

——また厄介な奴が現われた事を確信しつつ、俺はコーヒーに罪は無いとプルタブに指を掛けた。

v s ハーレム主人公 (2)

01

熱過ぎず温過ぎず。舌に触れた瞬間に感じる、独特の酸味と、人工甘味料の甘さ。

嫌みなくらい鼻に薰るコーヒーの風味と、舌の奥の方に残るえぐみ。

「——うん、　　まずい」

奢ってもらったにも関わらず、小振りな缶コーヒーを一気に飲み干し、そう言い放つ俺はさぞかし性格が悪く見えたことだろう。

案の定、田原と名乗った上級生は、そんな俺を呆氣に取られた顔で見ている。

全身から帰りたいオーラを放ち、嫌々な態度を見せつけてもなお、それでも苦笑を浮かべ、八代の名前を出した事に対する俺の意見を待っているようだ。

「勘違いしないでくれ。僕は別に、君の事をどうこうしようって訳じゃないんだ。

ただ少し、同じ境遇の者同士、話をしてみたくてさ」

そう言いながら、あくまで紳士的な態度を崩さない田原に、またもや不快感を覚える。

何故だ？ 下級生にこんな態度を取られて、それでも理性的に対応しようとしてるじゃないか。なのに何故こんなにム力つくんだ？俺ってこんなに嫌な奴だったのか！？

「——クソっ！……わりい、それで、何を聞きたいわけ？

悪いけど、才能だ何だって話なら俺は付き合いきれないぜ。そんなもん信じてねえからな」

態度が自然と悪くなる。　そうしようと思ってもいないのにだ。どうした諏訪　秋葉！？　普段のクールな俺はどこに行っちゃったんだ？

しかし、自分でさえどうかと思う俺の態度にも、田原は気を悪くすることもなく、それどころか笑みを浮かべている。

寛容な人間とはコイツの事を言うのではないだろうか？　負い目さえ感じてしまいそうだ。

「いやいや、違うんだよ。　ほら、三間坂さんって何というか、凄く個性的な性格しているだろ？」

だから、君も結構苦労してるんじゃないかと思ってさ」

「……はあ、　まあ」

「だよねえ。　——ほら、彼女って他人の都合とか見ない所あるだろ？」

僕も最初は驚いたよ。　あんな人に会ったのは初めてだったからね」

お互いの苦労を確かめ合う様に、田原は頷きながら「わかるわかる」と言いながら一方的に肯定してくる。

確かに八代と出会ってから、いや、出会い方すら最悪ではあったが、何だコレは？　これじゃただの陰口ではないか。

こんな話をしたくて、田原は俺を呼び出したのだろうか？

「あのさ、話したい事ってソレなわけ？」

「ああ、ゴメン。　そうだよ、これじゃただの悪口だ。
駄目だな僕は。　気を悪くさせたなら謝るよ。　すまない」

田原はそう言って、テーブルに額が付きそうな程頭を下げる。

けっしてふざけた風でもない謝罪に、なんだか俺の方が悪い事を言
った様な気さえしてきた。

調子が狂うとはこの事だ。　俺の中で田原への苦手意識がどんどん
大きくなっていく。

「お兄ちゃん、見つけた」

謝罪する田原への対応に困っていたその時、いきなり砂糖にハチ
ミツをぶっかけた様な甘ったるい声が耳に入ってきた。

ソレは、いまだに頭を下げたままの田原の背中に突進し、しがみ付
く。

「おわあ！？　マ、マツリちゃん？」

突進された田原は背中にしがみつく女の子を見て、驚きながら振
り向き、ソレの名前らしきものを口にしながら困り顔を浮かべてい
る。

マツリと呼ばれた女の子は、なにやら恍惚な顔で田原の背中に顔を
擦りつけていた。

「もう！　お兄ちゃん、どこいったの？　マツリずっとお兄ちゃ
んのこと探してたんだよ？」

「ごめんね、　ちょっと友達と話をしてて」

女の子は頬を膨らませ、甘ったるい声で田原を非難するが、それ

は怒るというよりは甘えた様な感じであり、田原も何やら慈愛に満ちた顔で、その子の頭を撫でながら謝罪していた。

俺は二人の周囲に一気にピンク色の膜が張られた様な錯覚を覚え、思わず目をこすってしまう。

なんだこの超展開は。 いったい俺の目の前で何が起こっているんだ。 あと、俺はお前と友達になった覚えは無い。

「すまない諏訪君。 紹介するよ。 この子は、この高校の一年生で上野 ^{かみのまつり} 祭 ちゃん。

——マツリちゃん、彼は僕の友人で諏訪 秋葉君」

田原は無言でいる俺に気付き、若干慌てた様子で女の子から少し距離をとりつつ、俺とマツリにお互いを紹介する。

この学校の制服を着ている以上この子は高校生なのだろうが、上野祭と紹介された女の子はどこをどう見ても小学生にしか見えなかった。

「……私、この人知ってる。 怖い人だよね」

マツリは俺を見た瞬間、幼さの残りまくった顔をすがめ、田原の背に隠れてしまった。

田原はそんなマツリの態度にまたもや困り顔を浮かべている。

俺はといえば、今さらそんな態度とられた所で何も感じない鋼の心を手に入れているのでモウマンタイだが。

「こら！ マツリちゃん。 彼はそんな人じゃないよ。 ちゃんと謝るんだ」

「……でも、みんな言ってるもん。 この人に近付いたら、男の人は殺されて、女の人は妊娠させられるって」

やりたい放題だな俺。 マツリの一言に垣間見た俺の校内イメージに、鋼の心に少しだけヒビが入った気がしたが、俺は気付かない振りをした。

——ひょっとしたら、今日あたり涙で枕を濡らすかもしれないが。

「おお！ こんな所にいたのか秋葉。 探したぞ」

ややこしい時に限って、更にややこしい人物がその場に現れる。

校舎の二階。 ちょうど中庭を囲むような形になっている渡り廊下から、八代が柵から身を乗り出す様な形でこっちに手を振っていた。——かと思った矢先である。 八代はヒョイと柵を飛び越え、いきなり二階の渡り廊下から中庭に飛び降りたのだ。

スカートがまくれなように空中で回転を加えながら、タタンつと音を立て、見事な着地を決めた瞬間、マツリの口から「ほわぁ、ジャッキーみたい」と感嘆の声が漏れていた。

「何やってんだ馬鹿！ 危ねえだろが！」

「この程度で怪我などするものか。 それより、一緒にいるのは田原先輩か？」

重力無視のアクロバットを決めた直後、俺達の方へ歩きながら、八代が視線を田原へと向ける。

「やあ八代ちゃん。 相変わらず凄い登場だね」

「誰かさんのおかげで、少々無茶をしなくてはいけなくなりましたから」

二人の間に、不穏な空気が漂う。

八代はそのまま俺の隣まで来ると、テーブルに置かれた缶コーヒーに目を移す。

そして、何も言わないままその缶コーヒーを手に取り口元へ持つていくが、既に空になっっている事に気付き「……ちっ」と舌うちした。

「あ、良かったら僕のを飲むかい？　飲みかけで悪いけど」

「いえ、要りません。別に喉が渴いているわけではないので」

なら何故さつき俺のコーヒーを飲もうとしやがった！？

相変わらず訳のわからない行動をする女である。いきなり剣呑さを帯びてきた雰囲気、俺は早く帰りたい気持ちでいっぱいになった。

02

「やれやれ、困った事になったものだ」

テーブルに腰掛けながら、八代が珍しく弱気ととれる発言を吐く。俺は二本目の缶コーヒーを飲みつつ、そんな珍しい八代を眺めていた。

放課後の中庭。既に田原とマツリは帰宅し、今は俺と八代しかない。

八代が来てしばらくもしない内に、マツリが「お兄ちゃん！　私の買い物に付き合っつて約束だったよね！？」といきなり騒ぎだしたのだ。

田原も、既に見慣れた困り顔をしながら「すまないね、今日はもう無理そうだ」と言いながらマツリに連れていかれてしまった。

「なあ、八代。あの田原って奴に、お前は何したんだ？」

俺はさつきから気になっていた事をそのまま八代に問いかける。少なくとも、田原が俺に接触してきた原因は八代であり、そして八代のこの様子は絶対におかしいのだ。この二人に何があったかなんて別に興味はないが、その問題が俺にまで及ぶ様なら何かしらの対策をとりたい。

「別に何もしていない。私は田原先輩の持つ才能を教えたただけだ」

「それ、アイツも言ってたな。お前に才能を見い出されたただの何だの」

「コイツが才能だ何だ言ってたって事は、田原にも八代の言う「トラブルに巻き込まれる力」みたいなのが有るという事だろうか？それならばなおさら距離を置きたい。」

「安心しろ。田原先輩の才能はお前とは規模もタイプも違う。私にとっても、別段興味をそそられるものでは無いものだ」

「才能に規模なんかあんのかよ……？日本語おかしくない？」

「私が見つける才能は、一般に言う『運動神経が良い』や『歌が上手い』とは違うものなのだ。」

「言ってみればどうしようも無いもの。本人でさえ扱えないし抗えないもの。運命という言葉がニュアンス的には近いかな？」

主人公体質とは、誰かが望もうと思って手に入るものではないから

な」

「言ってる意味はサッパリわからんが、ならアイツもその主人公体質なのか？」

「そもそも、その主人公体質という言葉自体が胡散臭えんだよ。いったい何の主人公だよ」

話の展開がファンタジー過ぎてついていけない。

俺は自分が手からエネルギー弾を出したり、地球の危機を救ったりする姿を想像したが、アホくさすぎて笑えもなかった。

「お前は十分主人公じゃないか。」

私だつてたまには「——その時、秋葉の無骨な両手が私の豊満な胸を荒々しく揉みしだいた」とかモノローグを入れたいぞ！」

「おい、やめろ。お前の発言はギリギリを飛び越えている」

「ふむ。そうだな、お前が「嫌がりながらも、何だかんだ言つて事件を解決させてしまう斜に構えた現代っ子気質の主人公」だとするなら、田原先輩は「イヤッホォーウ！ 別段モテる要素なんかもないけど、適当に優しくしてたら何だかモテモテだぜ！」な主人公と言つたところか」

「……は？」

「わからないか？ そもそもジャンルが違うのだ。ピンクなハーレムでラブコメなど敵と言つても過言ではない」

「やめろ！ いいか、もう一度言つぞ？ ……やめろ」

これ以上は本当に危険だ。崩壊どころか反感さえ買いかねない。八代が俺を主人公だと言うのなら、俺には止める義務があるのだ。」

「よし、仕切り直した。田原がその主人公体質なのはこの際それで良い。それで、いったいその才能ってのはどんなもの何だ？」

「察しの悪い頭だな。言ったる？ モテモテ主人公だと。」

田原先輩は本人の意思とは関係なく、あらゆる場面で女性とのフラグを立てる。——しかも、美少女限定でだ」

真剣な顔でそういう八代には悪いが、俺はその時、少しだけ羨ましいと感じてしまった。

いや、ほんの少しだけだ。マジでマジで。

V S ハーレム主人公 (3)

01

まだ眠気の覚めない頭のまま、冷蔵庫を開ける。

半分ほど切り崩され、市販品サイズになった食パン一斤と、卵を二つ取り出し、ついでにフライパンを火にかける。

食パンを均一に二枚ほど切り出し、残りは冷蔵庫へ。次に、良く温まったフライパンに卵を割り、見事な目玉型に投下する。

食パンをトースターに突っ込み、フライパンに軽く蓋を被せれば、朝食の準備は完了である。

「おい、コーヒーと牛乳どっちにする？」

マグカップを二つ、食器棚から取り出しながら、ダイニングテーブルに座る八代へと声をかける。

シャワーを浴びたての八代は、少しだけ頬を赤らめ、濡れた髪をバスタオルで拭きながら「牛乳」と一言。

——そう。事後である。

……なんてのは悪い冗談にもならないわけで。

何故、朝っぱらからこんな展開になっているのか説明をさせていた
だきたい。いや、俺の名誉の為に説明をさせてもらう。

事の始まりは、朝日も昇りきっていない早朝。

けたたましく自宅の玄関を叩く音が鳴り響き、強制的に俺を眠りの
世界から汚れた現世へと引き戻したのだ。

半目で時間を確認すれば、なんと午前四時半。

新聞の勧誘すらも

う少し気を使う時間帯だ。

当然、俺は無視を決め込み、枕に顔をうずめるが、その間にも玄関の音は鳴り続ける。

音は段々と大きくなり、玄関戸の耐久値が心配になりだしたその時、ピタリと音が止んだ。

諦めたか？　と思い、枕から顔を上げた瞬間、いきなり「私を、助けるおー！！」とアパート全体どころか、町内中に響き渡ったのではないかと思えるほど叫び声がビリビリと俺の鼓膜を震わせた。

「——何だってんだチクショウ！！」

いったい何事かと思い、急いで玄関の戸を開ければ、そこには半泣きになり、疲労困憊といった様子の八代が座りこんでいた。膝には擦りキズ、制服は所々汚れ、頭には生ゴミらしきモノまで付いている。

「……おい、何なんだお前は。あと俺ん家の玄関は世界の中心でも何でもないから叫ばないでくんない」

「やっと出てきたかこの馬鹿者め！！」

——まったく、この私がここまで無様な姿を晒すまで登場しないとは、お前のドSぶりには呆れるばかりだ！！」

「俺の家まで押し掛けてきて登場もクソも無いだろうが」　と言いかけたが、八代のただ事ではない様子に言葉を飲み込む。普段は冷笑を浮かべ、美しいとさえ思える佇まいを見せる八代だが、今、俺の目の前にいるコイツはまるで落ち武者である。

さっきの叫び声に、隣近所の住人達も文句を言おうと各々玄関から

顔を出す、八代の姿を見た途端、関わるまいと遠巻きに見るに留めているようだ。

「とりあえず、その汚れをなんとかしろ。風呂貸してやつから」

そして、このまま八代を晒し者にするのも忍びなくなり、ご近所の目を気にしつつも八代を部屋に上げたというわけだ。八代の制服を洗濯してドライヤーで乾かしたり、誰かに苦情を受けたのか来訪した大家に謝罪をしていたら時間は午前七時をまわっていた。俺の睡眠時間は誰が返してくれるのだろうか。

ほどよく固まった目玉焼きを皿に移し、こんがりとキツネ色に仕上がったトーストをテーブルに運ぶ。

既に牛乳を飲んでいる八代は、口のまわりに白いヒゲを作ったまま「うむ、御苦労」と、どこぞの旦那さまよろしくな態度でそう宣った。

「ご苦労じゃなんだよ。——ったく、昨日から様子がおかしいとは思ってたが、今日はことさらおかしいぞお前」

「その点に関しては、私にも弁解する余地がある。まさか田原先輩の力がここまで強力だとは。完全に誤算だった」

カリッと、トーストに齧りついたまま、そんな事を言う八代。

「田原って、昨日の奴だよな？ お前の奇行とアイツに何の関係があるんだよ？」

俺はコーヒーを飲みつつ、昨日の放課後の事を思い出す。苦手

な奴ではあったが、別段危険な感じがするような奴には見えなかった。いや、むしろ善良とさえ思える。アイツが八代に何かするとはどうしても思えない。

「よく聞けよ？——私が今日、自宅を出たのが午前三時。そしてお前の家まで向かう途中に車に轢かれかけたのが五回。犬に襲われたのが二回。変質者と遭遇したのが一回。ドブ川に落ちたのが二回」

淡々とそう語る八代の眼は虚ろな暗さを湛えている。

「……すげえな」俺はそう言うのが精いっぱいだった。

「こんな事、どう考えてもおかしい。これはあくまで私の推測だが、田原先輩の力が私と秋葉の間に作用していると思えん」

「あん？　どういう意味だよ？」

「分からないか？　この力が働きたしたのは一昨日からだ。私は一昨日、田原先輩と会話をした。その会話自体はつまらないものだ。『最近、諏訪君って子と仲が良いらしいね』程度の会話だ。だが、それから私が秋葉に所へ行こうとする度に、必ず何か邪魔が入るのだ」

そういえば、昨日もコイツとは放課後にしか会っていないの思い出す。だからと言って、たかが一日二日で騒ぎ出して誰かのせいだと思つのもどうかと思うが。

それよりも、何故その田原の力が俺と八代の間に作用するのかが分からない。

一瞬、ひょっとして田原は八代が好きなのか？　という考えが浮かんだが、それなら何故、昨日は八代に関わって苦労したなどと俺に

言ったのか。

「ともかくっ！ 私は田原先輩の『彼女達』にされるのは御免だ！！この件に関しては秋葉、お前にも協力してもらっぞ！！」

俺としては正直どうでも良い気持ちしかないが、珍しく荒ぶる八代の気迫に押され首が勝手に肯いてしまっていた。

これを一生の不覚と言わず、何を言うのだと、激しく後悔するのに時間はそんなにかからなかったわけだが。

02

普段より三十分も早く出た通学路、生乾きの制服を着た八代が俺の隣を歩く。

同級生の女子と一緒に登校する。なんてある意味初体験なわけだが、まさかこんな形でそれを体験するとは思いもしなかった。

——できればしたくもなかった。

何故そう思うのかを話すには、途中に寄った芳沢ベーカリーの店主、遥さんのこの一言だけで充分だろう。

「……何だいアンタら。そりゃ何のプレイだい？」

俺達の姿を見た遥さんが、驚きと呆れを混ぜ合わせた様な珍妙な表情を作っている。

正確に言えば、俺と八代の手首を繋ぐ無骨な手錠を見て、だが。

「うつせえ。見るな、何も聞くな。あと、おみくじサンドイッチ二つくれ」

俺は羞恥と開き直りの極地とでも言うべき冷静な対応で、若干引き気味の女店主に金を渡す。

商品を受け取り、沈黙を保ったまま店をでる。去り際に遙さんの「あんな子じゃなかったのに……。」と言う声が聞こえた気がしたが、今は振り返らない。

「ほう、そのサンドイッチはいつもこの店で買っていたのか。私も通う事にしよう」

隣を歩く八代が呑気な声でそんな事を言うが、はたして俺は明日からどんな顔をして遙さんの前に出ればいいのかを考えると死にたくなった。

何故、俺がこんな羞恥に耐えねばならないのか。理不尽の神様、略して理不神の呪いだろうか？

俺の家で朝食を食い終わり、登校時間までまだだいぶ時間があるにも関わらず、「では、行くぞ秋葉」と乾ききっていない制服を着た八代の一言からこの地獄の時間は始まったのだ。

「は？ 行くて学校にか？ ちよつと早くないか？」

「馬鹿を言うな。私とお前が一緒に居るということに田原先輩の力がどう働くか分からないんだぞ。それを考えれば少し遅いくらいだ」

そう言いつつ八代は俺の右手を取ると、その手首に刑事ドラマでよく見かける様な黒光りする手錠をガチャリとかける。

硬質な冷たさが肌に触れ、俺の思考が一瞬停止する間に、八代はぶら下がるもつ片方の輪を自分の手首にはめていた。

「……おい、これは何だ？」

「うむ。これは手錠だ。安心しろ。その辺の玩具とは違い、材質は鋼鉄製、並の腕力では引き千切る事さえ不可能だろう」

「そりゃ安心だ。——それで、何故俺の手首にそんな物騒なもんが取り付けられてるんだ？ 外せ。今すぐコレを外せ」

「嫌だ。断る」

「嫌だも断るもなんだよ！！ 何してくれちゃってんのお前！？ 洒落になってなんだよ。外して下さいお願いします！！」

「どうしても外したいと言うのなら、私のスカートの中にある鍵を使えば良い。

その際には、お前は私の下着の中に手を突っ込み、まさぐりまわす事になるがな」

「せ、正当防衛だ」

「ああ、お前はそうだろう。だがな、考えてもみる。

年頃の男子に下着の中をまさぐられる乙女心というものを。もしそうなった場合、——私はお前を襲う。徹底的にだ！！」

「どんな脅し文句だよ！！」

かくして、泣く泣くそのまま登校する事になってしまったわけだが、やはりそれは早計だったのだ。

俺は何としても手錠を外すべきだったと後悔しつつ、「学校に着

けば外してやる」という八代の言葉を信じるしかなかった。

「確か……こつちだったな。 秋葉、少し遠回りするぞ」

「は？ 何だよいきなり」

通学路も半分まで差し掛かった辺り、住宅街へと沿れる道へ方向転換をする。

片手を八代に繋がれているため、強制的に俺も引つ張られるのだ。

これじゃ散歩中の犬ではないか。

庭先から常緑樹が並ぶ日本家屋やら、新築の様な小綺麗な一軒家が立ち並ぶ住宅街。

さぞかし治安もいいのだろう。 道路には空き缶一つすら落ちていない。

「なんか、スゲエ場違いな気がしちまうな。 金持ちが多そうだし。こんな所に何の用があるんだ？」

「しつ！ —— 静かにしろ。 見ろ、敵が来たぞ」

十字路の電柱に隠れるように、曲がり角の先を伺う八代がそう言いながら、顎先で標的を指す。

敵って何だよ？ と思いつつも、その場のノリで俺もつい隠れながら覗くと、五十メートル程先から、こちらの方に歩いてくる田原の姿が見えた。

「おい。 何だ？ てつとり早く闇討ちでもすんのか？」

「違う。 お前に現実を見せるためだ。 お前はいまいち田原先輩の力を疑っているようだからな。」

その目で実際に確かめた方が早いだろう」

「……疑っているというより、興味が無いんだけどな」

八代に促されるまま、そのまま田原の様子を見る。

きちんと着こなした制服に、背筋を伸ばし歩くその姿は、まさしく学校パンフレットにでも載ってそうな生徒といった感じた。この住宅街の小綺麗な風景に良く似合っている。

顔だって不細工でもなければ、むしろイケメンと言えなくもない。

ただ、相変わらず田原の全体から溢れる柔らかさオーラが俺の顔をしかめさせる。

「——！！ 来たぞ、良く見ている」

八代の押し殺した声が耳に入り、どうでもいいと思いつつも田原を見れば、何やら既視感を覚える光景が繰り広げられていた。

「お兄ちゃん、オハヨ」

「おっと、おはようマツリちゃん。 今日も元気だね」

昨日、田原に纏わりついていたマツリが、今日も朝一から田原に抱きついていていた。

アハハハ、なんて笑いながら挨拶を交わす二人は本当に仲が良いのだろう。 青春って感じた。

「で、アレがどうした？」

「どうしたじゃあるか。 お前はアレを見て何も思わないのか？ 言っとくがな、あの二人は兄弟でも何でもないんだぞ？ 縁もゆか

りもない他人だ。

それが「お兄ちゃん」だの言いながら乳繰りあってるのだ。
寒気がしないか？」

「いや、まあ……良いんじゃないの？ 本人達が納得してやってんなら。」

というか、あいつら兄妹じゃなかったのか。 そりゃそうだな、苗字違うし」

「……ふん。 その冷めた意見がどこまで続くか見物だな」

俺が冷めていると言うより、八代が捻えているだけだと思うが。
俺が一人で呆れているのを他所に、田原ウオッチングを続行する八代が「二人目のお出ました」 とまたもや俺を促す。

「おはよう、田原君。 相変わらずマツリちゃんと仲良しね」

いったい何時の間に現われたのか。 田原の前には、女子生徒が一人増えている。

おさげに眼鏡という、いかにもな格好をしたその女子生徒も、親しげに田原と朝の挨拶を交わしている様だ。
きつとあの女のあだ名は委員長に達しない。

「数学の課題はちゃんとやってきた？」

「あ！ やばい！ 忘れてたよ、うわぁーどうしよう」

「もう、仕方ないわねえ」

なんて和やかな会話が織りなされる空間を見て、確かに俺も八代の言う空寒さを感じたその時だった。

パキンッ！と手首の方から音がしたかと思えば、なんと俺と八代の手首を繋いでいた手錠の鎖が切れたのだ。

「――しまった!!」

八代がそれに気付いた時はもう遅かった。突然、俺達の背後からチリンチリンと自転車のベルを鳴らしながら、おばちゃんがヨロヨロと自転車で突進してきたのだ。位置的に少しはみ出ている八代は、このままだと確実に自転車にぶつかる。

「――クソっ!!」

間一髪、俺は八代を突き飛ばし、こちらに一瞥もくれずにそのまま走り去るおばちゃんを見送る。

社会人としてその態度はないだろうと思いつつ、八代の方に目を向けると、そこにはミラクルが起きていた。

「あれ？ 八代ちゃん？ 通学路こっちだったっけ」

「……違う」

「あら、田原君の知り合い？ 良かったら紹介してくれないかしら」

「あゝ、昨日のジャッキーさんだ」

「ジャッキーではない!」

「ふえゝん、このお姉ちゃん怖いよ」

八代は田原ハーレムの目の前に踊り出る形で、あのピンク空間の一員と化していたのだ。

心底居心地悪そうな八代は何だか新鮮で、俺は邪魔しちゃう悪いとそのまま踵を返し学校へ向かった。後でグーで殴られたけどな。

v s ハーレム主人公 (4)

01

「おい鬼畜。私に何か言う事は無いか？」

「冒頭初っ端から人の事を鬼畜呼ばわりとは随分だな」

「うるさい！ 私を見捨てたくせに！！ 見捨てたくせに！！！」

時間はすっ飛び放課後。朝に八代を見捨ててから、学校では一度も会うことなく今に至っている。

結局、今現在も俺と八代の間には田原の力とやらが働いているらしく、あの後も八代の身に何かあったのは明らかだ。

その証拠に、八代はジャージ姿に眼帯、髪もボサボサというヒロインとしては新機軸な姿になり果てている。

この一日でお前に何があつたんだ？ と問いかけるのも怖い。

「しかし、何というか凄い有様だな。お前そのうち死ぬんじゃないか？」

「ああ、段々とだが、確実に奴の力の影響が強くなっている。

このままでは私は美人で可愛い、おまけにクールが担当の萌え萌えキャラにされかねん勢いだ。

それはすなわち、私のアイデンティティーの死と同義」

今の八代の姿を見る限り、どう見てもお笑い担当にしか見えないがそれは黙っておく。男の優しさってやつだ。

ちなみに、俺達は今、いまやお馴染みの資料室に居る。

本来は放課後になると施錠されてしまうのだが、八代が通い出した頃にどうやったかは知らないが合鍵を作っているのだ。

こんな犯罪キャラが萌え萌えキャラになるわけがない。 需要があるのが危険すぎる。

「それにしても、お前がそんだけ苦労してる割には俺には何も被害が無いわけだが、これはどういう事なんだ？」

「……秋葉。 一つだけ質問なのだが、お前、今日私に会いたいと何回思った？」

「何だその恥ずかしい質問は！？ 中学生のカップルだよ」

「いいから！！ 何回思ったのか言ってみろ貴様あ！！」

八代が俺の襟を掴み、押し倒さんばかりの勢いで詰め寄ってくる。 答えは「一度も思っていない」 なのだが、今はそれを口にすべきではないと俺の中の何かが危険信号を発している。

無難な答えとしては、ここは黙秘権を行使するのが正解だろう。 ハードボイルドには寡黙さも時には必要なのだ。

「——ふん。 解かってるさ。」

なんせお前は、私がピンクハーレム空間に放りだされても見捨てる男だ。 そんな奴が私の安否など気にする訳が無い。

ドSな上に精神的インポテンツの鬼畜なものな。 私の事なんてどうでもいいのだろう」

「言いたい事は山程あるが、そこまで落ち込む様なことか？ あと俺はちゃんと正常に機能するからな？ そこだけは言わせても

らっ」

「身体の事ではない。お前のナニがちゃんと勃つことなど出会った頃から知っている。」

私が言っているのは精神、すなわちお前の心だ。お前まさか女性に興味が無い人なのか？ 分かりやすく言えばゲイなのか？」

「おい、サラツと誤解を招くような事言ってんじゃねえよ。俺はノーマルだ。それと昔の事は言わないでくんない。こっちは軽くトラウマなんだよ。あと俺はノーマルだ！！」

大事な事だからな。 大事な事だからな。 大事な事だからな。

「そのわりには、一向に私に手を出さんではないか。こっちは結構露骨に誘っているのに。」

それともアレか？ 何か特殊な性癖でもあるのか？ ロリコンとか熟女とか死体とか動物とか」

「お前は俺をどうしたいんだよ。どれ選んでもレッドゾーンじゃねえか」

「要領を得ん奴の相手は疲れるな。いいか、良く聞け。私がこんな目に在ってるのも、つまりはそこなのだ。」

お前には決定的にそういう要素が欠けている。言わば空白地帯なわけだ。

そこに田原先輩のあの力だ。まさにピンポイント。結果、恋だの愛だのピンク色が咲き乱れまくるわけだ」

本当に意味不明である。百歩譲って俺にそういう要素が無いからと言って、それで誰かに迷惑をかける訳でもないだろう。

いや、厳密に言えば八代が集中して被害を受けているのか？　しかし何故八代なのか。

「なあ、俺とお前はあくまで友達なわけだろ？

それを田原にちゃんと解からせれば、その力ってやつも消えるんじゃないか？」

「そんな事、とつくに私が言っている。——だからなおさら力が強まっているのだろ。　今なら自分の側に取りこめるとな」

取り込める。　その言葉を聞いて、俺の中に一つの疑問が浮かぶ。八代の話からすれば、田原の力は恋やら愛やら、言ってみれば、ある意味感情や気持ちの力なはずだ。

人の気持ちを取り込んで、無理矢理自分の事を好きにさせる事など出来るのだろうか？

よしんば出来たとして、その力を知っている田原は、無理矢理自分を好きになった相手をどう思うのか。

「そう考えるとなかなか難儀な奴だよな。　田原も」

別に同情したわけではない。　ただ少し、そんな人間関係は悲しいと思った。

「難儀しているのは私だ！！　秋葉、今すぐ私に惚れる。　おっぱい揉ませてやるから」

「惚れるかつ！！　……なあ、もし俺がお前に惚れたとして、その後お前は俺をどうする？」

「フハハ！！　そんな事は決まっている。　さんざん利用しまくっ

て、奴隷のごとく絞りとったあげく、飽きたら捨てるまでだ」

「お前って本当最低だよな。心配しなくても萌えキャラなんて無理なんじゃね？ 萌える要素が見当たらねえよ」

「ふん、嘘に決まっているだろ。私は友達には優しいんだ」

「そうかよ。――んじゃ、俺もその友達の為に一肌脱いでやるか」

「なんだ？ 揉む気になったのか？」

「なるか馬鹿。もう一度俺が田原と話をしてみる」

どちらにせよ、このままでは八代が本当に危険そうだ。知ってる奴がある日ポックリなんて気分が良いモノじゃない。どうにか出来るなら、どうにかした方が良くに決まっているのだ。本当に面倒な事だが。

02

翌日の昼休み。俺は田原の居る三年A組の教室に来ていた。

教室に入った瞬間、ザワつきと視線が一斉に俺に向けられる。俺だって出来れば入りたくなかった。

しかし、田原の席は、何というか女子に囲まれるように包囲されており、ある意味近寄り難い雰囲気形成されているのだ。

少し離れた場所で田原に声をかけ、さっさと教室を出ようと思ったのだが、田原はがっちり中央にいるため中に入るしかなかった。

「よお、ちよつと良いか」

田原も俺に気付き、席を立とうとする。

その時、そのハーレムの中に居た女の一人が、田原の前に立ち塞がる様に飛び出してきた。

「なによアンタ！ 田原君をどうする気？」

女のその剣幕を皮切りに、周りに居た女達も次々と俺に罵声を浴びせてくる。

「私知ってる！ こいつ有名な不良だよ！！」

「田原君を助けなきゃ！！」

「最低！ 死ねよクソヤンキー！！」

俺がいったい何をしたというのだろうか？ 例え俺が嫌われ者でも、ここまで非難される言われはないはずだ。 っすだけ泣きたくなつた。

「みんな、落ち着いて。 田原君が困ってるわ」

一向に止む気配のない罵声の中、一人の女子生徒がそれを制する様に一歩前に出てくる。

一見ダサさを感じるお下げ髪。 しかし、フレームレスの眼鏡が良く似合うその知的な顔立ちにはベストマッチと言わざるを得ない。 落ち着きながら、凜々しく場を仕切るその姿に、俺は思わず委員長と呼びたくなつた。

というか、この女は昨日の朝、田原と一緒に居た奴だ。 仲良し度の高さがハーレム内の地位の高さなのだろうか？ どうでもいいけど。

沈静化したハーレムを確認した委員長が、更に一步、俺に近付き、耳元に顔を寄せる。

「……もし田原君に何かあったら、貴方を殺すから」ボソリとそう俺に囁かれた一言は、本気で洒落にならない色を含んでいた。こいつは委員長でも何でもねえ。ただの危険人物だ。なるほど地位が高いわけである。

「言われなくても何もしねえよ。ピーピーうるせえ女共だな。少し黙ってる」

言われっ放しも何か悔しいので、俺は委員長の目を真正面から睨み返し、そう吐き捨てる。

その瞬間、教室内の男子連中からささやかな拍手が俺に送られた気がしたが、ハーレム女子達の殺気のこもった視線に一瞬で掻き消された。

男弱えー！！

そして委員長めっちゃ怖えー！！

お前ら、設定的に萌えキャラなんだからその顔はやバいだろ。これが文字媒体で本当に良かった。心からそう思う。

「ごめん諏訪君、良かったら外で話さないか？」

やっとハーレムを抜け出した田原が、お得意の困り顔をしながら俺と委員長の中に割って入る。

この空気に耐えきれないのか、若干焦り気味だ。ハーレムの主ならちゃんと教育しとけこの馬鹿。

田原と連れ立ち、教室から出る。

その際に、もう一度チラリと委員長を横目で見てみたのだが、まる

で冷酷なキリングマシンの様な目で俺をまばたきもせず見ていた。これがフラグというやつなら、明日から腹に少年ジャソプを仕込んでおく必要があるそうだ。

命の危険は八代だけではなく、俺にまで迫っている気がした。

三年の教室は一階に在るため、わざわざ階段を昇り屋上に行くのも躊躇われた俺達は、この前と同じ中庭へと向った。

昼休みは割と込む場所だが偶然空いていたテーブルを見つけ、そこに腰を降ろす。

「すまないね、わざわざ会いに来てくれたのに」

座って早々、田原が謝罪してくる。別にこいつの責任では無い気がするが、良く考えればさっきのアレもこいつの力なのだろうか？だとしたら相当やつかいだ。本人に悪気が無い所が特に。

「気にしなくて良い。それより、あんたに聞きたい事があるんだよ。」

あんたの力ってさ、自分でどうにか出来たりすんの？」

俺の質問に、田原は静かに首を横に振る。

まあ、八代が言う話では『扱えないし、抗えないモノ』らしいからな。

俺もこの答えは予測していた。改めての確認みたいなものだ。

「八代ちゃんから僕の力の事は聞いたんだろ？——そう、僕は何故か女の子にやたら好かれるんだ。不思議な事にね」

「随分と羨ましい才能じゃん」

「まさか。彼女達は僕の力の被害者だよ。こんな力、僕は喜んだ事なんて一度も無い」

やはり田原も悩んでいたのだろう。その言葉には後ろめたさと悔しさが滲んでいる。

しかし、それでも俺は気にかかる事があるのだ。今日はそれを聞くために田原を呼び出したと言っても良い。

「……何で、その力が有るのを知りながら八代に近付いた？ 普通は遠ざけるだろ、あんな意味不明な女」

「お前は八代が好きなのか？」 までは続けない。なんとなく恥ずかしいし。

しかし、田原は俺の質問をどう受け取ったのか、いきなり笑いだす。

「いや、違うんだ。僕は本当に君に興味があった。

八代ちゃんね、うん。本当に凄いし、魅力的な子だと思うけど、あの子は僕なんかじゃ手に負えないよ」

「言っとくけど、俺ノーマルだから。俺ノーマルだから。俺ノーマルだから！！」

八代に言った時より念入りに繰り返す。ハーレム主人公が実はゲイとか本気で笑えない。

その意思が伝わったのか、田原は「いやいや、それも誤解だよ」と付けたした。

「実を言うとね、僕のこの力は八代ちゃんに言われる前から自分で気付いてたんだ。そりゃそうだよ、僕なんかこんなにモテるわけないもん。」

——ただ、昔はここまで強くはなかった。せいぜい、可愛い子と良く出会っぐらいさ。

それが、八代ちゃんと出会ってからどんどん強力になっていったんだ。自分でもどうしようも無い程にね」

まじかよ。何て事をカミングアウトしてくれやがる。それじゃ俺はどうなるんだ？

「だから君に興味がある半分、心配だったというのもある。——でもそれも、僕の杞憂だったみたいだね。」

「いやいやいや、何爽やかな感じで締めてんだよ。全然締まってないから。むしろ心配の種が増えてるから」

昼休みの終了を告げる予鈴がなり、田原との会話を終えた俺は、何とも言えない気持ちのまま自分の教室へ戻る。

結局、八代のアレは自業自得という事なのだろうか？ 解決の糸口は更に見えなくなり、混乱は続くばかりだ。

結局、解決策も妙案も何も見えないまま、午後の授業は終わり、放課後を迎える。

だいたい、この手の問題自体が俺は苦手なのだ。誰かをぶん殴れば解決するって訳でもなく、よく考えれば悪い奴なんて誰も居ないとか。勸善懲惡ってつくづく都合主義だよな、何てことしか頭に浮かんでこない。

「どうしたんだい諏訪くん。何か悩み事かね？
あゝあゝ、そんなに眉間にしわ寄せちゃって。それ以上人相悪くしてたら益々みんな逃げちゃうぜい」

俺が自分の席でうんうん唸っているその時、我がクラスの何でも屋が話かけてきた。

「なんならお姉さんに相談しちゃいなよ。ロハだぜえ、ロハ」
とか言いながら、俺の前の席に勝手に座る。

アビ子か……。アビ子ねえ。

こいつだって性格はアレだが、見た目は悪くない。いや、むしろ一般的に見りや良い方だと思う。

少なくとも俺よりは恋だの愛だのには詳しい気さえしてくる。友達とかも多そうだし。

「なあ、お前ってさ、今好きな奴とか、付き合ってる奴いんの？」

「……はい？」

「いや、だから、お前は今、恋とか愛とか。ソレ系の感情持つてる相手いるのかって聞いてんだよ」

「何だよ諏訪くん、もしかして恋患い？ その歳で思春期爆発中？」

「俺の話じゃねえよ。 お前だお前。 日野山 安毘子は今、恋愛してんのかって話だろうが。」

「……よく考えたら、俺今めちゃくちゃ恥ずかしいセリフ連発してね？」

「うん。 ちょっと他人のふりしていいかな。 臭くてたまらないよ」

「悲しい事言っうな！！ お前が相談しろっつたんだろおが！！」

そうだった。 いくら外見が良からうが、基本的にはコイツも八代と似た様な思考なのだ。

「恋愛なんて甘ったるくてしょうがねえ」 とかいいだす人間側である。 それが分かる俺もまた、そうなのかもしれないが。

「それって結構、真面目な相談系？」

「別に答えたくないなら答え無くてもいいけどな。 俺だってよく分かんねえし」

「……ん、そうだねえ。 アタシの恋か」

アビ子はおどけながら、 しかしどこか陰を帯びた感じで一拍置いた。

その様子に、俺は何か地雷でも踏んだ気になってしまい、お互い黙
りこむ空気が出来あがってしまう。

何だコレは！？ 気軽に聞いた質問が地雷とか気まず過ぎる。

早く何か喋れよコノヤロー！！

俺のその願いが通じたのか、先に沈黙を破ったのはアビ子だった。

「アタシの恋はさ、もう終わってるから。——だから、参考には
ならないよ。ごめんね。力になれなくて」

重い。 予想以上に重い。 更に空気が重くなってんじゃねえか。
どうしてくれんだよ。

アハハとか無理して笑ってんじゃねえよ。——クソっ！！ こん
な質問した自分の馬鹿さ加減が憎いぜ！！

「わ、悪いな。 何かいらん事聞いたみたいで」

「いいよいいよ。 いやあ、しかし諏訪くんもとうとう色を知る
歳になったかあ。

お姉さんは嬉しいよ。 それで？ お相手はやっぱり八代ちゃん？」

「んなわけねえだろ。 お前だからこんな質問したんだよ」

他に聞ける相手なんかこの学校にはいない。 なんせ俺には友達
がいないからな。 自分のせいだけど。

しかし、俺のその言葉を聞いたアビ子の顔が一気に耳まで赤くなり、
途端に拳動不審になる。

なんだ？ まさかこれも地雷だったのか！？

「——アタシだから？ え？ ええっ！？ アタシ？ アタシなの

「!？」

「お、おう。俺の知り合いじゃ、お前くらいしか分らないと思
って」

「そ、そそそれは、諏訪くんの悩みは、アタシにしか分らない
って意味？」

「ああ、まあ、そういう意味だな」

「……ええ、今かよ。今くるのかよ……。——とつくに諦めて
たのに」

「おい、どうした？ 何か様子がおかしいぞお前、具合悪いのか？」

「いきなり優しくするなああああつ!! ああ、でもちよつと待つ
て、おかしい。これは何かおかしい!!」

「落ちて日野山 安毘子。アタシはクールな女。第三者的立ち
位置の女だ!!」

大変だ。アビ子が壊れちゃった。

「——何をさつきからイチャコライチャコラちゅっちゅちゅっちゅ
やっとするのだ、この馬鹿者があああああ!!」

「オゲツフっ——!!!？」

突然、椅子に座る俺の脇腹に鋭すぎるドロップキックが突き刺さ
る。

床に投げだされる様に吹っ飛び、胃液が飛び出すのを堪えながら見

上げると、そこには阿修羅の如き顔の八代が仁王立ちしていた。

02

「——なるほどね。それで諏訪くんが恋愛で悩んでたわけか。

しかし、まさかあの田原先輩とまで揉めてるなんて、諏訪くんは相変わらず手広いなえ」

「アイツの事知ってるのか？」

「そりや有名だもん。『ハーレムキング田原』ってね。

アタシの所にも何回か依頼きたし。『田原を闇討ちしてくれ』とか『田原の個人情報教えろ』とかさ。もちろん全部断ったけどね」

「凄えな。それって全部男の依頼か？」

「だね。片思いの子を取られたとか、単純に僻みだったりとか。怖い怖い」

アビ子は肩を竦めるジェスチャーをしながら身震いする。

俺の代わりに、八代がこれまでの粗筋をアビ子に説明し終わる頃には、既に教室の中の生徒は俺達だけになっていた。

ちなみに俺の脇腹の痛みはまだ続いていたりする。ここ数日で確実に八代の攻撃力も上がっているのではないだろうか？

「まったく。私が攻撃を受け困ってる間に二人で青春っぽい事をやりおつて。

本当に羨ましい限りだ！！今度からはちゃんと私も混ぜろ！！」

「意味わかんねえよ！！　元々お前の為にこんな事になってんだろ
おが！！」

しかし、八代がここで乱入してきた事で逆に助かったと思う自分
もいる。

さっきまでの妙にふわふわした空気は既に掻き消え、今はいつも通
りに戻っているのだから、たまにはコイツも役に立つものだ。
などと思いつながら八代を見てみれば、昨日の悲惨な姿ではなく、今
日は普通に制服だ。　眼帯すらしていない。

「なんだお前、今日は普通に制服なんだな。　田原の力は働かなか
ったのか？」

「ん？　ああ、慣れた」

「慣れたって何だよ」

「私だって学習するという事だ。　さっきもこの教室に来る間に三
回ほど襲われたがな。　逆に振り返り討ちにしてやった」

もはや言葉でもない。　ならもう別にこのままでもいいのではな
いだろうか。

その方が各方面に幸せな結果が待っている気がする。

「そんなわけあるか。　慣れたとは言っても、煩わしい事には変わ
りないのだ。　この力を消せるならそれに越したことは無い。

それで、田原先輩とはちゃんと話は出来たのだろうか？」

「まあ一応な。　でも、あんまり効果が有った気はしない。　話した

印象も、アイツも大変だなあって思ってたくらいだし」

俺は田原の言った「八代と出会ってから力が強くなった」という話は伏せながら会話内容を伝える。

これを言った所で、多分どうにもならない気がしたからだ。これが関係あるとすれば、多分俺の方だろう。

「ふむふむ。謎の恋愛パワーをどうやって消すかねえ。ところで諏訪くんは、田原先輩と話をして、どう解決する気だったのさ？」

アビ子が腕組みをしながら聞いてくる。

どう解決する？ そう聞かれると何とも言えない。俺はどうするつもりだったのか。

「おおかた、田原先輩が私を気に入ったと思い、そのまま田原先輩と私をくつつければ良いとも思っていたのだろう。

言っておくがな、私はあんな優しいだけの優柔不断な男など死ねば良いと思っている。万が一そうなった場合は刺し違えてでも私は田原先輩を殺すぞ」

それじゃ発想がああ委員長と同じじゃねえか。もし八代がそうなった場合、田原の前に委員長と血で血を洗うバトルになるのだろうか？

考えただけでも恐ろしい。田原巻き添えくって死ぬんじゃないか？

「その案は色々あって却下だ。第一、解決案が湧かねえからアビ子に相談してんだろ。こんな問題、俺向きじゃねえんだよ」

「いやあ、面目ない」なんてアビ子も頭を掻く。そろいも揃って恋愛経験値の低いメンツなのである。

しかし、八代は不敵な笑みを浮かべながら「私にまかせろ」と胸を張り出した。

何やら自信満々だが、俺にはむしろ嫌な予感しかない。

「要は、田原先輩の力より、秋葉の力が低いせいでこんな事になっているわけだ。

この理屈を逆手にとれば、田原先輩などカスだと言う事だ。そう考えれば、この勝負は勝ったも同然!!」

「えらい自信ありげじゃねえか」

「まあな。今までは私一人しか居ないという理由でこの手は使えなかったが、今はアビ子も居る。

これこそまさに天啓。決戦の時は来たのだ!!」

「ん？ アタシ？」

「覚悟は良いか秋葉。安心しろ、私も初めてだが知識だけなら誰にも負けん。

向こうがピンクハーレムなら、こちらはドギツイ濃厚ハーレムだ。

少々危ないプレイでもかまわん。思う存分欲望のままに絡み合っ
てやるさ!!

しかし、まさか初めてが学校の教室になるとは……。だが、これはこれで有りか。おっと鍵は一応締めておかんとな」

言いながら、八代はせっせと自分の制服のボタンを外しながら、教室の扉に鍵をかける。

その流れから、八代が何を考えているのか察した俺とアビ子は、お互いに顔を見合わせ苦笑しあった。

「よし、黙れ。お前はもう喋るな。あと上着を脱ぐな。いいか、そういうのは無しなんだ」

「何故っ！？ 二対一ではハーレムには勝てないとも言つつもりか！？

その点の心配はするな、例え二人だろうが濃密さなら負けないう自負が私にはある！！」

もはやR15で済まされないジョークである。大丈夫なのだろうか。色々心配になってきた。

「仕方ないね、こうなりゃあの二人も巻き込もうか」

アビ子が携帯を取り出し、どこかに電話をかける。

携帯を耳にあて、しばらく待った後、アビ子の口から出た名前に俺は眉をしかめる。

「——あ、ランちゃん？ 今ちよつといいかな」

それは、今以上に面倒になる予感しかない名前だった。

v s ハーレム主人公 (6)

01

『やあ、僕の名前は諏訪 秋葉。これと言って何の取り柄もない、顔がちよつとばかり良いだけの高校二年生さ。』

今日から始まる新学期、新しい出会いに胸を膨らませながら、僕は自室でクリーニングから卸したばかりの制服に袖を通す。

アビ子「おっはよう、あつくん！ あれ？ もう起きてる！？」

隣の家に住む幼馴染のアビ子が、今日もノックもなしに僕の部屋に入ってくる。

秋葉「こあら。勝手に部屋に入るなって言ってるだろ」

アビ子「何よ、いつもは私が起こしに来ないとず〜っと寝てるくせに」

秋葉「僕だって成長するんだよ、ほらさっさと下に行くぞ」

「はい」と返事をするアビ子と一緒に、一階のダイニングに向かう。階段を降りる途中から朝食の良い匂いが漂ってきた。

八代「あら、今日はずいぶん早起きさんなのね、あつくん」

秋葉「もう高校生何だから『あつくん』は止めてよ八代ママ」

俺はここまで読み、台本を床に叩きつけ、その上に容赦なく足を踏み下ろした。

「ああああ——！？俺の至高の作品に何て事するんスかつ——！」

「うるせえっ！！読んだだけで鳥肌が立ったわ——！」

「いったい誰だよコイツ等は！？あつくんじゃねんだよ。原作無視にもほどがあんだろあが——！」

昨日、アビ子が電話で蘭子に事情を話したところ、「そういう関係なら俺にまかせろ」と何故か蘭子と一緒に居た大輔が名乗りを上げたのだ。

時間も時間なので、集まるのは明日（つまり今日）の放課後の資料室となり、大輔は徹夜でこの「対ラブコメ原稿」を書きあげてきたわけである。

そして、つつがなく授業も終わり、皆が資料室に集まった時点でコレを渡されたわけだが、正直ページを開くことさえ躊躇われた。台本調に人数分用意されたソレは、外装はピンク一色、タイトルのつもりなのか表には『ときめけ青春ラブセレナーデ』と題字が打たれている。手書きで。

「いやあ、アタシは諏訪くんの幼馴染役なんだねえ。意外とおいしくないかい？」

「私が母親！？……いや待てよ、近親モノというのも背徳的で悪くない」

俺意外の女性陣は、何だかこそばゆい顔でブツブツ言いながら、

それでもこのクソ台本を読んでいる。

やめろ！ 何だこの満更でも無いみたいな空気は！！ あと近親モ
ノとか普通にありえないだろうが！！

「ちよつと大輔！ なんか私の出番やたら少くない？」

静かに隅の方で読んでいた蘭子が台本にケチを付けたす。 何だ
その無駄なアグレッシブさは。 お前は本当にコレに出たいのか？

「どうつスか諏訪先輩！ 先輩以外の人には好評みたいっスよ」

「……認めたくない現実を突き付けられた気分だけだな。
しかし何だこりゃ？ ラブコメってこんなのばっかか？ 毎朝起こ
しに来る暇があんなら、その分勉強してろって言いてえよ」

「その発言だけで諏訪先輩にラブコメ要素は皆無っスね。

いいんですか？ ラブコメってのはつまり男の妄想なんっス！！

ありえない事が当たり前に起こる世界なんスよ！！

毎朝起こしに来る幼馴染もいれば、曲がり角でぶつかる転校生もい
る！！ なんなら宇宙人でも、空から落っこちてくる女の子でも良
いんですよ！！」

前半はともかくとして、後半は普通にあり得ないだろう。

宇宙人に恋心を抱くとかどんだけ性に倒錯してるんだと思うし、も
し空から女が落ちてきたら、そりゃただの自殺志願者だ。

そもそも、いくら田原の恋愛パワーに対抗する為とはいえ、こちら
までラブコメになる必要があるのか？

「対策が分からない以上、あらゆる手段を試すしかあるまい。
それに、秋葉はその手の感情に鈍感を超えて不感症すぎる。 この

機会に少しでも女心を学ぶのも悪くなくろう?」

台本を読みながら、八代がそんな事を言う。

こんな妄想で女心が分かるのなら、破局するカップルも、離婚する夫婦もこの世から消えるだろう。えらい簡単な女心。

「でも、台本はあるとして実際どうすんの?

コレ、始まりは諏訪くん家だし、やろうとしても時間かかり過ぎちゃわない?」

やっとまともな意見がアビ子から飛び出す。そうだよ。始まりから不可能なんだよ。だいたい今は放課後だ。

「その点なら問題ない。問題はいかにラブコメに近付くかなのだから、学校のパートに重点を置いてやれば良いのだ。よし、早速実践に移るぞ。最初の学校のシーンから入ろう」

あっさり八代から打開策を打たれ、俺以外の全員がそれに従う。本気がよこいつ等、正気じゃないぜ。

02

「——それじゃ、学校に着いて、アビ子さんと別れるシーンからっすね。

その後、諏訪先輩は自分の教室に向う途中に蘭子とぶつかって、文句の言い合いになる所まで行きましょうか」

大輔が台本を見ながら流れを説明する。実際に台本通りの場所

で実演するという八代の無駄なりアリティの追求で、本当に昇降口まで俺達は来ていた。

放課後とはいえ、まだ学校には残っている生徒達も少くない。生き地獄とはこの事を言うのだろうか。恨むぜ田原。

「セリフは台本を読みながらで構わん。大切なのは空気だ！！
雰囲気を出して、恥ずかしさを捨てろ！！」

お前はどこの大監督なんだ？ 台本を片手に腕組みをしつつ、指示を飛ばす八代はノリノリだ。
アビ子は大輔に立ち位置の細かい指示を受けているし、蘭子はいえ、俺とぶつかるために少し離れた曲がり角でスタンバっている。何なんだこいつら。これじゃ俺一人だけ空気の読めない人じゃないか。チクシヨウ。

「まあまあ諏訪くん。これも人助けなんだから、楽しまなきゃ損だよ」

「これを楽しめるほど、俺はマゾにはなれねえな」

照れた顔で俺にそう言ってくるアビ子と一緒に、指定された開始位置に立つ。ちょうど靴箱から出て、ガラス張りの扉の辺り。

帰宅する生徒達には申し訳ないが、今は誰もここを通らないでもらいたい。俺が恥ずか死ぬ。

準備が出来た事を確認した大輔が「スタート！」と掛け声をかける。もはや完全に助監督だ。お前は脚本家じゃねえのかよ。

「『も、もう学校に着いちゃったね。……私、まだあつくんと一緒に居たいな。何だか今夜は帰りたくない気分……。』」

アビ子が台本を見ながら、自分のセリフを読み上げる。俺も自分の靴跡の付いた台本をひろげ、そこに書いてある文字をなるべく感情を込めずに喉からひり出した。

「『アハハハ……。アビ子は相変わらず慌てん坊さんだな。今はまだ朝だよ』」

ツッコむとこそこかよ!? 何だこの会話!? 高次元過ぎて理解できねえ!!

「『うん、ごめんねあつくん、我がまま言つて。私、馬鹿だよ。家に帰ったらいっぱいお仕置きしてね』」

「『オーケー。たつぷり可愛がつてあげるよ、僕の可愛い子猫ちゃん』——ここでアビ子と濃厚なフレンチキス……? できるかアホっ!! おい大輔ちよつとこっちこいやコラアアアアア!」

俺は台本を投げ捨て、このアホ過ぎる本を書いた脚本家を呼び付ける。

「え? なんスか?」

「『なんスか?』 じゃねんだよ!! お前は馬鹿か? どの世界に登校中の学校前で濃厚なフレンチキスぶちかます幼馴染がいんだよ!!」

それと何か冒頭から関係進み過ぎだろうが!! いったい朝から学校着くまでに二人に何があつたんだよ!?

「いやいや、そのくらい普通ツスよ。だって幼馴染ですよ？　このくらいやりますって」

お前の頭の中の幼馴染は絶対におかしい。馬鹿だとは思ってたがここまで末期だとは思わなかった。

俺の猛抗議に一旦演技は中止となり、臨時会議が始まる。本当に何なんだこのノリは？　いつから俺達は演劇部になったんだ。

「どうした秋葉？　何か問題でも？」

既に気分は大監督の八代が、ふてぶてしい態度で聞いてくる。

「問題だらけだろ。セリフだけでもアレなのに、キスなんか出来るかっ！！」

「アタシも、流石にキスはヤバいかな……アハハハ」

役者二人の懇願？　により、何とかキスは省略という形でこの場は収まった。

それでもこの演技自体は続行する様で、地獄の時間はまだ終わらない。今ならこの場所に核ミサイルが落ちてきても、俺は笑顔で消し炭になれるだろう。

再開は靴箱からアビ子が掃け、俺が教室に向うシーンからとなった。

実際の台本では、あの後アビ子と十分ほどキスをし、チャイムが鳴って慌てて別れるという流れなのだが、そこは全カットだ。

俺はわざわざ靴を履き替え、蘭子がスタンバイする曲がり角へと進む。

しかし、蘭子は俺が角に着く前に飛び出してしまい、慌てて体勢を

直そうとしながら盛大にこけてしまった。またもやパンツ丸出しで。

「『い……痛っ！』い。 ちょっとどこ見て歩いてんのよ！？ ちゃんと前見て歩きなさいよね」

傍から見れば蘭子が一方的にこけているだけなのだが、無駄な役者魂を発揮し、蘭子はその体勢のまま台本を読み始める。 パンツ丸出しで。

「『おいおい、ぶつかってきたのはそっちだろ？ そんな速さでこられちゃ、いくらライトニングハリケーンと呼ばれる僕でも避けられないぜ』」

だから一体誰なんだコイツは！？ 同姓同名の別人と考えても恥ずかしい。 無駄に異名とか出してんじゃねえよ！！

蘭子はやつと立ち上がり、縞パンがスカートの中に隠れる。 そして続きを読もうと台本を見るが、顔を真っ赤にして口ごもってしまった。

その様子に、俺も台本に目を落とし、続きを読んでみる。

蘭子 『はっ！！ よく見ればもの凄いイケメンじゃない！！ ちよっとそこの女子トイレまで来なさいよメーくん！！』

秋葉 『おやおや、またもや純粋な乙女が僕の魅力にまいっちまったかな？ オーケーお嬢さん。この快樂の墮天使が肉欲天国にご招待しよう』

くく二人は女子トイレでお互いの身体を貪り合う。

「はああああい！！ カットカットオオオオ！！」

——俺が、この二度目の猛抗議をしたのは言うまでもないだろう。

v s ハーレム主人公 (7)

01

「――いい加減にしろ秋葉っ！！ 貴様やる気はあるのか!？」

「あるわけねえだろがっ!!」

案の定グダグダなままこのラブコメ作戦は進み、場所を中庭に移したはいいものの、この日すでに何度目かも分からないストップをかける。

時間は既に午後五時を回っており、居合わせるメンツにも若干疲労の色が見えてきていた。

「大体な、行く場所行く場所すべてにキスやら愛撫やら合体やら求める意味がわかんなんだよ」

「何を馬鹿な事を、それが無かったらラブコメの意味が無いではないか」

「いい加減その勘違いしたラブコメ感捨てる。 皆が皆、お前みたいに頭の中が腐ってると思うなよ?」

ちなみに、この中庭では俺とアビ子が帰宅を待ち切れずにおっ始めるという内容になっている。 いったいこれは何の官能小説だ?

「あゝ、私そろそろ用事あるんで先に帰っていいですか?」

痺れを切らした様に蘭子が嘆息を漏らし、腕時計を見る。

「そうだねえ、アタシもそろそろバイトが始まる時間だし、今日はこの辺で解散にしようか？」

アビ子のその一言で場の空気は一気に解散ムードとなり、軽く別れの挨拶を交わした後、中庭には俺と八代だけが残った。

結局、今日もただ疲れただけの一日だったのかと思うと、蘭子同様、俺も自然と嘆息が出てしまう。

「疲れたのか？」

そんな俺の様子に、八代が珍しくしおらしい顔でそう言った。

「——ああ、疲れたな。　　ったく、何だよこのクソ台本。　　クソの役にも立ちやしねえ」

「アレだけ端折ればこの台本のせいとも言えまい。　　それよりも問題はキャストだな。」

私が母親役だったせいで、学校での絡みが一つも無いではないかった！！」

「……お前が幼馴染役じゃなくて本当に良かったよ」

「そうだ！！　　今から秋葉の家でコレを試すのはどうだ？　　そうだそうしよう」

「しないから！！　　……お前、もうちょい貞操観念とか持てよ。　　親御さんが泣くぞ」

「ふん、私の両親がこんな事で泣くと思うなよ？ 逆に応援してくれるはずだ！！ なんなら今度会うか？」

「泥沼にはまりそうだから遠慮しとく」

一瞬、八代の両親ってどんなだろう？ 何て興味が湧かなかったと言えば嘘になるが。 興味以上に恐ろしいので丁重にお断りする。

「しかし、どうしたもんかな。 どうにも手詰まり感があるぜ。

本当に俺らがラブコメなんてやる必要があんのかよ？

この台本をみる限り、あいつの方がよっぽど真つ当な学生やってるぞ」

「だからチャンスなのだ。 それこそ田原先輩以上のラブコメにならなければ意味など無い」

散々地面に投げつけた台本を横目に見つつ、八代の言葉を聞き流す。

なんと言つか、目的と手段が入れ替わってしまっている様な気がするのだ。 例え俺達が田原以上のラブコメになっても、それは田原の力が消えた事にはならないわけで。

第一、このままずっとこんな調子でいるなんて俺には耐えられそうもない。 もし田原が今まですっとこんな毎日を送ってきたのだとしたら、それは尊敬に値する。

あの優柔不断さも生きていくために身に付けたのでアレば、納得というものだ。

「——そういやコレ、最後はどうなるんだ？」

なんとも無しに目に入っていた台本を取り、一番最後のページを

めくる。

どうせロクな終わり方ではないだろうが、一応自分の物語という設定だけに気になった。

「ふむ、最後は割りと爽やかに締められているぞ。くつつく相手が蘭子なのが気にいらんがな」

既に台本に全て目を通して八代が言うとおり、台本の最後のページには俺と蘭子が真実の愛に目覚め、俺から蘭子に告白するという形で締められている。

何故か『二人の愛よ、永遠に……。』というナレーション付きで。

「……どの顔下げてこんなもん書いてんだあの馬鹿は。でもよ、コレ最後は一人だけを選ぶんだな。

あんだだけ好き勝手とつかえひつかえ相手替えてたのに」

「それがラブコメと言うものだ。恋愛に理屈は必要ないということだな」

何故か腕組みをし、得意気な顔でうんうん肯く八代。俺の頭の中に何かが引つ掛かる。

「告白」「最後の相手は一人」「恋愛に理屈は必要ない」

——ああ、なるほどね。そういう事かよ。

「……おい。答えがわかったぞ」

「ん？ 何のだ？」

「だから、対ラブコメ対策の答えだよ。クソっ、最後の最後にまた面倒臭い事になりそうだぜ」

「ほお、『恋愛不感症の秋葉』 とも呼ばれるお前がか？ どれ、言ってみろ」

「そんな二つ名は無え！！ いいか？ 要は田原の恋愛パワーを一つに絞っちまえばいいんだよ。」

それこそ、この台本みてえに告白なりなんなりして、その相手と永遠の愛とか言うのを誓えば、少なくともお前に向かう力は無くなるんじゃないか？」

「なるほど……。一理あるな。恋愛経験値が限りなく無いに等しい秋葉が思いついたとは思えん」

「うるせえよ。 貶しながら褒めんな」

ただしこの答えには色々問題もある。まず田原が心に決めた奴がいるかどうか。そして、よしんば居たとしても、その相手が八代の様に田原を毛嫌いしていた場合だ。

告白に失敗した場合も一体どうなるのか見当もつかない。 答えを見つけても問題だらけだ。

「ああクソっ！！ 恋愛ってマジでめんどくせえな」

「フハハハ！ 秋葉がそのセリフを言うとか可笑えるな。そして貴様が恋愛を語るなあああー！！」

「笑いながら怒るとかどんだけ器用なんだお前!？」

何とかこの件にも光が見え始め、俺は油断していたのかもしれない。

いや、かもしれないでは無く、していた。それはもう色んな意味で油断していた。

02

学校から帰宅し、制服を着替えれば、時間はもう午後七時を回っていた。

最近学校にいる時間がやたら長くなったような気がする。でもそれは、面倒くさくはあるものの、決して嫌ではないのだろう。

何より今回の田原の件に関して、八代が動けない事を指し引いたとしても、割と俺は自分から動いている気がするのだ。

これが例え慣れだとしても、今の俺はそんなに悪い気分では無いから驚きである。きっと洗脳とはこういう事を言うのかもしれない。

なんてダラダラ考えながら、簡単に夜食を済ませ、ついでに部屋の掃除でもするかと食器を片づけながら思いつく。

狭いながらも一応はこまめに掃除をしているせい、2DKの我が家は男家族が暮らす部屋のわりに、物が少ないのも手伝って綺麗に整理整頓されている。

それでも、オヤジが帰宅した晩には嵐が去った後の様な惨状になるわけだが。

オヤジか……。そっぴや今日、八代の親の話が出たな。いつたいどんな親からあんな子供が育つんだ？ 思い出したら何だか笑

えてきた。

自分だけしか居ない静かな部屋を見渡し、少しだけ寂しさみたいなものを感じたが、ガラじゃないのでシャワーでも浴びて忘れる事にする。

濡れた髪も適当に乾かし、八畳間の自室に入れば後は寝るだけだ。電気を消し、安物のパイプベッドに敷かれた布団に潜り込む。

睡魔など必要ない。のび太も真っ青な睡眠導入を見せてやるぜ！！

誰にともなくそう息まき、俺は穏やかな眠りの世界へと旅立つ。

「——おい。起きろあつくん」

半睡半起とでも言うのだろうか。ちょうど寝入りかけたその時、聞こえるはずもない声が俺の耳に入る。

「……そうか。あつくんはお寝坊さんだものなあ。これはママが起こしてやらねばなるまいなあ。

フフフ……仕方のない奴め」

声は段々と俺に近付き、ギシリとパイプベッドが軋む音と共に布団の上に移動する。

苦しくない程度の重さが俺の腹部を圧迫し、俺の意識は完全に覚醒した。

「おはようあつくん。夜だぞ」

「当たり前だ」

部屋の明かりは消えているものの、暗闇に慣れた俺の目は確実に

八代の姿を捕える。

制服にエプロンという、一部の大きいお友達に喜ばれそうな姿をした八代は、俺の上に馬乗りになっていた。

「何だ？ 何が目的だ？ とうかどうやって入った？ あと俺をあつくんと呼ぶな」

「ここはお前の部屋で、私の目的は夜這いだ。鍵はこの前、電気メーターの裏に有るのを見つけたからそれで入った」

——うかつだった！！ まさか見られていたとは！！
しかし、今はそれを悔いても仕方ない。今はこの状況を打開することに心血を注ぐべきである。

「……よし。まずは話合おう。馬鹿な事は考えるな。いいか？ もっと自分を大切にするんだ。簡単に女が夜這いとかしたら駄目なんだ」

あり得ない状況と寝起きのせいか、自分が何を言ってるかもあまり考えないまま思った事を口にする。効果は望み薄だ。

「お前がいけないのだ秋葉。私の出番が無いのを良い事に、学校ではアビ子と蘭子とイチヤイチヤイチヤイチヤ。

フフフ、まったく。お前の放置プレイには、いくらMの私でも驚かされたぞ。

私を除け者にしてイチヤつくのはさぞ楽しかっただろう？ このドSめっ！！」

「ほとんど言いがかりじゃねえか！！ その責任は俺じゃなくて全

部大輔にあるんじゃないのか!？」

「うるさいっ!! いいからさっさと私の太もを舐める!!」

「舐めるか!!」

その会話を皮切りに、俺は上に跨る八代を押しつけ、なんとか布団から出よう試みる。

しかし、相手は最近やたらとパワーアップした八代だ。

力では俺に敵わないものの、磨きのかかったスピードでスルリと俺の腕を避け、逆に抑えつけてくる。

「フハハハ!! 諦める秋葉!! さあ、存分にママに甘えるがいい!!」

「ふざける!! どけこの変態っ!!」

もう滅茶苦茶だ。布団の上でもつれあい、何とか八代をねじ伏せようと俺は力まかせに八代の腕を掴む。

そのまま自分の方に引き寄せ、くるりと体勢を入れ替えれば、俺が八代を押さえ付ける形でマウントポジションが完成した。

「ハッ! 勝負あつたな!!」

八代の上に跨り、勝ち誇る俺。しかし、その時俺はもう一人の視線に気づいていなかった。

この部屋には、もう一人居るはずの無い人物がいたのだ。

「……ただいま秋葉。——うん。ちょっとここに正座しろこのバカタレが」

「オ……オヤジ？」

我が家の大黒柱。 諏訪 団十郎は静かながらも、とてつもない
威圧感を持ってそう言った。

人から頭ごなしに「反省しろ」と怒鳴りつけられる程ストレスの溜まるものはない。

それが理不尽な理由ならなおさらだろう。

ただ、その方が何万倍もましだと思わされる出来ごとがあるのをご存じだろうか？

こちらの弁解も一切通じないまま、ひたすらの謝罪と有無を言わずぬ勘違いをコンボで叩き込まれた場合、人は無力だ。少なくとも今の俺はそうなのだ。

「すまん！！ 全て俺が悪いっ！！」

深夜の自室。 言われるがまま床に正座した俺と八代に、オヤジは見事な土下座をかます。

ゲンコツの一発でも覚悟していた俺だったが、予想の斜め上をいくオヤジの土下座に、俺の思考がショートしたのは言うまでもないだろう。

「頭をお上げ下さいお義父様。^{おやじ} 悪いのは私達なのです」

頑なに頭を下げたままのオヤジに、八代がそう語りかける。 今さらつと俺まで悪いと言われた気がしたが、頭がこの展開に付いていけない。

「違うんだお嬢ちゃん。俺あ父親失格だ。 男手一つで育てて来

た秋葉が、まさかこんなに母親への愛情に飢えたマザコン野郎に成り果ててたなんて気付きもしなかった。

悪いのはこの俺なんだ！！　チキシヨウ、不甲斐ねえぜ！！」

「良いのですお義父様。　秋葉がそれを望むのなら、私は裸エプロンでさえ喜んでこなして見せます。　いえ、それはむしろ望むところなのです！！」

「——っ！？　あんた、そこまでうちの息子の為に！？」

八代とオヤジの間に、急速に俺の望まない何かが形成されつつあった。　駄目だ！！　これでは八代の思うツボだ！！

「——おい、お前ら。　ちよつと表に出ろ」

こうなつたらもう、俺にはこの手段しか残されていない。　オヤジは俺の顔を見た途端、無言で立ち上がり、そのままアパートの外に出ていく。

その様子に、八代も只事ではない雰囲気を感じたのだろう、「いきなりどうしたのだ秋葉？」　と不安な声音で聞いてきた。

「我が家のルール。　男は拳で語れだ」

俺はそれだけ言い、オヤジの後を追った。

「お前とコレをやんのは久しぶりだな秋葉。　——まったく、親は居ずとも子は育つとは良く言つたもんよ」

アパート前の道路。　オヤジは軽くストレッチで身体を慣らしながら、どこか楽しそうにそんな事を言う。

月と街灯だけの明かりの中、その姿はまさに、俺にとっての脅威と共に、超えるべき壁として立ち塞がっている。
願わくば、こんな間抜けな形ではなく、ちゃんと超えたかった。

「いいか！ 俺と八代は何でもない。さっきのアレもただの誤解だ！！」

あと俺はマザコンじゃねえ！！」

こちらの『条件』を俺が提示する。 我が家のルール。 白黒付ける時は一対一のタイマン勝負。
負けた方は勝った方の言う事を全て飲む。 もはやコレでしか、この頭でつかちのオヤジに俺の言い分を聞かせる術は無い。

「……何でもないだと？ 年頃の娘さんに母親プレイを強要しておきながらよくもぬけぬけと。

秋葉よ、お前がそんな子に育ったのも全ては俺の責任だ！！ この父が、お前の腐った性根を叩き直してやる」

「だからソレが誤解だっつってんだよクソオヤジ。 ——前みたい
に俺が一方的にやられると思ってんじゃねえぞ？」

ちなみに、最後にオヤジとコレをやったのは俺が中学二年の時だった。

その時は手も足も出ず、一週間は身動きがとれない程コテンパンにのされたわけだが、今日ばかりはそんなわけにはいかない。

このオヤジのアホさ加減を考えれば、いつ「責任をとって八代を嫁にしろ」 とも言いかねないからだ。

こんな勘違いで嫁なんか貰ってたまるか！！

俺は身体をほぐす様に首をコキりと鳴らし、数週間ぶりに会うオ

ヤジと相対する。

余裕さえ見てとれるオヤジの体躯は、その実際の身長以上に大きく分厚く感じた。

上等だ。 どうせ、いつかは倒さすと決めた相手なのだ。 なら今、この時にあんたを超えてやる。

「いくぞコラアアアア!!」

「こいや馬鹿息子っ!!」

夜のアパート前に、近所迷惑な親子の怒声が重なる。

お互いが一気に駆け寄り、一瞬で詰まる間合いのままに額と額をぶつけ合う。

ガツンと音が脳髄に響き、頭突きと呼ぶには生ぬるい衝撃に、首から上が吹き飛びそうになるのを必死に堪えた。

歯を喰いしぼり、のけ反りながらも間髪入れずに右腕を振りぬく。しかし、大ぶりのテレフォンパンチはそのまま空を切り、勢いを殺せず上体が泳いでしまった。

——やべえ!!

そう思った次の瞬間、俺の首に、オヤジの太い二の腕が突き刺さる。

スピードの乗ったラリアットは容赦なく俺の首を刈り、意識ごとどこかに吹き飛ばされそうになる。

「ぐあっ!! ——んの野郎っ!!」

ほとんど無意識のまま、オヤジの腕を掴み、巻き込む様に一本背負いで投げ飛ばし、オヤジを硬いアスファルトに叩き突ける。

そのまま追撃に出ようとするが、リアットのダメージで呼吸が止まってしまい動けない。

「——なかなかやる様になったじゃねえか」

オヤジは投げ飛ばされたダメージを感じさせない動きで立ちあがり、ゆっくりと体勢を立て直す。

クソッ！！やっぱ強えなこのクソオヤジ。

「しかし！！いくら女を知ったからと言って、この偉大なる父に勝てると思うなよ秋葉あ！！」

「ふざけんな！！俺はまだ童貞だああああ！！」

再び互いに距離を詰め、今度こそオヤジの顔を俺の拳が捕えるが、それはオヤジも同じで、むしろ避けずに当たりにきたと言った方が正しいのだろう。

——クロスカウンター。

互いの腕が交差し、防御無視の殴り合い。オヤジの拳は大きく、硬かった。

02

「——それで、結局どっちが勝ったの？」

「……言いたくない」

俺の渋る答えに、アビ子は察してくれたらしく、それ以上は何も

聞いてこない。

まったく昨日は散々な一日だった。

結局、オヤジとの殴り合いは深夜中続き、俺が寝たのはお日様が昇りだすギリギリの時間だったのである。

それでも、これからまた仕事だと言い、一晩中俺と殴りあったまま出かけていったオヤジは流石といった所だろう。

ちなみに、八代は途中で飽きたのか居なくなり、部屋に戻って俺のベッドで寝ていやすがった。

「でも、お父さんは何でいきなり帰ってきたのかね？」

「ああ、なんか知り合いの人から電話が有ったらしくてな。ちゃんと息子の面倒みる！！　って怒られたんだとよ。　面倒見にきて殴りあつてりや世話ねえけどな」

そうなのだ。　オヤジがいきなり帰ってきた原因は遥さんだったのである。

この前の八代と一緒に店に言った姿が余程異常に見えたらしく（　実際、異常だったから弁解の余地もないが）、

遥さんはそのままオヤジに電話をし、「アンタがちゃんと面倒を見ないから秋葉がおかしくなった！！　こうなったら私が秋葉を引き取る！！」と、もの凄い剣幕だったらしい。

オヤジもオヤジで、遥さんを少し苦手にしており、仕事の合間を無理に縫って、昨日は帰宅してきたというわけだ。

ただ、昨日の殴り合いのおかげか、オヤジは「どうやら、遥の誤解だったみたいだな」と納得はしていた様なので、俺が遥さんの家に厄介になる事はないだろう。

遥さんも、そう思ってくれるのは有り難いのだが、俺は今の生活を気に入っているし、そんな心配しなくてもいいだろうに。

例えば血は繋がっていなくとも、俺はオヤジを尊敬はしているのだ。

「——ふうん。まあいいや、それで諏訪くん。アタシにお願い
つてのは何だい？
諏訪くんがアタシを頼るなんて珍しいじゃん」

三限目の休み時間。机に座るアビ子が、悪戯っぽく笑う。

「いや、例の田原の件でな。どうにも俺はそういう話題は苦手だ
から、お前に頼もうと思ったんだ。
ぶっちゃけ言えば、田原に好きな女がいるのか調べて欲しい」

「随分あっさり言うね。……ん、簡単そうで難しいなあ。

それに、アタシまでその田原先輩の恋愛パワーに取り込まれたらど
う責任とってくれるのさ？」

「お前が？ まあ、そりやそうだな。お前だって女なんだし、そ
の可能性もあるのか。

——悪い、やっぱ忘れてくれ。軽率だった」

そう言う俺を、観察する様な目でジッと見るアビ子。何だ？
俺のこんなボコボコの顔なんて見慣れてるだろうが。

「——仕方ない。ここはアタシにまかせときなあ。ただし、そ
う貸しだぜ？」

シワ枯れた声を出し、アビ子は机からヒョイと降りる。

「はあ？ 結局引き受けんのかよ？」

「大丈夫だあゝ。 アタシも八代ちゃんと一緒に、軟弱な野郎なんて興味ないさね。 いざとなったら舌を噛み切って自決してやるぜい！」

自決で。 ニツコリ笑い、カコブを作る様に自分の腕を曲げながらアビ子はそのまま自分の席に戻っていく。

仕事の報酬は今度メシでも奢ってやろうとか考えながら、俺もそのまま自分の席に戻った。

進展があつたのはその日の放課後。

いや、これを進展とよべるのかどうかは怪しい所ではあるのだが、事態が急変したのは間違いない。

結論から先に言えば、田原が行方不明になったのだ。

「まったく、何だつてこう厄介事が次々ときやがるんだ。冗談じゃねえぜ」

「私としては、そんなお前が堪らなく羨ましいんだがな。だが、今回は少しばかり面白くない。

私のストレスもそろそろ臨界点だぞ。それと言つのも昨日、お前が私をちゃんとかわまなかつたせいだ」

「俺の言う厄介事の半分以上はお前のせいだと断言してやるよ」

「そう褒めるな。濡れてしまつたろ？」

「お前の怖いもの無しな発言には今後一切をスルーさせてもらつ。いいか？ 俺は絶対にツツコミを入れないからな！？」

「濡れるに対して、ツツコミな訳か。このエロスめ！」

「……さつさと校門までいくぞ」

アビ子の報告を待つために、教室で八代と待機していた俺の携帯に電話がかかってきたのが午後四時くらい。

発信者はもちろんアビ子だったのだが、その第一声の「ちよっち不味い事になったよ諏訪くん」と言う言葉に、俺お馴染みの嫌な予感が首をもたげる。

待ち合わせを校門前に指定し、急いで向かうと、そこにはアビ子と一緒に、いつか見た自称田原の妹であるマツリの姿があった。

「一体何があつた？ 何でその小さいのまで居るんだ？」

着いて早々、俺がそう言つと、マツリはその場に泣き崩れ、アビ子は神妙な顔のまま「田原先輩が行方不明なんだよ」と返してくる。

「は？ なんだよそりゃ？」

「アタシもさつき聞いたんだけどね、どうも田原先輩、昨日から学校を休んでるみたいなの。」

それで、先輩と親しい人を探して話を聞こうと思ったら、この子が先輩が行方不明になったって」

アビ子はそう言いながら地面に泣き崩れるマツリを見る。

必死に声を堪えて泣くマツリを見て、ただの勘違いともいえない様だ。

「ともかく、詳しく話を聞かせる。もし本当に行方不明などという事なら、それこそ警察に連絡せねばまずかるう？」

八代が冷静に、説き伏せる様にマツリに話かける。

「その前に場所を移すぞ。　こう人目があつちや冷静もクソもねえ」

俺がそう提案し、アビ子と八代がマツリに寄り添う形で校門から離れる。

向かう先は、いつか八代と一緒に田原を待ち伏せした住宅街。　こ
うなったら直接田原の家に行って確かめるしかない。

02

道すがら、だいぶ泣きやんだマツリから詳しく話を聞いてみる。
マツリは今にも崩れそうな涙を瞳に湛え、ぐずりながらもポツポツ
と事の経緯を話し出した。

泣き声で聞き取り辛くはあったが、マツリの話 요약すれば、田
原とは一昨日の晩から連絡が取れなくなり、そのまま音信不通なの
だと。

田原の両親は海外出張中の為、今現在、田原は一人暮らしらしい。
そして今日の朝、マツリの携帯に田原から「心配しないで」と一通
だけメールが来て、それっきりまた連絡が無いという話だった。

「フラグ立ちまくりだな」

話を聞いていた八代が、呆れ気味にそう呟く。

「フラグって何のフラグだよ？」

「——死亡エンドに決まってるだろう。　いいか、田原先輩はハ―

レム主人公なのだ。

今の条件をあて嵌めれば、答えはほとんど出ている。これは本当に危険かもしれんぞ」

八代のその言葉を聞いたマツリの瞳から、ボロボロと大粒の涙が溢れた。

コイツはもう少しばかりした言い方は出来ないのだろうか。

まあ、今は誤魔化しても仕方なくはあるだろうが。

「安心しろ。少なくとも、まだ田原先輩の力は消えていない。最悪、行方不明が真実だとしても、死んでいるという事は無いだろう」

慰めたつもりなのか、八代はマツリを見ないままそう言った。

——そうこうしている内に、俺達の目的地である田原の家へと到着する。

小綺麗な二階建の一軒家には田原と掘られた石表札が掛っているが、部屋の明かりはどこもついていない。

この一軒家は無人なのだと、その静けさが物言わぬまでも語っている様だった。

何回か玄関のインターホンを押してみるものの、予想通り反応は無い。

そのまま裏に周り、リビングを覗く庭まで行くが、やはり人の気配は無く、電気の消えたあまり生活感のない部屋がカーテン越しに伺えるだけだった。

「……いよいよヤベエな」

俺がそう呟くと同時に、目の前のガラス戸が高質な音と共に激しく砕け散る。

砕け散ったガラスの中には握り拳大の石が転がり、隣を見れば、派手に砕け散ったガラス戸の穴に手を入れて鍵を開ける八代が居た。

「何をボサつとしている。今は緊急事態だぞ。こんなもの後で弁償すれば問題なかるう」

そう言い、ガラス戸を開け、土足のままズカズカとリビングに上がり込む八代。確かにその通りではあるのだが、普通もう少し躊躇を見せるものではないだろうか？

他所様の家のガラスを割るのに、ここまで平然とやってのけるコイツは、やはりどこかおかしい。多分俺の家に不法侵入する時もこんな感じで、当たり前のような顔をしていやがるに違いない。

そんな事を考えつつ、八代に続く様に、俺達も飛び散ったガラスをジャリジャリ踏みつけながら田原邸へと入る。

とりあえず全員で手分けし家中を探すが、やはり田原の姿はどこにもなく、嫌な予感は益々強くなっていく。

一通り家中を見回し、日も落ちて薄暗くなったりリビングに戻ってみると、インテリア雑誌にでも載ってそうな大きな目のリビングソファに座るマツリが居た。

マツリは今にも不安に押しつぶされそうな程に、その小柄な身体を屈め、膝に顔を埋めている。

実際に家の中に入り、本当に田原がいないという現実を突き付けられたショックは相当大きいのだろう。

見ているこっちが気の毒になるほど、顔は真っ青になり、さっきまで涙で赤く腫らしていた瞳は、今は何も映さない虚ろな色をしてい

る。

「……やっぱ、ショックだよな？」

何か声をかけなければまずい様な気になり、そんな当たり前の事を口にしてしまう。

こんな時、自分の口下手が恨めしい。

「……お兄ちゃんは、何で居なくなっちゃったのかな。 マツリの事、嫌いになつたのかな？」

聞きとるのがやっとの声で、マツリはそう呟いた。

「アイツが誰かを嫌いになるなんて、あんま想像出来ないけどな。 いや、俺は別にそこまで親しい訳でもねえけどよ。 それでも、そういう奴ってのは何となく分かるぜ」

そうなのだ。 田原はきつと、他人を嫌ったり、ましてや憎んだりなんてしない奴なのだろう。

そういう行き過ぎた博愛精神染みた性格こそが田原だ。

——だから、そんな田原だからこそ、俺はアイツが苦手なのだ。

「諏訪先輩って、噂ほど悪い感じじゃないんだね」

「そうでもねえさ。 少なくとも良い奴ではないしな」

軽口を叩く様な俺の言葉に、マツリの表情が少しだけ和らぐ。

もし、田原の事を好きな奴がこの事を知れば、全員が今のこのマツリの様になるのだろうか？

それとも、田原の力が無くなり、何でもなかったかの様に普通の生

活に戻っていくのか？

どっちにしろ胸糞悪いことには変わらない。

「やっぱ居ないねえ、田原先輩。　こりゃ本当に警察の出番かな」

探索を終えたアビ子がそんな事を言いながら、リビングに入ってくる。

「――そうとは限らんど。　私はだいぶ犯人の目星がついてきた」

その後ろから、二階へと続く階段から降りてきた八代が、名探偵のごとく登場する。

「犯人の目星つて、田原は行方不明じゃなかったのかよ？」

「違うな。　そもそも、あのヘタレで優柔不断な男がいきなり行方をくまます事じたい考えられん事なのだ。

くわえて、さっき先輩の部屋を確認してきたが、学校の制服と鞆がなかった。　玄関には通学用のローファーも無い。

ここから考えれば、先輩は一昨日からこの家に帰ってきてないことになる。　つまり、一昨日の帰宅途中に先輩はどこに行方をくまました事になるわけだ」

八代はそう解説しながら、右手に持った二枚のチケットをヒラヒラと俺達に見せる。

「これは先輩の自室の机に入っていた映画のチケットだ。　誰を誘うつもりだったかは知らんが、日付は今週の日曜になっている。

今日は金曜だから、明後日の上映だな。　そんなチケットを取る人間が自主的に姿を消すとはますます考えられん。

つまり先輩は、一昨日の帰宅途中に誰かに攫われた可能性が高い。
——それも、その小さいのと田原先輩の関係を知る誰かにだ」

そう言われ、俺達の視線がソファに座るマツリへと集まる。

しかし、マツリは、八代の右手に握られたチケットを凝視しながら、小さく「……嘘」 と呟くだけだった。

「ねえ八代ちゃん、何で犯人は、この子と田原先輩の関係を知らずして思っただい？」

アビ子が首をひねり、そう八代に問いかける。

「うむ。それはな、今日の朝、その小さいのに送られて来たというメールだ。」

もし田原先輩が、誰かに攫われたという話が学校に広まれば、それこそ大騒ぎになる。だから学校には風邪だとても適当に連絡しているだけだろう。

しかし、犯人はその事実が一番早く気付くのがソイツだと知っていた。だから、ソイツだけにはメールを送ったのだ。騒ぎにならん様にな」

「……えらいお粗末な対応だな。んなもん時間が経てば誰だって怪しむだろ？」

「その通りだ。だから、探すなら早い方がよい。これはかなり突発的な誘拐で、そして犯人はかなりイカれてる」

八代のその言葉に、俺の脳裏にあの日の委員長の冷たい言葉と、無機質な瞳がフラッシュバックする。

「もし田原君に何かあったら、あなたを殺すから」

——もうお前以外に考えられねえよ委員長。

v sハーレム主人公（10）

01

鹿島 梅^{かしま うめ}。それがあの委員長の名前らしい。

田原ハーレムの最古参にして、真面目キャラ担当。 なんでも率なくこなし、周囲の信頼も厚い。

……と、ここまですがマツリから聞き出せた委員長の情報だ。

俺が今、一番欲しかった委員長の住所はおるか、連絡先すら知らない所を見ると、別にハーレムの女同志では仲が良いというわけではないらしい。

とにかく、事は一刻を争うと思った俺は、アビ子とマツリを田原の家に待機させ、日も暮れた住宅街へ当てもなく探索に出る。

委員長の名前を頼りに、立ち並ぶ家々の表札をチェックしていくが、なかなかどうして見つからない。

通学路が同じ道なのを考えれば、この辺りに住んでも不思議じゃないと踏んだが、それは早計だったのかも知れない。

——よしんば住んでいたとしても、それを見つけ出すのにいったい何世帯をチェックしなければいけないのか。

「クソがつ!!」　なんで俺が田原のために、こんな夜の住宅街をマラソンしなきゃなんなんだ!!」

愚痴りながらも、走りながら目は表札を律儀にチェックしていく。ひよっとしたら俺って本当はスゲーいい奴なのではないだろうか？

「秋葉よ。何でも自分で解決しようとするのはお前の悪い癖だ」

俺と並走する八代が、相変わらず息も乱さないまま、そう窘めてくる。

「別に俺が解決しよう何て思っちゃいねえがよ。他に良い手がないんだから仕方ねえだろが」

「ふん。相変わらず視野の狭い男だ。忘れたか？ 私にはまだ田原先輩の力が働いている事を」

「……そついやそんな話もあつたな。最近まったくそんな素振り見せねえからすっかり忘れてたわ」

「お前が私を力強く抱きしめ、この私の豊満な胸に顔をグリグリと擦りつけながら「助けて八代ちゃん」とお願いすれば、たちまち道は開けるだろう」

「そんな虐められたのび太みたいな真似できるか！！———そこでどうすんだよ？

だいたい、その力って俺とお前が近付けなくなる力じゃなかったか？」

「それは半分正解だ。田原先輩の力は、田原先輩以外の男との出会いを極端に下げる半面、逆に田原先輩と出会う確立が跳ね上がる力。

言ってみれば、美少女限定ブラックホールの様なものなのだ」

「それじゃ何か？ その力を利用すりゃ、田原の居場所が分かるの

か？」

「——まあ見ている。もうじき来るぞ」

八代はそう言うと、足を止め、何かを感じ取る様に目を伏せる。しばらく待ち、俺も黙ったままその様子を見ていると、どこからかエンジン音が耳に入ってきた。

その音は低く唸りながらも、まるで俺達を狙っているかの様な速さでこちらに近づいてくる。

「来たぞ！ 飛べっ！！」

八代が掛け声と共に俺に突進し、そのままつれながら歩道に倒れ込む。

その瞬間、道路を挟んだ民家の生垣から白いスクーターが飛び出し、さっきまで八代の居た場所に突っ込んできたのだ。

スクーターはコンクリートブロックに激突し、もの凄い音と共に大破。運転手はとつさに離脱したのか、道路に倒れている。

——何だこれは。何故いきなり民家の生垣からスクーターが飛び出すんだ。

「——クソっ！！ おい、大丈夫か！？」

起き上がり、道路に倒れる運転手を助け起こす。運転手はヘルメットを脱ぎつつ、「へへ……、ドジっちまったぜ」と無駄に格好付けながら額から血を流していた。

うわあ。うぜえ。

「すまん少年。ちよいと配達で近道したらこのザマよ。……
まったく、この俺とした事が」

民家をスクーターで突っ切る事を近道と呼ぶには大胆すぎる気がする。

運転手はヨロヨロと立ち上がると、大破したスクーターに近付き、後部座席に取り付けられたボックスから何かゴソゴソと取り出した。

「ヒュー、どうやらブツは無事らしいな。不幸中の幸いってやつか」

正方形の薄い箱を取り出すと、運転手はソレを俺に差し出してくる。訳もわからずソレを受け取ると、厚紙ごしにジンワリとした温かさが俺の手に伝わった。

チーズの香ばしい匂いが俺の鼻腔を刺激するソレは、表面に『ダンドイピザ』と印刷されている。

「すまんが、代わりに届けてくれ。どうやら俺はここまでのようだ」

運転者はそう言つと、どっかりとその場に腰を降ろし、胸ポケットから煙草を取り出し一服しだした。職務放棄も甚だしい。

「いやいやいや、意味わかんねえから。何だよコレ、どんな展開だよ!？」

「かまわん。秋葉、それを届けるぞ。その場所に必ず田原が居るはずだ」

「……マジかよ?」

八代は運転手から住所の書かれたメモを受け取り、さっさと歩い

ていく。

「サックス少年少女達！」

運転手の声を背中に受け、代金とかどうすんだコレ？　と意味不明な心配をしながら、俺も八代の後を追った。

02

「お前って、もしかして最近あんな目にばっか遭ってたのか？」

「あんなものはまだ軽い方だ。一度、集団でジョギングする力士の群れに巻き込まれた時は圧死しそうになったぞ」

「……ああ、そうなんだ」

今回がそれじゃなくて本当に良かったなんて変に安心してしまっ
いったい何時から世界はこんなに狂ってしまったのか。
せめて俺だけは染まらない様にしようと、密かに心に誓った。

八代の受け取ったメモに書かれていた住所を見れば、見覚えのないマンシヨンの名前と部屋番号が書かれていた。
その下には「佐藤様」と、注文主であろう名前もある。ちなみに、その佐藤様に届けられるはずだったピザは、今は俺の手から離れ、俺と八代の胃袋の中に収まっている。

「どうせ届かなかったモノだ」と、勝手に開けて食っちゃったわけだが。

それについては、あの運転手がその後どうなるか何て考えもしたの

だ。

しかし、良く考えればあの運転手にも相当問題がある。そもそも俺のしったこっちゃねえ。

という訳で、マンションまでの道すがら、小腹を空かしていた俺達は、佐藤さんに感謝しつつおいしくいただいた訳だ。

「……ここだな」

五階建てはありそうな洒落たマンションを見る八代が、メモに書かれた名前と、玄関前に立つ看板に書かれたマンション名を確認する。

レンガタイルであしらわれた外装と、オートロックであろうエントランスから漏れる明かり。俺ん家のアパートとはえらい違いだ。ガラスの自動ドアの前まで行くと、その横壁には郵便受けが並んでいた。

スチール製の郵便受けには、一つ一つネームプレートが付いてあり、その下には部屋番号が記されている。

上段の端から確認していくと、佐藤のネームプレートが貼られた郵便受けの横に鹿島の名前を見つけた。

——本当にありやがった。

「ビンゴだ。部屋番号からすると三階の様だな」

「見つけたのは良いけどよ、どうやって中に入るんだ？ さすがにこのドアをぶち破るのは勘弁しろよ？」

「ふん。当たり前だ。それに、そんな事をせずとも、向こうから入れてくれるさ。」

なんせ向こうは絶賛人攫い中の犯罪者だぞ？ こちらがちょっと脅せばいいだけだ」

八代は言いながら、カードリーダーの横に設置されたインターホーンに部屋番号を入力し、呼び鈴を押した。少し間が空き、聞き覚えのある声が機械的なノイズと共にスピーカーから響く。

「——はい、どちら様でしょうか？」

「そこに田原先輩がいるだろう？ さつさと中に入れろ、通報するぞ」

直球すぎる八代の脅しに、スピーカーの声の主はしばらく沈黙した。

そして、「いいわ」と言う一言と共に、自動ドアが静かなモーター音を鳴らしながら開く。

「……お前、もうちょい言い方とかあんだろ」

「何がだ？ 相手はクルクルパー状態なのだ、このくらいシンプルな方がよい。そもそもそんな相手に気を使っても仕方あるまい」

それもそうかなんて思ってしまう。

なんせ人一人を攫ってしまう程なのだ。 まともな精神状態も無いだろう。

エントランスの中にあるエレベーターに乗り込み、三階のボタンを押す。

いよいよ目的地までもうすぐという所で、八代が真剣な顔で俺に向き直った。

「——気を付けろよ秋葉？　相手は何をしてくるか分からない、用心に用心を重ねろ」

「まあな、でも女が相手つてのがどうにもやり辛いぜ。　思いつきり殴るわけにもいかなえしな」

「そういう優しさは嫌いではないが、今はその甘さを捨てる。出来るなら、相手を人間と思わない方が良い。　そうすれば、躊躇する事なく敵を殲滅できる」

「どこの軍人だよお前は。　——なんて思っていた俺なのだが、すぐにその認識が甘かった事を思い知る。」

それは、俺が委員長の部屋のドアを開けた瞬間、下着姿の委員長が包丁をかまえて突進してくる姿を目にした後だった。

vsハーレム主人公（11）

01

エレベーターを降りると、等間隔に洒落たデザインの玄関戸が並ぶ通路を進み、三。六と部屋番号が室外灯で照らされている扉の前にたつ。

この扉の向こうに、委員長と田原が居るはずだ。

「……鍵は、かかってねえな」

恐る恐るドアノブに手をかけ、ゆつくりと手前に引くと、玄関からリビングまで続く薄暗い通路を隙間から確認できた。

「何というか……えらい雰囲気あるな。冷気が立ち込めてるつつか、普通に怖えよ。本当にあいつらこの中に居るのか？」

季節から、今の時間帯は室内でも軽く寒いくらいなのだが、この扉の向こうはそれとは異質の寒さがある。

どんなに服を着こんで様が関係無い寒さ。いや、冷たさと言った方がいいだろうか。人が作りだす雰囲気というのはこうも恐ろしいものだろうか。

「返事はあったのだからこの部屋に居るのは間違いあるまい。何をそんなにビビっている。

いいからさっさと入れ！ その股間にぶら下がるキンタマは飾りか！？ まったく、いつもはこれ見よがし「俺の男らしさを見ろ」と自慢するくせに」

「してねえよ！！勝手に俺を露出狂みたいなキャラにすんな。てかキンタマとか言うの止めてくんない。普通にこっちが恥ずかしいからよ」

八代に急かされつつ、玄関戸を開け放つ。防犯チェーンすら掛けられていない。俺達を誘っているのか、それともただ掛け忘れただけなのか。

今は後者であって欲しい。

「見る。男物のローファーだ。やはり田原先輩はこの中に――。」

八代が玄関に並ぶ靴を確認し、そう言ったと同時だった。

通路の奥、リビングのドアから横に折れる通路。その死角から闇闇に紛れる様にソイツは飛び出してきた。

明かりの無い通路でもハッキリと分かる青白い肌。細身だが、しなやかな丸みを帯びた四肢を晒しながら、けれどその目は瞬きを忘れたかの様に見開かれている。

「ああああああ――！！」

正気を失っている顔だった。朝の登校、三年A組の教室、そのどれとも違う表情。――委員長。鹿島 梅は完全に狂っていた。

一直線に、最短距離で、委員長が狂気と殺意の塊と化して俺に突進してくる。

十分に警戒はしていた。だが、その両手に握りしめられた鈍く光る刃物が視界に入り、俺の身体を硬直させる。

——全てがスローモーションの様に、ゆつくりと、背筋を走る悪寒さえも感じないほどのコマ送りの世界だ。

やばい。完全に刺される。どう防いでもアウトだ。

「秋葉あああ——！！」

一瞬だった。横に立つ八代が、俺を両手で押しのけ、委員長を身体ごと受け止める様に前に出てくる。

——何やってんだこの馬鹿！！それじゃあ、お前が刺されるだろうが！！

そう頭で考えるも、身体は押しのけられるまま、言う事を聞かない。

ドンっという肉のぶつかる音と共に、衝撃で八代が玄関の外に倒れこんでいく。

「八代っ！？——クソつたれがあああ！！何してんだこの馬鹿鹿野郎が！！」

途端に思考が赤く染まり、身体の硬直が嘘の様に解ける。

考えるより先に、八代を突き飛ばした直後の委員長の脇腹に手加減抜きの蹴りをブチ込んだ。

「ゲボオツ——！！」

胃液を吐き出し昏倒する委員長をそのままに、俺は八代のもとに駆け寄る。

「——八代！！大丈夫か！？」

ぐったりと倒れる八代の制服の腹部に、凶器と化した文化包丁が痛々しく突き立つのを目にした瞬間、背筋に冷たい汗が伝う。

クソっ！！完全に油断していた。どうする！？まずは救急車か！？警察か！？

「――あ、秋葉」

「ちょっと待て、こういう時はあんまり喋らねえ方がいいんだ。今すぐに救急車を呼ぶからな！！」

「……いいんだ。私はもう……助からない。最後に、私の願いを聞いてくれないか？」

最後の力を振り絞る様に、八代は俺を見つめてくる。俺は八代の手を握り締め、涙が溢れそうになるのを必死に堪えた。

「最後つてなんだよ！？いいから、願いなんていくらでも聞くからっ！！だから諦めんなよ teme ー！！」

「――本当、だな？」

「ああ！だから死ぬな！！死ぬんじゃねえ！！」

「よっしゃああああ！！言質取ったあああ――！！」

八代が雄たけびをあげ、拳を突き上げながら飛び上がる。

「――え？」

「さあて。 何をして貰うかなあ。 なんせ何でも言う事を聞く奴隷の誕生だ。 フハハ！ 夢が広がリングとはこの事だ！！」

包丁を腹に突き立てたままの八代が、興奮気味に下卑た笑顔で俺を見てくる。

「……は？」

「フハハ！ そのマヌケ顔、なかなか良いぞ。 写真撮ってもいいか？」

「いやいやいや。 ちよつと待って。 違うじゃん。 あんた包丁刺さってんじゃない。 なに飛び跳ねてんだよ」

「ああ、これか？ こんなもので、この私が死ぬわけなからう」

八代はそう言いながら、無造作に腹から包丁を抜き取りながら投げ捨てた。

金属質な音をたて、コンクリートの通路に落ちる包丁は、よく見れば血の一滴すら付いていない。

「何だこりゃ！？ まさかお前、ここにきて実は人間じゃなかったとか言い出すつもりなのか！？」

あまりにも不可解なその現象に、俺の思考がオーバーフローするかねてから常軌を逸している奴とは思いはしていたが、これは無いだろう。

反則にも程がある。 俺の涙と現実を返せ。

「何をボケたことを言っている。 アニメや漫画じゃあるまいし、

私が人外魔境なわけが無いだろう。 まあ、種を明かせばこういう事だ」

得意気に制服の上着をはだけるその腹には、穴の空いた数冊の雑誌と、DVDのケースが収まっていた。

「田原先輩の部屋を物色した時にいただいたモノだ。 まさかな事で役に立つとは思わなかったがな。

——ふむ。 このDVDはもう駄目だな。 中身が完全に割れてしまっている」

八代がそう言いながら、腹からドサドサとその雑誌やらDVDケースを取り出し、中身を確認していく。

平然と人の部屋からモノを盗むな！ と説教をしようと思ったのだが、俺はその雑誌の表紙に我が目を疑い言葉が出なかった。

「……おい。 それは本当に田原のモノなのか？ お前の私物とかの間違いじゃなくて、本当に田原の部屋にあったのか？」

「当然だ。 私の守備範囲外ではあるが、これはこれで趣深いからな。

しかし笑えるな。 アレだけ同世代の女に言い寄られながらも、趣味がこれでは宝の持ち腐れだ」

雑誌の表紙には「幼稚園」「小。生」などの単語が並び、どう見ても子供な女の子達がカメラ目線でこちらに愛らしく微笑みかけている。

——ああ、そうか。 田原はハードガチロリだったのか。 ああね、そうですか。 ロリ原さんですか。 はいはい。

一気に、ここまで俺の中に居たお人よしで優柔普段だった優男が、マニアックな変態紳士の姿に変わっていく。

「——なんかもう、帰りたくて仕方ないぜ」

保護条例とか大丈夫なのだろうか？ この物語はいつたい誰に喧嘩を売っているのだろうか。

02

途方も無い虚脱感を感じながらも、なんとかその場を片づけ、委員長の部屋へと入る。

玄関先で倒れていた委員長は完全に気を失っており、そのまま八代がどこから取り出した荒縄で縛りあげた。

いつも思うのだが、こいつは常に荒縄を持ち歩いているのだろうか？ そして妙に縛り慣れているのは何故だろうか。

やたら結び目の多い縛り方をされた委員長を見れば、俺が蹴りを入れた脇腹に、痛々しい痣が黒々と浮かんでいた。

少しだけ心が痛んだが、この場合は仕方なかったと割りきる。

「ふん。——下着姿で縛りあげられる女子生徒に興奮する秋葉だった」

「いらんナレーション入れてんじゃねえよ。興奮どころかこっちは肝が冷えたつつつの」

実際笑えない。もし八代が田原の部屋から例のアレやコレやを

盗んでいなかったら、死人が出たかもしれないのだ。

俺だって十分に死んでた可能性はある。今さらだが震えがきた。

「とりあえず、電気をつけようぜ。こっ暗くちゃ中の確認もできやしねえ」

言いながら、玄関横に付いたスイッチを適当に押すと、暗いフロアリング張りの通路に照明が付く。

正直、委員長のこの狂いっぷりから、部屋の中に進むのは躊躇われるが、そういうわけにもいかないだろう。

なんせまだ中には拉致られた田原が居るのだ。本当、なんで俺がロリコン野郎の救出なんぞせねばなんのか。どうしてこうなったとはこの事だ。

「突撃！ 隣の晩ごはん！」

とつぜん八代がそんな事を言いだし、リビングに続くドアを開け放ち、そのまま中に駆けていく。

こいつは遠慮とか社会常識とか無いのだろうか？

「何が晩ごはんだ。さっきピザ食ったばっかじゃねえか」

俺も呆れながらその後を追ひ、リビングに入る。マンションの外観同様、リビングも今風のデザインの作りになっており、ダイニングキッチンと隣合わせになっていて、かなり広く感じた。

——良い生活してんなあ。

自分の生活環境との違いに卑屈になりつつ、キッチンの中を荒らす八代を見る。

「あんま関係ないところ荒らすなよ。お前ちょっとフリーダム過ぎるぞ」

「関係ないかどうか、コレを見てから言ってみろ。——流石にコレは私も引いたぞ」

何時になく怪訝な顔をした八代がそう言いながら、コンロにかけられた小鍋を差し出してきた。

「……何これ？ カレー？」

小鍋の中を見た俺が一番最初に抱いた感想がそれだった。しかし、よくよく見てみれば、その内容物に異様なモノが混ざるのを確認できる。

茶色のドロドロの中に混ざる黒い線。見覚えもあるし、それが何か容易に理解できるのだが、その量が余りにもおかしい。間違っただけで入ったなんてレベルではなく、むしろメインである。

「……これ、髪の毛か？」

「それだけじゃないな。こっちはたぶん爪だろう」

八代が小鍋の中をおたまでかき混ぜながら、その中に入る具材をチエックしていく。

やべえ、見てるだけでさっき食ったピザがリバーシそうだ。

「これを、食ってたのか？」

「いや、この髪量からして、これは鹿島の髪や爪だろう。たぶん田原先輩に食わせるために作っていたんだな」

いったいどれだけ田原を愛してんだよ委員長。

自分を食わせるなんてアンパンマン並の自己犠牲精神だ。 いや、

エゴの究極か？

どちらにせよ、これ以上それを見なくなかった俺は、片手で口をおさえながらリビングを出た。

v s ハーレム主人公 (12)

01

キッチンに八代を残したまま、攫われた田原を探すべく、片っぱしから部屋を覗いていく。

マンションの部屋数なんてたかが知れているので、すぐに見つかるはずだ。できるならこれ以上は余計なものを見ずに済ませたい。

まあ予想通り、俺のその切実な願いもむなしく、洋間、和室と順に覗いていくが田原の姿は無く、とうとう残るは一部屋を残すのみとなった。

たぶん委員長の個室なのだろう。居場所としては一番予想がつくのだが、委員長のあの豹変ぶりと、キッチンにあったあのブツを思えばなるべく入らずに済ませたかった。

「——よお、生きてるか？」

なかば田原はここに居ると確信をしつつ、そう言いながら部屋のドアを開ける。

扉の先にあるのは、小綺麗に整頓された女っぽい部屋。薄いピンクのカーテンと同色のカーペットが部屋の基本色を彩っている。

壁際にはクローゼットが置かれ、その横のラックの上に、小さなぬいぐるみが並ぶ。

部屋の間取りに不釣り合いなでかい本棚には、サイズが揃った本やら参考書やらがきちんと整理してあり、後は勉強机とシングルサイズのベッドと、当たり前なのだが、それは予想外に至って普通の部

屋だった。

一瞬、委員長に姉妹が居るのかとか、そつえば親と同居している様な痕跡も無かったとか、そんな事が頭をめぐる。

しかし、勉強机の上に置かれた見覚えのある眼鏡を見て、やはりここは委員長の部屋なのだと思いなおした。

——ただ、田原の姿が無い。

他の部屋は全て目を通した。ここに居なければおかしいのだ。もしや、あのクローゼットの中かと思い、部屋に足を数歩踏み入れたと同時に、

突然視界が揺れ、足から力が抜けていく。平衡感覚を失いながらそのまま膝を着くと、遅れて後頭部にズクンとした激痛が走る。

——何だ？ 何が起こった？

「ははっ、凄いな。本気で振りぬいたのに、気絶すらしないんだ。人間って意外と丈夫にできてるんだなあ。それとも君が特別頑丈なのかな？」

盲朧とする意識のまま、声のした方に目をやると、壁際に立つ田原が金属バットを片手に持ち、こちらを見ていた。

「僕を助けに来てくれたんだよね？ ありがとう。 ついでに君もここで死んでくれると凄く助かる。——いや、違うな。君はここで死ぬんだ」

田原はそう言いながら、ドアを閉め、内鍵をかける。
状況からすると、俺は田原に金属バットで後ろから殴られたのだ

ろうか？——駄目だ。思考がまとまらない。

それにしても、コイツは今何と言った？俺もここで死ねだといつた何がどうなってんだ？なんで田原が俺を殺そうとする？

「……意味わかんねえんだけど。何の真似だよこりゃ？」

俺のその問いに、田原は困った顔をしながらも、その目は俄然鋭く俺を見据えてくる。

「困るんだよ、君の存在が。僕の日常にとって君はイレギュラー過ぎる。

そうだろ？主人公は僕のはずなのに、君の方が目立ったら駄目じゃないか。脇役は脇役らしくしてくれないか」

おいおい……マジかよ。冗談じゃ済まねえぞこれ
後頭部を触ると、ぬるりと湿った感触を感じる。右手に付いた血を見る限り出血は少ない様だが、足に力が入らない。

「冗談？本当に馬鹿なんだね。ヤンキーってのは皆そうなのかい？いや、それとも頭を殴ったせいで脳味噌が半分くらい潰れちゃったのかな？……なんてね。
いいよ、どうせ最後だ。何でも聞いてくれ。どうせ、今はこの場所には誰も入ってこれない」

田原はまるで虫けらでも見る様な目で、余裕を見せつける様に、ドアに背を預ける。

後ろから金属バットで頭殴つという何でもクソも無いだろう。

「言ってる事が一つもわかんねえんだよ。——お前は鹿島に攫われてココに居るんじゃないのか？」

「僕が攫われる？ そんな事、誰が言ったのかな？ 違うよ。僕はここに匿って貰ってたのさ。」

鹿島さんに「僕は諏訪 秋葉と三間坂 八代に狙われている。あいつらは何をしてくるか分からない危険人物だ。僕を助けてくれ」ってね。

案の定、鹿島さんはそれはもう熱心に僕を助けてくれたよ。少し行き過ぎなくらいね。宥めるのが大変だった」

「……なんだよそりゃ」

「わからないかい？ 鹿島さんは見ての通り、僕にベタ惚れだろ？そして、おまけに頭が少しアレじゃないか。」

だから、僕が頼めば、君や八代ちゃんくらい簡単に殺してくれる予定だったんだ。さつくりと、簡単にね。元々、これはそういう予定だった。

——でも、失敗しちゃったみたいだしね。おかげで僕自身がこんな真似しなきゃいけなくなった。本当、使えないメスだよね。アレは。」

まあでも、君と八代ちゃんを殺した責任を、アレに被って貰わないといけないんだった。そういう意味ではまだ使えるかな？」

得意げな顔で、ニヤけながらそう語る田原を見て、こいつは本当にあの田原かと疑ってしまいそうになる。

今のこいつは、まるでイメージとは真逆だ。ヘドが出るほど憎たらしい顔してやがる。

「——どっからだ？ どこから俺達を狙ってやがった？」

「最初からだよ。でも、最初は本当に様子見のつもりだった。」

このまま、ただの不良として、大人しく目立たなければ放っておくつもりだったんだ。

——でも駄目だった。君の影響力は大きすぎたんだよ。おかげで僕の日常が変わってしまった。

生ぬるくて、皆にちやほやされる僕の人生は君と八代ちゃんのせいで台無しさ。

どうしてくれるんだよ？ この責任は大きいぜ。なんたつて僕の人生が賭かってるんだ」

「先に八代を変な力に巻き込んだのはお前じゃねえか」

「……まだ分からないのかい？ どうして八代ちゃんがいきなり僕の力の影響を受けたのか。

だいたい、僕はそれ以前にも八代ちゃんとは出会ってるんだぜ？

それに、その時は彼女に僕の力はほとんど働かなかった。

それが今じゃ、彼女には僕の力が誰よりも強く働いている。これがどうという意味かわかるかい？

以前の八代ちゃんにはなくて、今の八代ちゃんには在る物。それは君だよ諏訪君。君の力のせいで八代ちゃんはあなっているのさ。

僕のせいにするのは筋違いだよ」

「ここに来てそんな重大事実サラツとバラしてんじゃねえよ。

——ああ、クソっ！！ そうかい、そういう事かよ。八代がお前の力を強くしたわけじゃなく、俺がお前の力を強くしたってのか」

「それは半分正解。確かに、僕の力は強くなっている。でもそれだけじゃない。

感じるんだ。力が強くなる半面、急速に僕の中からこの力が抜けしていくのを。そして、このままこの強さが続けば、いずれ僕の力

は消えてしまうんだと。

よく言うだろ？ 蠟燭は消える瞬間に一番強く燃え上がるって、調度そんな感じさ」

「こんな力いらないって言ってたじゃねえか」

「それは本心だよ。 こんな力、別に欲しかったわけじゃない。だいたい、同年代の女の子なんて興味無いしね。

ただ、この力は僕の取り柄でもある。 存在する意味と言ってもいい。 そうだ、諏訪君は恋愛ゲームとかやったことあるかい？」

「あるわけ無えだろ。 うちのゲーム機すら無えんだよ」

興味も無い。 大輔や八代はやってそうだけどな。

そんな俺の答えに、田原は予想していたように「だろうね」と返してくる。 だったら最初から聞くな。

「僕はあれ系のゲームの主人公に凄く共感を覚えるんだ。 僕そのものと言っていていくくらいにね。

そこでだ。 そのゲームの主人公が、もし誰かと付き合ったり、思いを遂げたらどうなるか分かるかい？

答えはそこで終了。 その先は無いんだ。 消えて無くなるんだよ。いくらハッピーエンドに飾ってもそれまでのさ。

だから僕は誰とも付き合えないし、誰の思いにも答えるわけにはいかない。 あくまで一定の距離を保ちながら、嫌われない様、好かれ過ぎない様、細心の注意を働かせて彼女達と過ごさなきゃいけない。

おかげで僕は女性恐怖症一歩手前だ。 まったく、最低の力だよ。でも、そうしなきゃ僕は消えてしまっただよー！」

誰に向かつての訴えなのか。

田原の表情からさっきまでの余裕の笑みは消え失せ、憎悪を剥き出した顔で叫ぶ。

「それでロリコン趣味に走ったわけか？ 鹿島の狂いっぷりも相当だったか、お前も十分負けてねえよ。

よくもまあ、人の良いツラして騙してくれたもんだぜ。 やっぱお前ム力つくわ。 最初から気に食わなかったんだよ」

「ははっ！ 僕も君が嫌いだったよ！！ 年下の癖に偉そうでさあ。だから、今から君を自分で殺せるのは少し嬉しいんだっ！！」

金属バットを両手で構え直し、大きく真上に振りかぶる田原を見て、俺は自分のつま先に力が入るのを確認する。

長話をしてくれたおかげで、だいぶ身体が動く様になってきた。

一直線に振り下ろされるバットの軌道を読みながら、最低限の移動でそれを避わす。

さっきまで俺の蹲っていた場所に、部屋の床板をぶち抜く様な重たて、バットが直撃した。

予想外の空振りと、床板を叩いた反動で田原がバットを取りこぼす隙を見逃さずに、俺は腕の振りだけの軽いジャブをその鼻づらに叩き込んだ。

田原は一瞬低く呻き、顔を庇うように腕を上げる。

腰の入っていないジャブにも関わらず、田原の整った鼻梁からポタポタと真つ赤な血を落とすには充分だったようだ。

「へっ。 どうしたよ？ 殴られたのは初めてか？ 鼻血くらいでビビんなったの」

「あんまり調子に乗らない方がよいよ。　忘れてるみたいだから、もう一度教えてやる。」

今は君の力より、僕の力の方が強いんだ。　主人公は僕なんだよ！」

言いながら、田原ががむしゃらに腕を振り上げ、大振りに殴りかかってくる。

いかにも喧嘩慣れしていないその体勢、挙動に俺は油断していた。こんなものなんなく避けせると。　そう思っていた。

「――なっ！？」

しかし、避けようとした瞬間、部屋のカーペットに何故か足を取られ、滑らせてしまう。

体勢を崩し、頭が下がった位置に待ち受けていた様に田原の拳が迫り、俺の顔面を打ち抜いた。

――マジかよ！？　信じらんねえ。

威力は無いが、よほど良い角度で入ったのか一瞬意識が飛びそうになる。

「ははっ、人を殴ったのは生まれて初めてだよ。　でも、あんまり良い感じはしないね。」

なにより僕の方も痛いってのが最悪だ。　やっぱりバットを使う方が良さそうだな」

田原は殴った方の手首を押さえながら、床に落ちた金属バットを拾い上げる。

「どうしたんだい？ そんな驚いた顔をして。 いったい何で僕のパンチが当たったのか理解できないって顔だぜ？

簡単だよ。 僕が主人公だからさ。 主人公補正ってやつだよ。 そっという風に出てくるんだ」

なんだその無茶苦茶な理論は。 これは本当に現実か？ 変な設定盛り込んでんじゃねえよ。

「……たまには負ける主人公ってのを希望してえな」

「残念だけど、このルートにそんなモノは無いよ。 これは君が死んで僕が生き残るグッドエンドだ。 さあ、僕の為に死んでくれ」

さっき見た委員長以上に、田原の目に宿る狂気の光が強くなる。
こんな主人公が居てたまるか。

ほんの数分前まで、委員長の几帳面なほどに整理整頓されていた部屋は、今や見る影もないくらいグチャグチャに破壊されている。壁は凹み、机は半壊し、カーペットには血が染みつき、カーテンは破れて——とにかくグチャグチャだ。

そしてその部屋に負けず劣らず、俺自身も結構な具合にやられている。そりゃそうだ。いくら俺の部屋よりだいぶ広いと言っても、所詮は個室。

その個室の中で、これでもかと殺意満点にバットを振り回されりや、完全に避けるなんて不可能に近い。

その証拠に、致命的な一撃は食らわずとも、かすったり、腕で受けたりと、けっして小さくないダメージが身体に積み重なる。

おまけに、こちらの攻撃は、最初の一撃以降、全てが不発という有様だ。

タイミングがズレたり、バットでいなされたりと、まるで『ずっと田原のターン』なのである。

完全にバランス崩壊だ。勝負にもなりやしねえ。八百長試合だって、もうちょい見せ場作るぜ。

「おいおい。——こりゃちょっとズル過ぎなんじゃねえの？」

「なんとも言いなよ。それより、君も随分しぶといな。いい加減あきらめて殺されてくれないか。僕はその後八代ちゃん

も片付けなきゃいけないんだぜ？」

比喩でも冗談でもない 「人を殺す」 という言葉を、そしてその行為を、まるでただの面倒事のようにさらりと言つてのける。罪悪感だの、良心の呵責だの、そういったモノを微塵も感じさせない言動。

——ああ。 コイツもそうなのか。

その顔を見て、そんな思いが頭に浮かぶ。 過去に一度だけ、この田原と同じ奴を見た事がある。

人の命なんて何とも思っていない思考。 自分以外の人間の存在を否定しきつた顔。

まったくヘドがでる。 田原には無い。 ここまで来ても 「何とかなるだろう」 とどこかで考えていた自分にだ。

こいつも被害者だとか、仕方なくやってるんだとか、そんな甘い考えが頭の片隅に少しでも残っていた事に対する後悔。

同じ間違いを繰り返した気分とでもいうのか。 ともかく最悪だ。

もし、田原が『アイツ』と同じだと言うのなら、俺にはどうにも出来やしないのに。

「——まったく。 いい加減ムカついてきたぜ。

何だってお前みたいな奴ばっか俺の前に現われるんだ？ 放つといてくれりゃそれでいいのによ。

お呼びじゃねえんだよ。 クソつたれが」

「ははは、何だいそりゃ？ 「まるで前にも僕みたいな奴に殺され

かけた事がある」みたいな言い草だね。 野蛮だなあ。

ある意味、君みたいな奴は存在するだけでみんなに迷惑をかけるって証拠なんじゃないか？

やっぱり君はここで死んだ方が良いんだよ。 差し詰め僕は正義の味方ってところだね」

「狂った頭で狂ったこと言ってんじゃねえよ。 お前こそ大概迷惑な存在だろうが。」

それにお前、知ってるか？ こんなシリアスシーンはそうそう長く続かねえんだよ。 それが分かんねえなら、お前に主人公の才能は無えな」

「……どういう事だ？」

田原がそう言った瞬間。 その背後にある部屋のドアノブがガチャガチャと音を立てた。

俺がこの部屋に入って、少なくとも既に10分近くは経過しているはず。 おまけにこれだけ派手な音を立てりゃ、いくら何でも八代が来ないわけがない。

「——む？ 鍵だと？ おい、秋葉、この中に居るのか！？」

鹿島の部屋で鍵を掛けて一人でナニをしている！？ 私も混ぜろっ！！」

ドア越しから聞こえる八代の間抜けな声に思わずツツコミそうになるが、俺は黙って田原を牽制する。

真正面に俺と構えてはいるが、確実に田原はドアの方に意識を乱されていた。 八代が部屋に入れば、間違いなく田原は八代を攻撃するだろう。

しばらく沈黙のまま膠着状態が続いたが、ドア越しから 「やつ

ぱり居ないのか？」という八代の声が聞こえ、それと同時に気配も消える。

「フハッ！ 残念だったね。……それにしても、僕の力で普通の部屋には近付くことすら出来ないはずなのに。とことん常識外れな女だよまったく」

緊張の糸が切れた様に、田原が安堵の声を上げ笑いだす。

「ちよつと待てよ。そりやおかしいだろ。お前の力つてやつは女をむやみやたらに引き寄せるんじゃないか？ いつからそんな何でもありなキャラに化けてんだよ」

「基本は同じさ。ただ今はベクトルを全て君に向けているだけだよ。言ってみれば、今は君が僕のヒロインってわけさ。まあ、こんな芸当が出来る様になったのも最近だけだね」

「最悪過ぎるだろそれ。しかもヒロインを殺そうとしてんじゃないかよ」

「たまにはそういうヒロインが居てもいいんじゃないかな。」

——でも、これが君の狙っていた事なのか？ その割には黙ってやり過ごすなんて変な話だよな。
「なんで助けを呼ばないのさ？」

「別に。俺は女に「助けてくれ」なんて情けねえ事言いたくねえもん。んなダッセえ真似するくらいなら死んだ方がましだろ？」

「皮肉のつもりかい？ そんな安い挑発には乗らないさ。」

女なんて生き物、利用する以外に価値なんてないだろ。　その辺を
割りきる事が賢く生きるコツだぜ？

もっとも、君は今から死ぬんだから、今さらこんなこと言っても無
駄か」

「うつせんだよ。　やっぱお前、最悪だわ。　おまけに大マヌケだ」

そう。　こちらの仕込みは既に終わってる。

八代がこの部屋が存在を知った時点で、この局面は終わりなのだ。
本来ならそんなドアくらいブチ破ってくる奴だ。

それが来ないってことは――。

そして田原が普通に警戒しているだけなのなら。

「負け惜しみにもなってないね。　――それじゃ、終わりにしよう
か――！」

ゆるんだ雰囲気、殺気が埋め尽くす。

目の前に立つ田原が、軽く握っていたバットを両手で構え直した。
ギラついた眼で俺を見据え、一気にバットを真上に振りかぶったそ
の時。　俺の背後から、何かを突き破る様な破壊音と共に、砕かれ
たガラスの雨が室内に降り注ぐ。

ほらな？　こんなシーンは長く続きやしねえんだ。　絶対コイツ
が掻き回すに決まってる。

こいつを普通に警戒するくらいでどうにか出来るわけが無い。

「ダイナミック・フェイント――！」

そんな呆れる様なセリフを放ちながら、本日二度目のガラス破り

をやつてのけた八代が、華麗とも言える着地を決めて部屋に飛び込んでくる。

パキリと音をたて立ち上がる八代の足元を見れば、ちゃっかり靴を履いてやがる所が憎らしい。

「なにがダイナミックだ馬鹿。もうちょい加減とか考えろよな。おもいつきりガラス被っちまったじゃねえか」

身体にかかったガラス片を払いながら、そんな憎まれ口を叩く。もつとも、元々後ろ向きだった俺と比べ、まともに正面からガラス片を被った田原はたまったものでは無いだろう。

両手でバットを構えていたせいか、顔を防ぐのが遅れたらしく、所々切れて血が出ている。

「おやおや、なんだこの状況は？ 何故、田原先輩がバットを持ち、秋葉がボロ雑巾になっているのだ？ てつきり、秋葉がズボンを脱いでいる現場を押さえたつもりでいたのだから」

八代は散々な状態の室内を見回し、次いで俺と田原を交互に見比べた。

セリフに似合わず不敵な笑みを浮かべている辺り、大体の状況は察しているだろうくせに、あくまで俺が鹿島の部屋で何かしていた事に拘ってきやがる。

いくら何でも人ん家でそんな真似する趣味は俺には無い。

「何で？ 何で！？ あり得ないっ！！ どうやってこの部屋に！？」

先ほどとは打って変わり、田原が狼狽ながら八代に食ってかかる。

完全に余裕は消え去り、青ざめ困惑するその様は、悲愴ささえ感じるほどだ。

田原も解かっているのだろう。この場に八代が来るという事が自分にとって何を意味するのか。

「窓からに決まっているだろう」

田原のその動揺っぷりを見ても、八代は冷静に、さも当たり前だとでも言う様に、そう割れた窓を指す。

ここって確か三階だった気がするが、今は何も言うまい。

今はそれよりも先にやる事がある。そうだ。この馬鹿げたドタバタを終わらせるのだ。

「どうするよ田原。これでお前の主人公パワーってやつも当てになんなくなっただぜ？」

なんせ八代がここに来たんだからなあ。

——悪いけど、俺も今ハッキリ自覚できるぜ。主人公として、俺がお前に負けるはずが無えってな」

ましてやヒロインなんて問題外だ。

俺の言葉に、田原がますます恐慌する。

なんせ田原にとって、主人公で無くなる事は存在の消失と同義なのだ。これ以上のダメージは無いだろう。

「こんなはずが無い……。どこだ！？どこで間違えた！？

！？」
僕はちゃんと攻略ルートを選んだはずだっ！！何なんだよコレは

間違ってる、間違ってる……。いや、そうか。これは間違いじゃない。合ってるんだ。

フフフ……そうか。　　そうだよ。　　そういう事だったんだ!!」

錯乱しかけながら、何やらぶつぶつ言いだす田原を横目に「おい、何だアレは？　この家には狂人しか居ないのか？」　などと八代が俺に耳打ちしてきた。

その意見には概ね俺も賛成なのだが、今は田原の様子から目が離せない。

「ハハハ、僕は分かっているんだよ八代ちゃん。　君がそんな危険な目を犯してまで、この場所に来た理由ってやつをさ。」

——君は、僕が好きなんだろう？　　僕を諏訪君から助けに来たんだよ。ね？

そうだよ。　　そうに決まっている。　　なんたって僕はモテるんだ。

全ての女性は僕に惚れるんだからね!!」

田原が狂気染みた笑顔で俺と八代を見る。

そうか、そうきたか。　　まさにハーレム主人公的な発想。　　俺に

その発想は無かった。

そして実際、こいつはモテるのだ。　　それもあり得ないレベルで。

俺の中に僅かながらの不安が生まれる。　　本当に八代は、田原に

惚れていないと言い切れるのか？

田原の力に一番強く影響を受けていたのは八代で間違いないだろう。

そしてもし、田原の力が八代の心にまで影響しているのだとしたら……。

「僕の彼女になれ、三間坂　八代っ!!」

「断るっ！！」

間髪いれずに、凜とした態度でそう返した八代を見て、我ながらアホな考えだったと思い直すのに一秒もかからなかった。

一方の田原は、その答えが完全に予想外で、信じられない現実を叩きつけられたかの様に膝を着く。

それが初めての告白に失敗したショックなのか、自分の敗北を認めた脱力なのかは俺には分からない。 どちらにしろご愁傷様だ。

02

「——結局、田原先輩が黒幕で、その野望も潰えた。それで、どうするのだ？」

「どうするって何が？」

八代に事の顛末を説明しながら、変わり果てた鹿島の部屋を見渡す。

よくもまあここまで荒らしたものだ。 壊したと言った方が正しいのかもしれない。

そして見事なまでに破壊され、端に少しかだけガラスが残る窓枠の下には、何故か見覚えのない小型の消火器が転がっていた。

「田原先輩に決まっているだろう」

八代がそう指差した先には、もはや廃人同然の田原が部屋の隅に座りこんでいる。

八代に振られたのがそんなにショックだったのだろうか？ そんな

わけ無いだろうけど。

「……さあな。 どうにも出来ねえだろ、こんな奴」

さんざん殴られたお返しをしようにも、ここまで抜け殻になられちゃ意味が無い。 まったく、とんだ殴られ損だ。

「それよりお前、本当にどうやってココに来たんだ？ いくら何でもガラス突き破って来るなんてやり過ぎだろ」

「馬鹿を言うな。 そんな事したら傷だらけになるじゃないか。 ちゃんとガラスを割ってから入ったに決まっているだろう。」

屋上に行く時に、調度手頃な消火器が在ったからそれを拝借したのだ。

それより、縄の長さが足りた事の方が幸いしたな。 本当にギリギリだったんだぞ。

念の為に鹿島を縛っていた縄も持って行っただのが功を奏したな」

「は？ —— 今なんて？」

「だから、縄がギリギリだったと言っている」

「そうじゃねえよ。 そこじゃなんだよ。 お前、鹿島を自由にしたのか？」

「うむ。 もう縛っておく必要もなかったからな」

「必要ないって何で？ 必要もクソも、あの鹿島だろ！？ 今はあの意味、猛獣より危険だろうが」

まだ野犬の方がましつてもんだ。

「心配するな。鹿島も、その田原先輩と似た様な状況だ。今もたぶん、そのドアの前で呆けているさ」

「おい、ちよつと待て！！そこに居るのか！？」

俺が慌てて身構えるよりも早く、八代は鍵を解き、ドアを開ける。音も無く開いたそのドアの真正面には、委員長こと鹿島 梅が微動だにしないままつつ立っていた。

その姿を見た途端に、俺の警戒心が掻き消えてしまう。

鹿島は登場シーンと変わらない下着姿のまま、ただ立っていた。

玄関で見た白い肌には所々縄で締められた跡が浮き、更にその白さが際立つ。が、何よりも目を惹くのはその表情だ。

白さを飛び越した真っ青。何も感じていないかの様な無表情。いや、無感情な顔とでも言うべきか。

「……鹿島？」

思わずガラにもなく、心配する様な声が出てしまった。

いったい何時から鹿島はそこに居たのか。そして、どこまで話を聞いていたのか。

「概ね、お前達の会話を全部聞いてしまったのだろう。私がこの部屋を見つけたのも、鹿島が縛られたままズリズリ這いずってこの部屋の前に居たのを見つけたからだしな。その時には、もうこんな状態だったぞ」

「最悪じゃねえか」

誰も近付けないんじゃないや無かったのかよ。この馬鹿嘘ばつかに吐きやがって。

それとも、既に本当に力が消えかけていたのか？

なんにしろ、鹿島は自分がただ利用されただけだと知ってしまったのだろうか？

そして、自分が田原に本心では気持ち悪がられていた事も。

「――田原君」

鹿島はゆっくりと、今にも崩れてしまいそうな動きで、本当にゆっくりと、部屋の中に入る。

床に散らばるガラス片など気にもせず、裸足のままで、部屋の隅に座る田原の前まで歩いていく。

「ねえ、田原君」

鹿島のその呼びかけに、田原は顔を伏せたまま動かない。
聞こえていないはずがない。こんな悲しい呼び声。

「大丈夫だよ――私が、私が田原君を守ってあげるから。」

私は田原君の味方だよ。ずっと、ずっと味方だから……。だから、安心して」

動かない田原にかまう事なく、ゆっくりと寄り添いながら、ぎこちなく笑顔を浮かべ、鹿島はそう語りかける様に声を出す。

見ているこっちが辛くなりそうだった。

この時、俺は正直驚いていた。田原の本心を知ってもなお、鹿

島はそう言い切ったのだと。

しかし、田原の口から出た言葉は、そんな鹿島を切って捨てる言葉だった。

「——近付くなよ。　　気持ち悪い」

何の感情も籠らない声で、鹿島を見もせずに田原はそう言った。その言葉を聞いた瞬間、鹿島の全てが絶望に染まった気がした。己の全てを捧げた相手からの拒絶の言葉。　寄り添うことすら許されない、そんな拒絶が、鹿島の全てを否定したのだ。

「……なあ、八代。　　俺はさっき、あんな奴どうにも出来ないって言ったけどよ。」

——そんで、それは今でもそう思っちゃいるんだけどよ。　　それでもやっぱさ、ここはやっておくべきなんだろうな。　　それそうしないとどうにもム力つくつつうか」

「……そうだな。　　やるべきだろう。　　何より、こんなモノ、私は望まない。」

私はハッピーエンド以外認めない主義なんだ」

「別にノーマルエンドだってかまわねえけどよ。　　やっぱ、俺もこんな終わりは気に入らねえわ」

それだけ交わし、俺は一気に田原の前に詰め寄る。
足の裏にガラスが刺さるが、そんなもの今は気にしない。

「いいか。これは誰の為とかじゃねえ。こうしないと俺がム力つくからやるだけだ。」

恋だの愛だの知ったこっちゃねえし、誰がフラれようが俺は関係ねえ。

俺がム力ついただけだ。だから俺が、俺の為にやる。

——そこんとこ宜しく」

誰に言うでもなく、俺はそう言い切る。

言い切りながら、全力で、隣に座る鹿島など視界にも入れず。

足を踏ん張り、腰をこれでもかと溜め、腕を引き絞り、一気に振り切る。

会心の一発。狙うはただ田原の顔面。容赦も加減も一切ない拳骨だ。

メキリという骨の軋む音が拳の先から響く。その刹那、座った

姿勢のまま、半身が軽く浮き上がり、後ろの壁に激突するように田原は崩れ倒れた。

避ける素振り無く、ただ殴られた勢いのまま田原は倒れたのだ。

「よっし、スッキリした！！ んじゃ、帰るか八代」

全然スッキリしない癖に、無理矢理そう自分に言い聞かせる。

本当に胸糞悪い。

それでも、これで終わりだ。

顔を陥没させたまま、ピクピクと痙攣し倒れる田原を確認した後、俺は上着を脱ぎ、それを鹿島の身体を隠す様に掛け部屋を出る。

その後ろから、何も言わないまま付いてくる八代が玄関先に着いた辺りでふいに声を出した。

「——なあ秋葉よ。正直、最後の鹿島に服をかけるのは無いんじゃないか？ お前は昭和の番長か？」

おまけに「そこんとこ宜しく」とは。笑いを堪えるのが大変だったぞ」

「笑うシーンだったか！？ いらん駄目出してんじゃねえよ。言われなくても自分でもどうかと思ってんだからよ。」

そんな的確に指摘されたら恥ずかしくて泣いちゃうだろうが」

「ほお。いいぞ、泣いたら私が存分に甘やかしてやるう」

「それこそ無いだろ」

軽口を叩きながら、ガラスの刺さった足のまま靴を履き、玄関を出る。

地味に痛い、今は早くここから離れたい。

「そうでもないぞ。主人公様特権というやつだ。否、ヒロインだったか？」

まあどっちでも良いが、お前は自分が主役だと自覚したのだったよな」

玄関を出た八代が、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべ、俺の顔を見てくる。

まったく失敗だった。コイツの前であんなセリフ言うべきでは無かったと思う。

「そんな特権お断りだな。それに、ありやただのハッターだ。だいたい主人公なんて興味無えんだよ。」

面倒臭いだけにしか思えねえ」

これは本心だ。八割は田原を動揺させる為のハッタリで、残り二割は例え脇役だろうが何だろうが、あんな奴に負けるわけが無いという確信。

モブキャラだってそのくらいの意地があってもいいだろう。

「それはそうと、田原の家で待つ脇役達はどうするのだ？」

「……あ」

すっかり忘れていた。

まったく面倒過ぎる。この足でまた田原の家まで戻る事を考え

ると、億劫を通り越して快感にすら感じる。

いや、嘘だけだな。

ほぼ全身といって差し支えない箇所が痛むなか、半ば意地になりながらも律儀に登校する俺は学生の鑑と称賛されるべきだろう。

コレを期に、校内に流れる俺に対する不本意極まりない噂話や、流言も改善されて然るべきではなかるうか？

「なんだ秋葉、もう学校に着くというのにまだ目が覚めていないのか？ 気持ちの悪い寝言が口からズルリとはみ出しているぞ」

「寝言じゃねえよ！！ あと人のモノローグを内臓みたいに表現するの止めてくんない？」

満身創痍な俺と違い、隣を歩く八代はどこまでもいつも通りだ。

「たかだか一日や二日寝てない程度で情けない。 お得意の根性と言う名のやせ我慢はどこにいった？」

「俺が寝れてない元凶は全てお前に在るんだけどな」

とても昨夜、深夜遅くまで俺の寝込みを襲ってき奴の発言とは思えない。

そうなのだ。 あろうことか、こいつは昨日も治療だの何だのと理由を付けて俺の家に泊まったのである。

一応、泊まりの目的である怪我の消毒やはちゃんと処置してくれたわけだが、その犠牲に俺の睡眠時間がこும்ゴリゴリ削られては割りに合わない。

もうこの際、こいつの貞操観念とか、一般常識とか、その他もろもろの倫理感だとかについて俺は言及しない。願いは一つだ。普通に寝かせて欲しい。

「それは無理な相談だろう。いいか、よく聞け秋葉。だいたいがお前の私生活には色気というものが無さ過ぎるのだ。性欲真つ盛りの高校二年生の男子といえば猿も同然。その猿の家に、同級生の女子が泊まりに来るといって一大イベントに何も事を起こさないとはどういう事だ。

しかも二度もだぞ！？ 何だお前は？ 坊主か？ 修行僧にでもなるつもりか？ くやしかったら私を犯してみろっ！」

「朝っぱらからとち狂った事言ってんじゃねえっ！ あのな、何でもかんでもごり押しで通ると思ってんなよ？

男つてのは一人一人グツとくるシチュエーションってのがあんだよ。万人に共通するものなんて無いんだ」

「ほお、興味深い意見だな。参考までにそのシチュエーションとやらを聞かせてみる。九割がた再現してやるから」

「言わねえよ。どんな再現率だよ。あと、こんな事にメモなんてとろうとすんな」

「ケチ野郎め」とスカートの中にメモ帳をしまっ八代を横目に見ながら、俺はやれやれと若干痛む足を引きずりつつ、目前にある学校の校門を目指す。

昨日のゴタゴタで、今回の騒動も粗方片付いたとはいえ、やはり日を跨げば気になる事も増えるものだ。

いっそ全部忘れて、ふて寝でもしてられたなら、どれだけ楽だろうか。自分の中の意外な責任感が恨めしい。

結局、昨日は田原の家には戻らなかった。

さすがに俺の身体にも限界にきて、アビ子に電話でおおまかな出来事を報告し、そのまま解散みたいな感じになってしまった。

マツリは相当ゴネて、そのまま田原の家に泊まり込んだらしいが、あの状態の田原に会わずよりいくらかマシだろう。

そもそもガラスを割って不法侵入している身で、泊まる泊まらないの問題なんか今さらだとも思う。

「……考えみりゃ、なんの解決もしてないんだよな」

そんな愚痴にもならない、ため息交じりの言葉が口を吐く。

「そうでもないぞ。少なくとも、もう私には田原先輩の力は感じない」

「え、いつからだよ？」

「昨日、鹿島のマンションを出た時には既に消えていたな。おかげで、こうして行動の制限なく、自由に秋葉にセクハラ出来るようになった」

「お前の行動にいつ制限がついたってんだよ。ちつとは自重とか、抑制って言葉を覚えろ。あとセクハラ反対」

「はっ、勿体ぶりおつて。本当は好きなくせに、たまには正直に私に身を委ねて——」

八代が最後まで言い終わらないうちに、俺はさっさと先へ歩く。モヤモヤした思いが、俺の足を急がせた。

頭に浮かぶのは昨日の田原。力が消えれば、自分も消える。
その言葉だけが、妙に頭に残っていた。

02

「最近、諏訪くんが怪我してるのがデフォルトみたいに思えてきたよ」

「うるせえよ。それより、昨日は悪かったな、先に帰っちまって」

教室に着くなり、既に登校していたアビ子と挨拶代わりの軽口と謝罪。なんだかんだでコイツも付き合いが良いというか何と云うか。

「昨日は大変だったみたいだけど、大丈夫みたいで安心したよ。うんうん、元気が一番だね」

アビ子がそう言って、心底安心したように顔をほころばせる。不覚にも、そんな表情に一瞬だけ焦ってしまった。これは反則ではなかるうか。

「……お前って、意外と男泣かせな奴かもな」

「え？ 何が？」

本人に無自覚な所もまたポイントが高い。まあ、自覚があつてそんな表情作れたならそっちの方が怖い気もする。

「なんでもねえよ。悪いけど、俺、ここんとこ寝不足続きでさ、そろそろ限界ちけえんだわ。」

詳しい話は昼休みにでもってことで、あとよろしく頼む」

「ちよつとちよつと、いきなりエスケープ!? まだHRも始まってないよお兄さん」

教室に入って早々、机の横に鞆を掛け、そのまま教室を出ようとする俺の腕をアビ子が掴む。

そこがちよつと、昨日田原のバットを受けた場所だったせいか、痛みで反射的に身体が硬直してしまった。

「——っっ」

「あつ——、ご、ごめんっ!」

慌てて手を引くアビ子を見ると、申し訳なさそうな顔をして謝っている。

なんだコレは? 正直調子が狂う。コイツこんな性格だったか?

俺はなんとも言えないむず痒さを感じ、なるだけぶつきら棒に、簡潔を心がけ「いいや」とだけ答えた。

「まあ、こんな具合だからよ。マジで今は休みてえんだ。悪いな」

「そ、そうだね。無理は身体に良くないもんね。オラオラアっ、そうと決まったらさっさと行っちゃいなよユー!!」

なあに、出欠の事なら気にすんな! あたしが特別サービスで代返しといてやんよっ!」

それは確実にバレるだろうが、俺は何も言わなかった。
この雰囲気、アビ子も俺も調子を崩したのか、妙なテンション
になっている。

そして、それはお互い共に望んじやいないモノのはずだ。
誤魔化す様に、アビ子が大袈裟な素振りで俺の背中を押してくる
のを受け、俺はそのまま教室から出ていく事にした。

03

近いのか遠いのか、距離感の掴めないチャイムの音に導かれる様
に、眠っていた意識が段々と覚醒していく。
薄く開けた目で閉じ切ったカーテンの方を見ると、隙間からやや紅
い西日が、資料室の中に差し込んでいた。

「あ、やっと起きた。 もう、お寝坊さんなんだから。 ほら、ヨ・
ダ・レ、付いてるぞ」

雑誌を枕代わりにして、仰向けに寝ていた俺を覗きこむ八代の形
をした何かが、クスリと笑みを浮かべ、涎のついた俺の頬を指す。

「……誰だお前は？」

俺は八代の姿をした別の何かにそう答える。

「誰って、ひどいなあ、忘れちゃったの？ 私はあつくんの幼馴染
で、同級生でもあり、そしてなんと母親でもある三間坂 八代だよ

ん！」

裏声なのか、普段とは違いややかん高い声の八代みたいな何か、身体をくねらせ「プンプンっ」頬を膨らませていた。 激しく似合っていない。

「どんだけこつた煮にすりゃそんな頭の悪い設定になんだよ」

「フツ。 やれやれ、最早ここまで鈍感だと逆に清々しいな。 このキャラは、大輔の脚本に私自らが改稿を加えたスペシャル仕様。 主演級のヒロインを全て私に集約する事により、前回では不可能だったあらゆる行為とシチュエーションが可能となった夢のヒロインだ。

さあ、コレを読み秋葉。 舞台は既に整っているのだ」

いきなり素に戻った八代がそう言って差し出した台本は、前に大輔が書いてきた本に改訂版と大判が押してあるモノだった。

俺はそれを受け取り、無言のまま縦に引き裂く。

「なっ、貴様っ！ 正気か!？」

「黙れ変態」

寝ざめから嫌なものを見てしまったと、呆れながら身体を起こす。 パイプ椅子を並べただけの簡単なベッドは、睡眠不足を解消してくれる代わりに、身体の節々に嫌なコリを残してくれた。

軽くストレッチの真似ごとで身体を伸ばしながら横を見ると、資料室の真ん中に設置された机を挟んで、アビ子とその他二人（大輔&蘭子）が、俺と八代を見て苦笑しているのが目に入る。

「おはよさん。 いやあ、よく寝てたねえ。 もう放課後だよ、
諏訪くん」

いや、苦笑しているのはアビ子だけで、蘭子是不機嫌そうな顔で俺を睨みつけているし、大輔は黙っていつものアホ顔を晒していた。

「ん？ てかもう放課後かよ。 やべえ、爆睡してた」

余程疲れてたんだな俺。 自分の事ながら労ってやりたい。

「あんたねえ、人をこれだけ待たせといて第一声がそれ！？ 少しは悪い事したとか考えないの！？」

呑気に欠伸をする俺を指差しながら、蘭子が吼える。 というか、アビ子はわかるとして、何でこいつらまでここに居るんだ。

「——そ、そんな……っ！！ 美少女が寝過ごした自分を優しく見守りながら、起きるまで待つてくれていたというシチュエーションをこつも見事にブチ壊すなんてっ！！
諏訪先輩っ！！ あんたそれでも男っすか！？ ——チクショウっ、何でっ！？ 何でなんだよっ！！」

大輔がなにやら号泣しながら机に拳を打ち付けているが、軽く無視する。 正直付き合っていられない。

「本当は昼休みにもみんな集まってたんだけどね、諏訪くんがあんまりぐっすり寝てたから、そのまま寝かせといてあげようって」

「そうよ。 私達の優しさに感謝しなさいよね！ 授業サボって寝てるのを黙認してあげたんだから」

アビ子のフォローに、何故か蘭子が割って入ってくる。

「……そりゃどうも」

それを軽くあしらいつつ、アビ子の方に目を向けると、アビ子が察した様に肯いた。

「大体の話は、八代ちゃんから聞いたよ。なんか思ってた以上にヤバそうな展開だったんだね」

まあ、普通に死にかけたのだから、危険だったのは言うまでもない。それよりも、俺が気になるのは今日だ。

間抜けにも一日寝こけてしまったせいで、自分で確認する術が無くなってしまった。

「それで、諏訪くんが寝てる間に、あたし達で田原先輩の教室に行ってみたんだけど――」

その先の言葉は、俺の予想していた通りの言葉だった。

「田原先輩、それと鹿島先輩も来て無かったよ。あと、マツリちゃんも」

VSハーレム主人公（15）（前書き）

エピソード

VSハーレム主人公（15）

01

テレビから流れるニュースをBGM代わりに流しながら、朝食にもならない熱いコーヒーを軽くすする。

日曜日。休日にしては割と早く目が覚め、持て余し気味にダラダラと過ごす時間は嫌いじゃない。

あれから二週間。結局、田原を含め、鹿島もマツリも、一度も学校に来る事はなかった。

当然、あれだけ目立つ奴らが揃って登校しなくなったのだ。今も校内では、実しやかな噂が現在進行形で飛び交っている。

ただ、三人とも学年が違うせいか、俺の耳に入るのは全て噂話の域をでないものばかりだった。八代もアビ子も、その辺の情報は拾いしだい逐一俺に報告してきてくれるが、正直期待薄だ。

まったく内容が頭に入らないままテレビ画面を見れば、今年話題のファクションだとか、政治家の汚職事件だとか、芸能人の恋愛事情などが代わる代わる節操無しに垂れ流されていく。

目に入ったと思えば、すぐに次の情報に押し流される。たぶん、そういうもの何だろう。田原達も、このニュースの中身と同じ、そのうち忘れられていく様に終わっていくのかもしれない。

俺自身、別に「あいつ等を救いたかった」なんて後悔は無い。

出来無いと理解している事を望むほど、馬鹿ではないつもりだ。

それでも、何かを期待してしまうのは、やっぱり俺は馬鹿だとい

う事なのだろうか？

「——本当、めんどくせえ」

いつの間にか冷めてしまったコーヒーを口に含めば、飲み慣れたはずのインスタントなのに、心なしかやたらと苦く感じた。

駄目だ。最近一人になる時間が少なくなっていたせいか、どうも調子がおかしい。こんなメランコリックは俺には似合わない。いくらハードボイルドを自負しているとはいえ、この歳でリアルに背中に哀愁を背負うなんてごめんだ。

——遙さんのところにも冷やかしいにいかうか。

そう思った時、ふいに玄関をノックする音が聞こえた。

こんな早朝から誰かが来るなんて、心当たりは一人しかいない。無駄に元気な変態に違いないだろう。

普段なら追い返してやるくらいの勢いだ、今の俺は珍しく寛容だ。

別に寂しいとかそういう訳では決していないが、遊びに行く程度なら付き合ってもかまわない。今日はそういう日なのだ。

サービスデー的に考えてもらえば良い。そう、今日は秋葉感謝デーだ。

なんて事を思いながら、玄関の鍵を解き、戸を開く。

「よう、今日は秋葉感謝デーだ——ぜ？」

「……はあ？」

玄関戸を開け、その前に立つ人物を見た瞬間、思考が停止する。

白いブラウスに、タイトな感じのジーンズパンツ。

ラフな服装のはずなのに、その全体からでる清潔感と高級感は、うちのボロアパートの玄関口とは対照的で不釣り合いだ。

記憶にあるよりもやや短くなったショートの髪は、以前は知的な印象のみが強かった姿に活気さも感じさせる。

「あゝ……。どちらさんでしたっけ？」

「あら？ もう忘れちゃうくらい、私って印象薄かったかしら？」

「そんな訳ないだろうが」 と思わず口を吐きそうになる。

狼狽する俺を面白がる様に、目の前の彼女は、その眼鏡の奥にある瞳を妖しく光らせた。

「久しぶり——でいいかしら？ といっても、まだ二週間くらいしか経ってないけどね。」

元気そうで良かったわ。——ん、どうしたの？ さっきから凄い変な顔になってるけど」

「そりゃな。 そりゃそんな顔にもなるだろうよ」

「なに、殺そうとした事、まだ根にもってるの？ 貴方ってあんがい器が小さいのね」

そんな事をさらっと水に流せるなら、きっと世界は平和で溢れるだろうぜ。

それにしても、こんな時どう反応すればいいのだろう。まさかコイツから、しかも俺の家に直接来るなんて思ってもいなかった。まさに予想外。想像の外だ。コイツもとことん常識外の人物らしい。いや、それは充分理解していた事なのだが。

絶句する俺をそのままに、彼女、——鹿島 梅は話を続ける。

「実はね、私の住んでたマンション、あなたがめちゃくちゃしてくれたもんだから、追い出されちゃったの。それで、ここ二、三日で引っ越し先を探してたのよね」

そう言われて、半壊した鹿島の部屋が頭に蘇る。あれだけやれば、確かに近所の住民の苦情やら何やらが出そうではあった。

おまけにガラスまでブチ破った馬鹿も居る。事が事とはいえ、強制退去も納得というものだ。警察沙汰にならなかっただけでも有り難いだろう。

「で、新しいマンションはもう見つかったわけ？」

「ええ、おかげさまで良い所が見つかったわ。多少お金がかかったけど、私の望む最高の立地条件よ」

今度はどんな高級マンションなのやら。前の物件を見る限り、鹿島の家はかなり裕福なのは容易に想像がついた。

「まったく、羨ましい限りだぜ」

「あら、そうでもないわよ。私の新居はこの部屋の隣だもの」

オーケー。　どうやら今日は遥さんの所に行ってる場合じゃない

ようだ。

保険証が財布に入ってるのを確認しつつ、俺は最寄りの耳鼻科がある病院に電話をかける。

「あ、もしもし。 すいません、耳がおかしくなったようなので診察の予約をお願いしたいんですが。」

——ええ、ちよっと人間の言葉が理解できなくなっちゃって。 新居が俺んちの隣ってどういう意味なんですかね？」

俺の言葉を悪戯ととらえたのか、病院の受付らしき声が丁寧に「精神科での診察をおすすめします」と一言残して通話が切れる。

「……あなたって、意外と馬鹿なのね」

「うるせえ。 質の悪い冗談には、質の悪い冗談で返すって決めてんだよ」

この場合、俺の冗談で迷惑したのは病院の受付だけだが。

「失礼ね、私のは冗談じゃないわよ。 これから色々よろしくお願いしますね。 お隣さん」

その言葉を聞いて、俺は脱力してしまう。

目の前の鹿島は、何を考えているのか、そんな俺の様子を見ながらほほ笑んでいた。

02

「そ、それで、鹿島先輩、そのまま隣に引っ越して来ちゃったの！」

？」

翌日の昼休み。八代とアビ子を資料室に呼び出した俺は、昨日の出来事を説明する。

さすがにこの展開には二人とも驚愕したようで、考えが追いつかないのか、はたまた呆れ返っているのか、二の句もつげずに絶句していた。

「まったく。意味がわからねえっての。いきなり現われたと思ったら、引越しの挨拶だからな。」

おまけにその後で荷物運びまでちゃっかり手伝わされる始末だ」

「はあ、なんていうか、凄い行動力だねえ。でも、なんでまた諏訪くんちの隣なのさ？ まさか、まだ命を狙って……。」

「縁起でもない事言ってんじゃねえよ。俺だって知らねえっつの」

そんな事恐ろしくて聞ける訳が無い。

だいたいうちの隣には、一人暮らしの大学生の兄ちゃんが入居していたはずだったのだ。それがいつの間にか退去していて、鹿島がそこに住む事になっていた。

鹿島は「多少お金がかかった」なんて言っただが、まさか金でも握らせたのだろうか？

どちらにしろ、そこまでして俺んちの隣に引越す理由なんて怖すぎて聞けない。俺はチキンだ。ああ、チキンだとも。

「——フ、フッフ、フハハハ！」

いきなり、それまで黙っていた八代がフルフル震えて、けたたましく笑いだす。

「な、なんだよ。　とうとう頭のネジが全部抜けたのか？」

「これが笑わずにいられるか。　覚悟しろ秋葉。　これは貴様の責任だ。」

お前の軽率な行動が引き起こした結果なのだ。　まったく！　だから言わん事ではないっ！！　この馬鹿めっ！！」

「な、なんだよ」

「フン——まあ良い。　これでまた多少は面白くなる。　今までは大した邪魔もなく、あえてセクハラを抑えてきたが、これでその必要も無くなったという訳だ。」

フハハハ！！　オラわくわくしてきたぞっ！！」

八代の何かに火が付いたらしく、俺にとっては迷惑以外の何物でも無いやる気をたぎらせ、そのまま資料室から出て行ってしまう。
一方的に罵倒された俺は、ただ嘆息を吐くだけしかできず、その姿を見送るのみだった。

「あちゃー、八代ちゃん、アレはヤル気だねえ。　諏訪くんも大変なこと」

「何をヤル気なのか考えたくもないけどな。　やれやれ過ぎて言葉もねえよ」

アビ子が苦笑しつつも、どこか楽しそうにそう言ってくる。
それは、ここ最近には無かった顔だった。　久々の明るい？　ニユースで、落ちていた気分も少しは持ち直したのかもしれない。

「——まっ、何にしても、生きてりゃめっけもんだよな」

「うんうん。　そっいう事だね」

とりあえずはそれで良しとしよう。

俺達に出来る事なんて、そのくらいのものなんだ。

03

放課後。　ダラダラと歩きながら昇降口出て、校門を抜けると、もう一人の待ち人が俺の前に現われた。

「やあ、少し時間あるかい？」

そいつは手に持った二本の缶コーヒを差出しながら、出会った頃の柔和な笑みを俺に向けてくる。

「——ああ。　奢られてやるのも悪くないな」

俺の返事に、田原は「良かった」と安堵の声をだす。　その声にも表情にも、あの鹿島のマンションで見た危険な雰囲気は感じない。

校門から一旦、中庭まで場所を移し、皮肉にも俺達は、初めて会話をした中庭の簡易テーブルに腰を落ち着けていた。

移動の間、俺も田原もとくに言葉を交わす事はなく、今もただ、

向かいあわせに座ったまま、どちらも言葉を発する事はない。

そのまま缶コーヒーを半分ほど胃の中に流した辺りで、田原がふいに沈黙を破った。

「——どこから話すべきかな」

「どこからでも。誘ってきたのはアンタだぜ」

「それもそうだね」と田原はお得意の困り顔で返してくる。

「やり直そうと思うんだ。あの、君と八代ちゃんに負けた夜から、これまでの僕の人生を。これからは自分の思うままに生きていこうと思ってる」

やけに晴れ晴れとした顔で、そう言う田原は、どこか達観したように空を見上げる。

俺は何も答えずに、缶コーヒーをあおった。

「手始めに、学校も辞めてきたんだ」

その一言で、俺は口に含んでいたコーヒーを思わず吹き出してしまった。

「——はあ！？ まじかよ！？」

「ああ。別にこの学校に居る意味なんて無いからね。これから事を考えれば、むしろ学生なんて身分は邪魔にしかない」

「いやいやいや、思い切り良すぎだろ。親はなんも言わなかったのか？」

「僕の家は昔から放任主義、いや、放置主義みたいな感じでね。

「お前の好きに生きろ」って言うてくれたよ。

知らないのかい？ ギャルゲーの主人公の親はみんなこんな感じだぜ？」

それはかなり偏った意見の気がするが、自分の親の事を思えば、否定もできない。

いや、俺はギャルゲーの主人公ではないけども。

「そもそもお前はそのギャルゲーの主人公視点をどうにかしろよ。いい加減ゲーム脳にもほどがあんだろ」

俺の返しに、田原は声を出して笑う。

「プツ——ハハハ。 そうだね。 僕はゲームの登場人物なんかじゃなかった。 それどころか主人公ですらなかったんだ。

僕は田原 誠でしかありえない。 まあ、その事を理解するのに、随分と時間はかかったけどね」

「今さら何当たり前の事を言ってるんだ」

「その事に関しては心から謝罪するよ。 君にも八代さんにも、だいぶ迷惑をかけた。 いや、こんな言葉じゃ足りないのは分かっている。

僕はとんでもない事をやってしまったんだしね」

あの日の事を思い出す様に田原はそう言うと、いきなり椅子から立ち上がり、真っ直ぐに俺を見る。

「すまなかった」

誠心誠意の謝罪。その言葉を体現する様に、田原は深く頭を下げた。

「やめる馬鹿。だいたいそれをするなら俺じゃなくて――」

そうだ。その謝罪を受ける相手は、俺や八代じゃない。今回のゴタゴタで、一番被害を受けてるのは、たぶん鹿島 梅なのだ。

「――うん。鹿島さんにもちゃんと謝罪をしたかったんだけどね。一度、会いに行ったら、「二度と私の前に現われないで」って条件をだされちゃって」

「なんだそりゃ？ つうか知ってんのか？ 今、あいつ俺んちの隣に引っ越してきてんだぞ！？ 責任者ならちゃんと管理しとけよ。こっちは怖くてたまんねんだよ」

俺のその言葉を聞いた途端、田原は鳩が豆鉄砲を眼球に食らった様な驚きの表情に変わる。

まるで今知ったようなそんな反応に、俺の不安がどんどん大きくなっていた。

「――そうか。君は僕なんかじゃ比べられない苦労持ちになりそうだね。 同情するよ」

「同情なんかいらねんだよ！！ なんだその「もう他人事です」みたいな言い草は！？」

「仕方ないよ。僕はもうマツリちゃんを選んできましたからね。もう彼女以外は正直どうでもいいんだ」

「お前ちよつとキャラクター変わりすぎじゃね？ でも、ああ……やっぱ本命はそっちなのか」

なんせロリ原さんだからな。こいつの条件にあう女なんて、法律を遵守するならマツリぐらいしかないだろう。

「それでも、もう少しマツリちゃんを待たせてしまう事になりそうだけどね。とりあえず、彼女が学校を卒業するまでは会わないつもりなんだ。

僕もそれまでに、色々やらなきゃいけない事もあるしね」

「どんだけ我がままなんだよお前」

「そういう風に生きるって決めたからね。いや、これが僕の素なのかな。

とりあえず多分これで、君と会うのも最後だ。——と、悪いけどもういくよ。これからデートなんだ」

田原はそう言って、腕時計を見たあと、胸ポケットから映画のチケットを二枚取り出す。それは以前、田原の家で八代が見つけたものと同じものだった。

「この映画、ずっとマツリちゃんが見たいって言ってたやつでさ、前に買ったやつは、君に負けて消えてしまうと思ってたから、結局行けなかったけどね。

これは新しく買い直したんだ。今日のデートで、マツリちゃんともしばらく会えなくなる。最後のデートってやつかな」

「臭えこと言ってんじゃねえよ。それに最後じゃねえだろ」

「そう言えばそうだったね」と、田原は最後に見慣れた困り笑顔を
見せ、そのまま中庭から去っていく。

俺はなんとなく座ったままその姿を見送り、完全に冷えてしまった
缶コーヒーをぐいっと飲み干した。

「……不味い」

こうして、俺とハーレム主人公との対決は終わった。たぶんこ
れは、八代が言う様なハッピーエンドではないんだろう。

それでも、これでいいのかもしれない。成る様に成った結果だ
と思う。

俺の気苦労だけが増えた気もしないではないが、それはまあ、良
しとしてもいい。

そう思えるくらい、なんだか悪くない気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7285p/>

青春はそれを我慢できない。

2011年10月5日23時55分発行